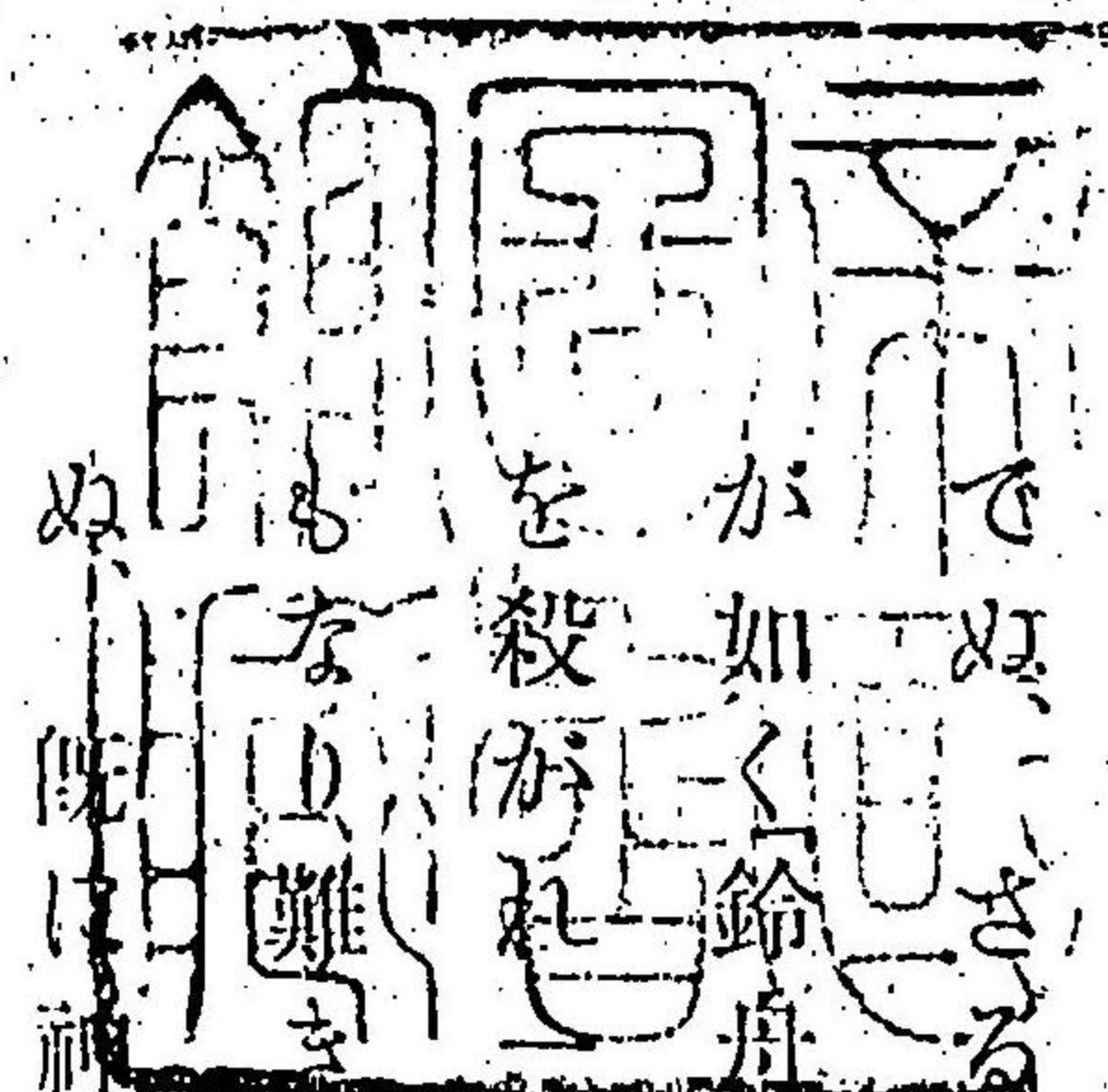
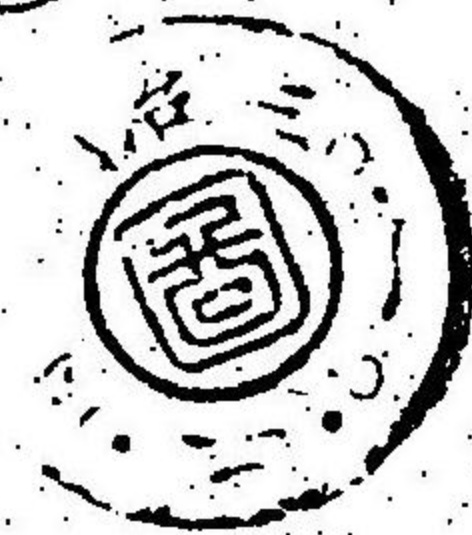


不思議な事もあればあるものかな、八月七旬に起稿せし

「鈴舟」の漸う十九回迄出来上りし折柄、柳浪子が河内屋田



でぬ、さるに其脚色の或ふしと、は殆ど云合はせたらん  
が如く「鈴舟」のに似通ひたり、著者これが爲に甚しく神興  
を殺がれ、且は筆を折り稿を焼かんとほりしたれど、左  
もなり難き仔細もありて遂に碧玉のあとに燕石を投出し  
ぬ、既に神興を殺がる、駄作たるは勿論なり、但「露の蝶  
のあるあり、無鐵砲に打出したる二つ玉の、先なるは果  
敢なく的を外すとも、後なるは讀者のほてッ腹を、見事

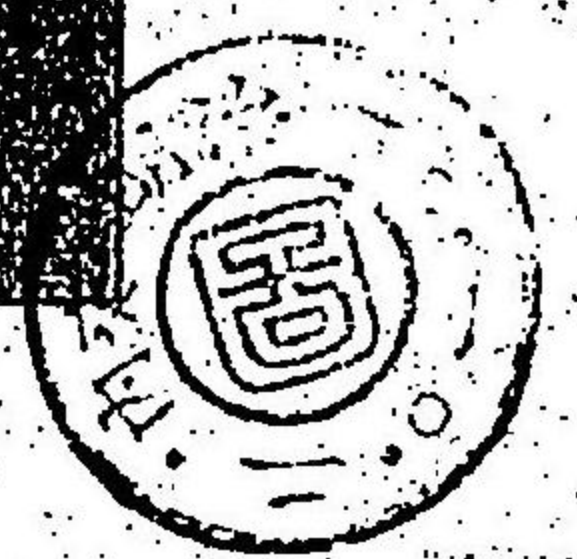




に打抜いて御日に懸けん。

著者白

退て斯様申上置きても尙「鈴舟」の脚色を剽竊なりなど申さる  
人あらば、住所姓名御通知あれ、著者馳参つて御首級申  
請けん。



印石堂陽信

同松

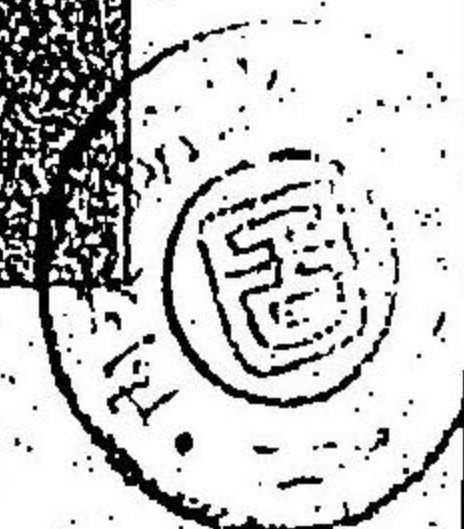




印石堂

風急無能起塔新

同





# 新小説第五號

## 鈴舟

三木天遊

(一)

野末の萩の上風、今宵初雁や音信れむ、園生の萩の下露を我が秋と鳴く鈴虫の聲すなり。

潮の音も今秋五、月待つ程の夕間暮、木の下閣の風の音に晝の暑さは昨日になりぬ。湯上りの肌涼しきより海邊に、引懸けの儘の浴衣揃合せて、帯無ければ亂るゝ小裙を右手に取り、左手の水桶に洗髪、髪の後れを梳きながら、急がしき足取りに母屋の方へ操傳ひに行く娘、通りすがりの小舟の前で立ち止りて、障子越しに室内の景色を伺ひつゝ、喜さんと聲を掛けぬ。

返事の無きに少しく小首を傾げ、暫しは無言に聞き耳聳てしが。喜さん、居なりのと此度は少許障子を引開けて、閣の中に透かし見つ、聲せぬと微ながら人あるべき物音もするに、反て驚き、あや／＼居るのかえ、私は又居ないのかと思ふたに。何をして居るの此昏さに火も點けで、何







と、彼は較べ見て眉を擡め、成る事なら喜さんのと取換へて貰ひたけれど、それもお前の不承知が知れて有る故、今一箇買うて頂かうと思つて、實は昨日も阿爺様に御願ひ申して見たなれど、と云ひ掛けて何を思出せしか左も嬉しげに打笑ひ、爺様は怖いお顔附きで、時々御申儀を仰やるぬえ、昨日もね、まア可笑しい事を眞面目に爲て、ホ、今思ふさへ可笑しくて可笑しくて、と尻目に妹の顔を偷見つ。けれど其時は何様にか羞かしかりし、と由ありげの言葉を故と切りて、後を云はぬは問へがしの心、眞に爺様は可笑しい方よ、と片笑唇に獨語ち、少しく顔を背けたるに燈火の光けさやかに差添ひて、またくるき目潮の色も、心の中も、見え透くやうなり。

(一一)

云はぬは謂ひたき餘りにして、隠すは匿されぬ胸の裡なり。心の水の一滴を、つい漏らしたる笑の聲、思の糸の緒を、やゝ綻ばしたる言葉の端、孰れか包み切れぬ嬉しさにあらざるべき。

姉は身一つに秘め兼し心を、問へがしの謎に掛けて、聞いて貰ひたき思をほのめかしぬ。され

ど妹は言葉無かりき。

妹は身一つの物思ひに心の隙無く、慰むる姉を五月蠅がりて、去ぬがしの思を物言はぬ不興顔に現しぬ。されど姉は悟らざりき。

姉は笑を誘ふ心に笑て見せ、可笑しがらさん爲に可笑しがれども、妹は聞て聽かぬ空耳に、見れど視えぬ涙の目に、情ある言葉も意ある笑顔も、所詮は空吹く風の音、高嶺過ぎ行く雲の影なり。

妹は憂たてさの餘りに他の笑顔も心憎く、姉は嬉しさの餘りを他にも願けて遣りたき思、彼方は共に笑はんを願ひ、此方は飽迄獨り泣きたし。結局は春風の心優しく、温き香りを送りて静に勝へど、岩根の松は梢もほづ枝も靡く事なく、諸手に早瀬を堰き止むれど、流るゝ水の心は他處に逝きぬ。

心盡しは皆晝餅になりて云ふ程の言皆聽かれざるに、遣の姉も力を落して徒勞なる口を嚙みしが、尙可愛げに妹の手を揉りつゝ、慰めたげに瞋る目に哀憐の色は清く浮びぬ。

談話は茲に絶えて二人は無言、風の音は次第に更けて虫の音は愈よ静けし。今宵立待の月さし出で、見倦まし庭も新なる眺めなり。



姉は詮方無き儘端近く膝行り出で、遙かに雲の行衛を眺め遣り、樹立を渡る月を仰ぎて何事をも忘れ果てたる面持、小聲ながら節面白く琴歌を口誦みて、指先軽く竹椽を振鳴らし、これに心の浮立ちて、世も人も無き無何有の郷に遊ぶかの風情、左迄は麗しからぬ天質ながら、月光を浴びたる無心の笑顔の神々しきばかり美しく見られて、今宵は尊き迄に清らなる風采、不覺に物珍らしう眺めらるゝに遺の妹も何時となく見惚れて、其目も次第に月に移りぬ。諸の聲は漸々に高くなり行き、月もや、高く澄み昇りぬ。彼れに聴き惚れ此れに見惚れ、少時は恍惚として我を忘れしかの此方の娘、遠にふら／＼と烟の様に立上りて其儘姉の方へ浮雲の如く飛行きしが、何思ひけん忽ちに又踵を返して馳還り、玲瓏たる月影を畏るゝかの如く目を背けて、良久し闇なる方を昵と瞻め、石像の如く其處に衝立ちて身退きも爲ず、瞳も爲ず、宛然目を遮ざる幻影を一心に打贖るかの風情なり、

愆くとも知らぬ姉は餘念無く竹の小琴を播鳴して靜に一曲を奏で了り、不圖妹を顧眄て。快げなる笑みを傾け、喜さん月でも見なさいよ、少しは心も紛れるから。私は此處で琴の復習を爲て居ますよ。此様が琴だよ、いゝ琴だ、コト／＼いゝ琴だ。おや／＼此れは佳い地口に成てゐる。ねえ喜さん鳥渡と聞きよ、良い琴を奏て好い事ねえ、殊にコト／＼いゝ琴は滅多に世間

(三)

に無の琴で、まことに珍らしいことだから、事々しう自慢を爲ても可い事だ、オホ／＼／＼如何だえ巧妙いでせう、と獨り口早に喋り續けて、獨り聲高に打笑ひぬ。

されど妹は、嬉しげなる其笑顔を憎さうに一瞥見て、思々しうに眉を擡め、五月蠅さうに顔を振り、言葉も無く返事も爲ず。

昔忍ばしき鴨野の月、今も遺に清堀村の秋に残れり。春は軒毎に見る桃山の花の雲、早晚寢覺の手枕に時ならぬ雪を怪しみぬ。尙程近き梅が辻へ往來繁き鶯の聲、猫間川を越て來る櫻の宮の風の香り、孰れ朝夕の心を奪ひぬ。夏は人毎に待つ眞田山の時鳥、仰ぐ空にも盛追ふ子や聞漏らすらん。夕されば窓を叩く大坂城の松の聲、網島の歸帆の風如何に、其處に涼舟の數々川を埋めぬ。秋は萬頃の田毎の月、膽駒信貴の山を眺めて娘捨の俵を忍ぶべく、冬は千山の雪の朝、大長寺の鐘を數へて廬峯の夢を現に見るべし。

此村の巽、小家勝なる夕顔の軒の末に、虚空を睥む鬼瓦の數見えて、豊井へし高殿の玉簾の廻り連れる一構への邸あり。村人の膽を潰したる長普請も一昨年夏、漸と板圖の取除られて、



唯見る高塚冠木門、星新右衛門と記されたる表札は、見越しの松の小枝に隠れて。主人は今年五十有餘と聞えられた、無闇にでぶく肥太りて顔も稚々して膩きりたれば、顔の皺も多くは隠れて、打見たる所は最高が四十四五と後家の質屋も相場を立てたり。殊に珍らしきは四斗樽も三合を避くべき其太腹、此れに何斛の酒や容るべきと、出入の酒屋首を拵つて見惚れしとか。

其所此所の會社の重役會議株主總會などへ渡せらるゝ時、洋服姿の可笑しさは洋行歸りの布袋和尚かと眺めらるゝ事、手用車の數々皆合乘を少許小さく爲たる別談へなる事、夫れさへ狹苦しと愚痴を翻し玉ふ事、曳くに其腕車の無茶苦茶に重き事、自然其輪の無闇に早く損ずる事、酔ひ玉ひての夜歸りに車上に舟漕ぐ大兵を乗せて、更き入るゝ野路の危き事など、總て此御邸の抱への車夫源吉なるもの、談話の種にて、野良働きの老爺迄が、鉞投げ出して聞いて笑ひぬ。辛きは奉公の常ながら、別して辛きは車夫の勤め、而も御邸も數あるに、選りに擇りて斯る肥大の主人を持ちたる我が身の因果を憐れみ玉へと、泣くやうに笑ふ此車夫の愚痴の繰言、成程彼の旦那ならばと田草とる娘も、笑止ながらの腹を抱へぬ。

元此紳士は土佐堀に住みて一時株式市場の大手筋と云はれしが、近頃遠に投機の業に念を斷ち、

此村續きの某村に新に紡績會社を創立し、己れ其の重役たるより、一つは出社の便利の爲一つは老を風月に養はんが爲め、邸を此に移しけるなり。されば昔の本宅今は反て別荘と呼ばれて、其處に愛妾と峰と云ふ若き女、耳の遠き母と十二三なる妹との三人暮らし、廣き邸の無人に寂しく、お定りの下女一人小猫一疋を心頼みに、まめやかに住み詫びぬ。

妻は先年果敢無くなりて、さらでも目に入れて痛からぬ二人の娘の、母無き不自由さをいぢらしく、是れを思ふに不便さ可愛さ一層募りぬ。姉は初野とて今年取で二十歳、妹は喜美子とて二九の關も去歲となりぬ。孰れ劣らぬ桃櫻と口巧者なる近隣の内儀等は偏頗なき挨拶を申せども、誠喜美子の花の色香に消壓されて、初野の望淋しげなり。

されば假にも紳士と云はるゝ程のものは喜美子と面識無きを口惜しき恥の一つに數へて、見たりや布袋紳士の辨天娘、聞かずや其の音聲に堪能なるを、寄れば必ず此際一日の口を絶たざりき。これを聞く新右衛門次第に鼻は山より高くなりて人の前には毎も喜美子の自慢嘯、老聲は五月蠅がれと若きは五月蠅きをも五月蠅からず、聞き倦くべきを聞きも倦かで、咽喉を鳴らしていでや此かぐや姫、譬へば蓬萊の金の花龍の颯の玉を採りても我れ申請けんと力味返るを、新右衛門は笑ひて、此竹取は左様な結納存じも寄らず、娘も左様な愁を云はず。但し我が



眼に適ひし喜美子の舞金は、未だ當地に無きやうなりと、高慢なる皆、嘲むが如き笑顔、必定これには仔細あるべしと心憎く思ふもあれば、餘りの高價を附けて可惜物を賣損ぬるなど口を利くもあり。今日迄引きも切らぬ縁談沙汰一々に頭から断りて探合はず、星家に通ふ媒人の數々二度と圖を跨ぐ事なし。唯其相談を聞くや否や、新右衛門太腹を丁どたゝいて、吾が舞は此に在りと、膠も無き謝絶文句何時も變らず、立聽く喜美子も合點ゆかね限りと心細し。浮世は何事も偏り易く、人は高い處へ土を持ち運び低い處を掘りたがる習ひ、遣らぬと云ふ喜美子は無理にも是非とも強て達てと様々に言葉を賣て要賞ひたがり、中には我等と御身の間柄永年の情誼に此れは曲けても承諾ありたしと、仲人を目倦しとて直接に迫る當世風の老人さへ有る程にて、新右衛門其五月蠅さに困り切れども、姉初野の舞養子は探すに穿く賞ひたきは呉れず、呉れべきは此方が可厭にて、兎角妹とは反對に、果敢々々しからぬ縁談調はず勝なり。されど高慢なる新右衛門、我が頭を下げて迄も、我が手を疊につけて迄も、舞に呉れよと願ふに及ばず、彼方より忝なしと平伏して冥加の程を喜ぶにあらずば、半銭たりとも財産を讓渡すこと叶ふまじと、心永く詮索厳しく、少しも急がぬ面色を作りて、心燃る胸の裏を、落附顔に塗り隠しぬ。

急げば迂廻れの世路に馴れて、走りたき時には反て一服する程の新右衛門に案外速成の功多し。妹娘の縁談には高慢を吐く迎無理とは聞かねど、容色も十人並が考物たる姉娘に迄、あれでは迎もと皆人の危みたる舞養子も、何の苦も略定りぬ。彼の紡績會社の支配人に櫻井清といふ敏腕家あり。才智萬人に秀でたれど己れの技倆を自由に揮ふべき資産無きを儘ならぬ浮世の恨みとして、始終他の器械たるを口惜しがり、身は風あり船頭あり艫あり舵ありて、唯一の大切なる帆の無き船に等しきのみと、是を口癖にして目前の彼岸に達し難きを悲しみぬ、元來某會社に役員となりて永く面白からぬ月日を送り居りしを、今の社長創立の際より引昇げて此椅子を與へたるなり。其弟に春雄とて今年二十四歳なるが、嘗て東京に遊びて經濟學を修め此夏全く業を卒へしも尙未だ歸郷の運びに到らざりし間に、兄清と新右衛門との約束既に成りて、本人に否や無き上は、歸り次第結婚を急ぐべしと媒人なしの相談埒早く、こゝが文明的と新右衛門得意の高笑、譬へば虎の嘯き龍のいぶきを欺くばかり、其聲四壁を動かしたる大満悦、それも二月以前となりぬ。寫眞の遣り取りも濟みて先は双方異議なしの目出たさ、此上は新右衛門の望として、勿論清の弟に愚物あるべき筈も無けれど、互に一面識なきは互に何と無く氣濟まぬ所ありて宜しから



ず、一度にても面會たしとの申條、人物を觀ての上との意を籠めつ。それこそ春雄も望む所  
 と、清は異議無き上に大賛成の旨を告げて、今日は弟を伴ひて星家を訪ふべき筈となりぬ。  
 是れには初野との見合の心もあり。

(四)

心待ちなる車の響門前に停りて、足音を關に近づけば、そりやこそ御入來と下女は俄に鳴りを  
 静めつ、天下晴ての御役目猜めくと出迎へに立つもあり、廊下に添ひたる障子を沽めして穴  
 を開け、花簪遅しと覗くもあり、周章して化粧部屋迄飛で行き、櫻井様唯今御入來と要らざる  
 注信忠義顔に、さても垣間見たさに引返し様、蹙きて胸を破るもあり。  
 氣弱き初野は斯くと聞てア何せう、と鏡臺の前を飛退き、宛然其人目前に見れし程に驚け  
 ば、襟足を塗り居たる中年増の女中思はず吹出し、あらまア其様な怖しう覺召すの、それで  
 は肝腎の御婚禮の時は何と遊ばす。其時は何れ程も厭やでも逃げる事は出来ませず、否應無し  
 で御座いますよ。さうなれば遠の貴娘も嬉しうて嬉しうて、つい怖い事も忘れ為さいま  
 せう、と打笑ふに顔を染め、あら厭やだよ菊は、まだ能く極まりもせぬに、といふを打消し何

の何の、最う極まつたも同じですよ。今日お見合ひを爲さつた上で貴娘さへ御氣に召さば、且  
 那樣が何と仰しやるものですか直ち取極めなさいますよ。云はれ見合ひは眞の儀式だけ、寫眞  
 を御覽なすつた時に貴娘は最う疾くに御意に入つた筈。あらお隠し遊ばすわ、いへ屹と左様  
 で御座いますよ。態々寫眞を私に迄お見せ爲すつたでは御坐いませんか、目元が清様に似て  
 而して一眸に今一層も二層も立派とお褒め爲すつたでは御坐いませんか。いへ仰しやいま  
 したよ、あらお隠し遊ばすわ。幾許お隠し遊ばしても、それへ其お顔が何より證據、それそ  
 れ笑厩にお心が映て居ますよ。あのまアお嬉しさうなお顔、と指示せられて可厭な菊だど僅に  
 背くる羞かしの笑顔、溢る嬉しさを何に包まん隠す袖屏風も祖ぎの其の甲斐無く、覗くを可  
 厭よと打く真似して逃ぐるお菊を可笑しと睨みぬ。

最う最う御免、御免遊ばせとお菊は漸う背後に廻り、あれ如何しませう。切角塗た襟足が汚損  
 しになりましたよ。最前櫻井様と聞て飛退き爲すつた拍子に刷毛が外れたので御坐いませう、  
 まア折角骨を折てと思痴を翻しながら、拭き取て又笑ひ、鳥渡輝めたる眉の皺も目尻の方へ移  
 り行き、またがお嬢様、今日の見合ひの御趣向は眞に珍らしい御工風では御坐りませぬか。泉  
 水の島の築山の上で、貴娘と私が吾妻屋の内で煎茶を入れて居る所へ旦那様が庭を見せる



と云ふ積りで春雄様を伴れて彼の石橋を渡ても通りなすつて、お初野宜い處へ茶を持て来たな、一杯喫ませて呉れと云ふやうな掛言葉で腰をかけなすつて、つい四角張つた挨拶無しに濟まさうと云ふのですもの、眞に珍らしい上品な、而して手輕な御趣向では御坐りませぬか。旦那様が左様仰せで御坐りました、同じ娘氣と云ふ中にも、喜美子は遠に氣強いところも有る様だが、初野は氣弱い者だから成るべく羞かしう無い方法を考へた、一方ならぬ工風をしたと云うてお笑ひで御坐いましたよ。眞に貴娘は何事にも羞かしがる御性分、今日は十分氣を強くお持ち爲すつて端然と濟まして居らつまやいませよ。ツンと爲るのも悪う御坐いますが、餘り羞かしがつて狼狽など爲さると品格が有りませぬ。お茶を汲むのもお菓子を出すのも、皆私に致しますから、鳥渡御挨拶を爲すつたら貴娘の御役目は夫れで済むので御坐ります。後は上品に濟まして居らつしやれば可いので御坐ります。最前の様に櫻井様と聞くや否や吃驚なさるやうでは行けませぬ。今日は落附いて居らつしやいませ、濟まして居らつしやいませ。と云つてツンと爲るのも不可ませぬ。喜美子様がツンとした處は眞にも憎らしい程美しう見えませんが、實の所貴娘がツンとした處は宜しう御坐りませぬ、と云ひたき事を遠慮も無く云放ちて不禮と思はぬ皆、餘程馴々しき主従なるべし。左様注文が多くては私は困つて仕舞ふはね、

濟まして居てツンと爲るなどは六箇しい事ねえ、結局黙つて居れば宜いのかえ、と初野は尙も機嫌顔、鏡に映るをお菊は凝視め、小指に片頬を竊と突きて、此が貴娘の御寶ですよ、それ其の笑靨。何時ぞや喜美子様も姉様の笑靨が望しいと仰いました、眞に其の笑靨が男殺し、ホ、御免遊ばせや花嫁様に男を殺すとは禁句でしたに、ホ、お嬢様は斯うお見えを爲すつても存外お強いかも知れませぬ。ホ、御機嫌を損ねましたね、悪い事を申しました、最うく淫猥らしい事は申しませぬ。何卒御免遊ばして、と故と恐入りたる皆、ホニニ笑靨の癖が何處へか飛で仕舞ひました、と仔細らしう眞面目なる口調になり、其處で其の笑靨が御坐りますよ、其の笑靨が大層貴娘の御容色を引立てますよ。眞に女でも見惚れる程で御坐りますよ。ですからね、今日は是非其笑靨を春雄様に見せても呈げ遊ばせ宜う御坐んすか、是非何か好い機會が有りますれば鳥渡笑てお見せ爲さいませ、宜う御坐んすか屹度お見せ爲さいませ、と遊女ならば兎も角も、淑女に要無き媚を賣れと、言語道斷の悪智慧附けて、斯る事を忠義と思へる心根の淺猿しくも亦可笑し。

思ふ人には勿論、左も無き仇し男にも、好もし美しと見られたきは、世に於る程の女が持て生れたる病なり。敷へられて今更のやうに吾が笑靨の珍らしさ、お菊の言葉が嘘で無くば、見せ



たし見られたし幾許でも見られたし。笑へとは手易しき事幾許でも笑ふべしと、動き易き心の花は糸萩の、翫る風にも點頭く風情。

(五)

座敷には新右衛門の高笑、化粧部屋には初野お菊の高笑、臺所には下女の高笑、一家は高笑の絶間無きに、怪しきは喜美子涙合みて唯獨り、気分不快しと朝より居室に、夜具引被せて打臥しぬ。

舞の日の訝かしかりし素振に思ひ合せて初野は甚く此れに氣を揉み、朝の程は兎や角と慰めたれど五月蠅がりて物言はぬこと例の如く、強て問ひ迫ればお慈悲に去で下されとの尖り聲、取り着く島を失ひて詮方無く、辭も竭きて手持不沙汰に引返しぬ。

午後は身の忙しさに取紛れて、忘るゝにはあらぬと喜美子の事を思ふ隙無く、化粧身仕舞の濟みて後は、見合ひの時刻の近くを辛く、時計の軋む音に伴れて胸の動悸も次第に高し。

漸う小袖も着替へ、お菊の身仕舞も濟み、新右衛門の差圖に従ひ座敷へ参らすべき薄茶を沫つる間も、心なき下女の口々に、或は三枚重ねの小袖を褒め或は織物の帯を稱へ果は化粧の引

立つお顔と無慮遠に容色迄も品評して、前より後より右より左より見上げ見下し、右顧左眄、無闇に御立派御立派と騒ぎ立てられ、何とは無しに氣差かしき心地して遠に人目のつゝまじき思ひ、若しや此處に喜美子の在らば一層面伏なるべきを、是れに初めて妹のことを想ひ起しぬ。

着飾りたる伊達模様の袖袂、餘りの晴々しさに他の恩惑を兼ねて、今日ばかりは綺羅びやかなる我が姿に、怪しく我が心の臆するやうにて、誰に見せんのか紅白粉と自ら問ひて赤らむ顔、自ら答ふる程も羞かし。

薄茶を持って行きしお菊座敷より引退りて、早や小聲に其人の噂。問うても聞たき胸の中を、五月蠅しと響めし眉に匿して見るも、見得を飾る女心の常なるべし。お菊は委細構はず袂を引きて、春雄様はお若い方にも似ず茶道も深く御心得と見えまする。茶碗を受取るから飲み干す迄一々法に適うて御手前も嘸と奥床しう存じました。と些細の事に甚く感入たる面色を作りて呢と初野を凝視する其眼、何時の間に主人の腸を觀徹きしぞ。左様かえ、それはまあア、と事も無げに聞き捨たる風の優柔なし。

折柄座敷に手を拍つ音するにお菊は忽卒に立て行きぬ。吾妻屋の用意の報知にやと初野は胸の



躍りしが、それならば客へ知らさぬが馳走なれば必ず此れは外の御用ならんと漸うに思ひ返し、心静に一服の抹茶を飲みて氣を沈め、更に一碗を喜美子へと、傍なるも鍋に命じて持て行かせぬ。

持ち馴れぬ手に高價の茶碗の畏ろしさ、奉公馴れぬ鍋の胸の中には何時ぞや田舎にて見し芝居に、侍婢は茶入を破りて殿様の御手打に逢ひしを不圖想起し、愈よ此茶碗畏ろしくなりて持添へし服紗に一層滑り易きを悲しく、踏む足も安からぬ思ひに辛くして其居室に着き、やれ安心と飛ぶが如く枕頭に駈行きて、切邊に畏り、唯今も座敷へ呈げた序に御好物の薄茶一服、と致へられし儘の挨拶してお嬢様からと云ひ添へつゝ、無作法にも抱巻の襟元に差附くれば、喜美子は閉ぢたる目を睜きて屹と睨め附け、要らぬ、要らぬと顔を背けて其様なもの飲まぬと言へど、荒々しく叱り飛して矢庭に其手を搔拂ひぬ。

喜美子の見舞の音ならぬに、お鍋恐懼を爲して飛で歸り、委細言上に及べば初野は聞て打微笑み、お前は喜さんの嫌はれ者であつたものを、つい忘れてゐて悪い事を爲たど、左も無き事を己が失錯の様に悔しみて打消れたる面色。天晴御大氣などお鍋は感心して熟々と其顔を見上げ、お氣の善いお優しいお慈悲深いお嬢様に引替へ、小嬢様の氣儘者の疇疇持の威張りたがりめ、

旦那様の格別の御寵愛を宜い事にして何所迄僭上り爲さるゝやら、お嬢様を姉とも思はぬ罰當りど、未だ都ぶりに染まぬ田舎氣質の愚直一圖に初野の怒らざるを口惜しがり、不覺に口穢く罵りて、不禮云ふまいと窘められ、少許は不平らしく面を膨らし口を嚙み、其儘立たんとするを初野は暫時と叫止めて、茶碗は何と爲しと訊る下よりお鍋ハツシと額を叩きて、周章て、忘れて参りました誠に不都合ぞと面目無げに惜るゝ言葉、また叱らるゝかと恐るゝ見上る姿の罪の無き。初野思はず吹出してホ、ホ、お前はまア、夫程喜さんが怕いかえ、と叱りし後は奥底も無き高笑、また他事も無き打解け振りにお鍋安堵の胸撫下し、つい取て参りませうと欣立て行かんとするを、片手に制へて最う宜い最う宜い、また喜さんに叱られると悪いから、寧ろ放棄て措くが可い、折を見て私が取て來やうから、と飽迄憫れを懸けたる言葉にお鍋平伏して言句も出です。嬉しさ身に染み渡りて心の中には此お優しい何時忘るべき、故國では御奉公を悲しいものと聞て來たに、此お嬢様のも慈悲深さには泣かうとて泣けはせぬ、何の此れが悲しいものぞ涙は難有涙ばかり。



御氣分は如何で御坐りまする、今日は朝から忙がしいので不知不御識機嫌も伺ひませぬ、未だ  
 お顔も見ずで御坐いますよ。如何で御坐りますよ。何うもお宜しう御坐りませぬか。忙がしう  
 無いと例のやうに、お頭でも冷しながら御相手を致しますのです、とお菊は静に寝顔を覗き  
 て、目を瞑り居る喜美子の容子に甚く心を痛むる風情、眉を擡めて腫る眼は、眞心に耀けり。  
 喜美子は上目にぞろりと瞥て、また重たげに臉を閉ぢ、額に青筋をきり、と立て、先づ咳拂ひ  
 二つ三つ。癪てまた物凄き目を睜きて屹と睨め附け、左様だらうよ、嘸忙がしからうよ。左様  
 でせうよ。鳥渡此室へ来る間も無いでせうよ。さア何卒最うお構ひで無い、何卒最う去てお呉  
 れ。忙がしいので斯うしてゐる間も惜しからうから、遠慮無しに彼方へ去てお呉れよ。姉様の  
 事さへ爲てありや夫れで宜しからうからね、私の事なんぞ最う最う毫末もお構ひで無いよ。假  
 令病氣で死んだとて放棄して措けば可い筈だから、湛と左様するが可いのだよ。私は死んでも宜  
 いから姉様の御用さへ聞てありや可いさうだ。いゝを何うして夫れでは反て恐入ります、いゝ  
 を最うお構ひで無い。よくお忙がしい中をお見舞下さいました、何うして毫末も怒つて居ませ  
 ぬ、難有う存じますよ、難有うこそ思へ怒るなどは思ひも寄らぬ。さア何卒最うお構ひで無  
 い、いゝを夫れでは痛み入ります、さア何卒最う去て下さい、最う何卒お構ひ無く姉様の御用

を爲て下さい、さア何卒最うお構ひ無く、と顔を背けて、忌々しげに寝返り打つ。  
 途に無い皮肉の言葉にお菊は骨を剌られし思ひ、追に暫しは呆れ果て、目を丸くして詮方を忘  
 れしが、遽に又口惜しと胸に込上げて思はずも膝を乗出し、それは嬢様それはさア何を仰しや  
 います。私は最う左様なお言葉を承はりましたは、假令去ねと仰しやつても私は最う、假令  
 去ねと仰しやつても去にませぬ。また去なる義理では御坐りませぬ。ハイ最う貴娘がお厭や  
 でも、是非共此室に居ります。假令旦那様に何れ程お叱りを受けましても、假令初野様が何  
 程お困り遊ばしても、毫末も私は構ひませぬ、假令お暇が出来ますも、貴娘故なら私は毫末  
 も構ひませぬ。貴娘に左様なお恨みを承はりましたは如何して此儘去なれまする。  
 此儘去なれる私の義理では御坐りませぬ。誠に相濟まぬ事を致しました、改めてお断りを申し  
 まする、誠に相濟まぬ事を致しました、と見向きもせぬ喜美子の背後に叩頭くを、いゝえ夫れ  
 には及びませぬ、反て夫れでは恐入りますと空嘯く意地悪さ。餘りの事とお菊は涙になりて詰  
 寄り、顔を火のやうにして聲を顔はせ、成程如何に忙がしいと今朝から一度もお見舞ひ申し  
 ませぬ、今頃になつて参りましたのは、夫れは最う私が幾重にも悪う御坐ります。ですから  
 お叱りは幾許でもお叱り爲されて下さいまし。お叱り爲すつてお叱り爲すつてお腹の癒る程打



つなり擲くなり陥むなり蹴るなり爲すッて下さいます。それならば毫末もお怨みに存じませぬ、けれど唯今のお言葉は彼れは何で御坐りまする、餘りでは御坐りませぬか。愛相盡かしを仰しやるまで餘りで御坐りますよ。姉様の事ばかり爲るが宜い、私の事は放抛て措けなど、夫れは貴娘餘りで御坐ります。其お言葉に私は胸を剌られましたと、お菊は次第に胸塞がり、暫時俯首きて言葉も絶えぬ。

ぬ、五月蠅いねえ最う宜しいよ。可いから何卒去でも呉れ。お前は無闇に怒る人だ、と喜美子は己が怒りを棚の上に、チヨツ五月蠅いと舌打鳴らしぬ。

(七)

お菊は漸うに頭を擡げ、ハイ如何で五月蠅い奴と覺召さう。幾許五月蠅いと覺召しても、私は貴娘がお嫁き爲さる迄は、假令如何様の事件が御坐りましても、お傍を離れは致しませぬ。ですから去年も既に國許からの縁談を断つて仕舞ひました。旦那様は其節も、古風な事は云ふもので無いと慈悲深い仰せでは御坐りましたれど、古風でも御恩は如何して忘れませぬ。貴娘様の爲に斯うして十二三年も御奉公を致しまして、一日も鍋釜を持たず、子守から直に小間使、

お針もお手習も琴三味線も貴娘と御同様練習はせて戴き、一人一人の身軀に馴けて戴いた御恩は、私のやうな馬鹿でも能く存じて居ります。昨年奥様御死去の後には貴娘様も萬事が御不由と存じ、これからが私の御恩報じと眞に身を粉にしても必死に成ての働き、二人の嬢様のお身の廻り萬端から表奥の御用、臺所の賄ひから三人の女中の取締、何から何迄私一人で引請て、何でも奥様の御主意の通り、經濟とやらを大切に守り御儉約を第一と心得、無い智慧を絞って御奉公致しますも、何かと申せば貴娘への御忠義と存じましての事。貴娘も無言及びで御坐いませうが、此度お簪様がお見えなされたら、財産を七分三分に分けて七分をお譲り爲されて、跡三分を旦那様がお持ちに爲て貴娘を伴れて戸籍だけ分家の名義に遊ばし、向後旦那様の伎倆で設け遊ばした金銀は一切貴娘の所有。其上御養子を貰て疑に申した財産ぐるみ譲渡しの濟みました後も、旦那様御存命の中は兎や角と御商法遊ばし、出来る程の金銀は皆貴娘の御簪様へ御残し遊ばすお考へとか、結構な覺召で御坐りませぬか。結局私し骨折て働きますも、實は貴娘の御財産を一錢でも無駄に遣はぬやうと、私は私相應な小さな考へで唯もう御儉約御儉約と夫れが一心。お鍋などは私を悪う申します、下女をもぎどうに使ふの、牛馬も喰はぬものを食はすの、お上へばかり御馳走を爲てそれで錢の要らぬを自慢するが、それは其苦、







に宜敷も頼み申しますよ、とあ三を歸らせて再び喜美子の傍に差寄り、嬢様それでは又後程。そしてね、最う程無う春雄様が彼の吾妻屋へ入来しやいますから、鳥渡彼の窓からでも覗て御覽なさいまし。それは、美しい方、誠を申しますと、初野様には過ぎますよ。オホ、ハ、ハ、まアさ左様にお鬱悒遊ばさず、些と浮々と遊ばし。初野様の彼の赤い顔が何様に赤くなりませるか、覗て御覽遊ばし。と云ひつゝも心急き、心急きつゝも尙饒舌りて、それでは又後程と、言葉は室内へ身は椽へ、口も足も走り勝なり。

跡見送りて喜美子は徐々身を起しぬ。荒々しう枕を投げ出し抱巻を突遣りて、庭に添ひたる窓の邊を良久し、呢と腫めて涙の絶間も無かりしが、次第に其目も餘所に移りて何時しか臉を堅く閉ぢ、果は倒るゝやうに俯伏に打臥して頭を蒲團に埋めたる儘、身動きもせず消入るやうに泣入りぬ。

斯くて三四十分時も過ちしと覺えし、遽に庭先の騒がしくなりて、其處此處に女の叫ぶ聲々彼方此方にあたふたと走る庭下駄の音、程近ければ聒しく耳に響きて、跡は一頓の梢の風誓しの秋を驚かしぬ。

喜美子はこれに漸う頭を擧げて耳を聳て、心靜に物音を伺ひつゝ、徐ろに起上り、片膝立て、

浮腰に坐りながら片手に胸先をぎつと抑えて、僅に睨きたる其眼差し、何故か怨みに閃きて爛爛たる光凌し。

(九)

次で聞ゆるは龍のいぶき虎の嘯きにも劣るまじき例の新右衛門の高笑、續て雲雀の鳴くやうなるお菊の高笑、其聲耳に入るや否や喜美子は狂氣の如く飛起ちて彼の小窓の下へ走り寄り、障子の穴の有りや無しやと周章狼狽き尋ね索むる頭上に近く、折宜し些かばかりの破れあれども稍高きに過ぎて便悪しく、憎くさは伸上り伸上れど及ばぬ背丈の及び難く、え、慙れたしと突破りたる障子の音、怪しと聞谷むる人は無しや、飛着くやうに差覗きたる面現はに、淺猿しと見谷むる人は無しや、それ等の懸念を一切忘れて、喜美子は全く夢中なり。

竹の格子も碎けむばかりに、恥と諸手に握詰め握詰め、障子の棧も掛けむばかりに、額を舞と押當て押當て、満身の力を腕に籠めて身は自ら浮上るばかりに窓に縋着き、一念全く双眸に凝て眼は自ら血走る色の凄まじく、屹と外面を腫めに腫めて腫きもせぬ其風情、怪しども訝かしども謂ふべきやうなく、今試に魔刃一閃若し其首を刎ねむには、魂魄頭と共に飛んで、



抑も誰が胸に喰入らむと、見るに怖ろし女の一念、斯くて岩をも透すべし。  
 果は其眼も次第々々に曇り曇りて、霞の如き涙は遠に止途なき迄に迸り、見る見る面色土の  
 やうになりゆきて總身わなくと戦き、譬へば秋たけて月寒き深夜の風に、枯れ残る花すゝき  
 の閃めき震ふかと物凄く、良久しは宛然悪夢に覺はれしやうに、喜美子は殆ど鬼相を爲して、  
 現心も爲き様なりしが、臆て苦しげなる溜息を漏らすと共に、忽ち我に復りけむ、呀と一聲  
 叫ぶや否や猛然として矢庭に窓を前の方へ衝くと齊して、身は後様に墮と倒れて、死なむばか  
 りに泣入り泣入り、悶へに悶へ、諸手に胸を搔擽り搔擽き、兩足跳て虚空を無闇に蹴散らし  
 蹴飛ばし、人目無ければ荒れに荒れたる半狂半亂、袖も袂も帯も裙も、煽り蹴めき端轉れ亂れ  
 て、白きは肌か雪を欺き、赤きは衣か花に擬ひて、滿天の雪の花と飛ぶか、萬葉の花の雪と舞  
 ぶか、孰れを孰れと見えも分かず、衣香自ら四邊に跳り、蘭麝の風颯と吹き立ち、これに搖  
 るは手活の床の野菊一輪、まだ早咲の散際さすがに脆く、意ありげに翻れかゝる二ひら三瓣は  
 るく。

\* \* \* \* \*

飽迄泣き、飽迄悶へ、涙も漸う収まり、心も次第に和らぎしか、荒れ狂ひし喜美子も臆て打靜  
 まりて頬の邊を袖に拭ひ、決然として立上りさま急ぎ蒲團の方へ歩み寄り、其儘身を投ぐるや  
 うに横様に轉びて、舞と手足を萎縮めに萎縮め、我ど我が胸を擒握りてまた一髪を動かさず。  
 慙くて泣呃りの聲も何時しかに歇みては、賊に野分の跡の朝朗き、萬山眠り萬木悄れ、音なき  
 落葉の甚ど寂しさを添ふるが如く、今は虫の息さへ有りや無しやと心細きばかり蕭然に打臥し  
 て、何とは知らず深く思案に沈みたる其の様ほどく死人のやうにて、僅に折々髪の後れ毛を  
 啣切る音のみ、関たる一室に徹けく響きぬ。  
 世は秋なり、此の一室に浮世の秋の哀れを集め、世は秋ながら、彼の四阿屋に浮世の春の樂み  
 竭きず。少窓一つの關にして、此處は涙の淵なるべく、彼處は巫山の風も通ひぬ。

(十)

此日より喜美子の病氣は頓に重りて又枕もあがらずなりぬ。三度の食事も一二度は望しうなし  
 と頭を振ると多くなりて、誰をも居室に寄せ附けず只獨り泣暮らす日數の積る程に、骨も肉も  
 一夜々々に銷り取らるゝかど疑ふばかり、見るく瘦せて見る目の心細し。



初野も菊は兼てより喜美子の音ならぬ素振に言はず語らずの心を痛めて、等しく胸裏には是れ戀故の物思ひぞと臆氣ながらに推察せしかば、今此容子を見るも遠に思ひ寄らぬ驚愕にはあらぬぞ、新右衛門は忙しさに取紛れて初めより何事をも見ず知らず打過ぎし今日と云ふ今日、ゆくり無く事の次第をお菊より聞き捨て捨置難しと早速身を起して病状を伺へば、花顔色無く土の如く柳腰肉落ち骨細りて、今にも死なむかといぢらしき姿、斯迄とは思懸け無き目前の大病を見る驚愕、さしも四斗樽のやうなる太腹は翻顛りて、遺の白腰も抜けむばかり、やの大變だ、瘦せたわくと一目見しまゝ大聲あげて馳返り、勿論の事醫師を迎へに源吉走れ、代診可厭だ先生早く直だ即刻だ。

昨日迄の笑顔も今日遽に打盛み、新右衛門太息して腕を拱き、玄關の次の室に默然として座り、空しく老先生の車を待てり。

誰も厭はしき、病氣ながら、新右衛門の之を厭ふの甚だしき、恐らく天下無類なるべし。他人の頭痛膏を見てすら厭はしき思ひのする程なれば、病人を一目見ても其日は終日得意の高笑の聲も立てず、萬一笑へばとて小聲勝なり。されば新右衛門が日課の一つなる毎朝の四方拜にも、己れと二人の娘は勿論、下女下男に至る迄悪病厄病免がれしめ玉へ、無事息災延命の程を、

八百萬の神々へ禱るを第一の願ひとせり、結句他の無病を望むは己が無病を望むに等しく、他の病む時は新右衛門、如何程健やかなりとも病めるに同じ。但し他は爾思はず、下人の息災迄毎朝御祈念遊ばすとは、勿躰無き迄に難有き御主人様と、幾人の下女の里親が田舎より上り來れば皆忝けなさに泣いて歸りぬ、祈て貰ふ當人は泣かれぬ嬉しさに泣くより忝けなく、如何な莫連も柏手の音聞く毎に、忠義をせねば罰が當ると御主人大事に身を慎みぬ。

怒る氣質のことなれば新右衛門身を斬らるゝより辛き思に胸を痛めて、明日にも今日にも死にせずやと片時も心安からず。何と思ひて玄關まで未だ來ぬ醫師を迎へに出しかど不圖氣附いて見れば、可笑しき迄に狼狽へたる我が身の馬鹿げたるを漸う悟りて、また臺所へ返りし事は返りしもの、尙氣の落着かて徒らに立ち居つ、立て居ても居立堪らぬ程醫師の遅きに怒れつ然らちつ、怒れても怒らちても源吉の歸らざるに、地軸を踏んで疝聲高く、火急の要事に源吉の鈍い奴が何を爲てゐるぞ鈍い奴め、誰ぞ早く源吉を觀に行かぬか、醫師を觀て來て源吉を何するのぢや、お鍋貴様行け、えッお三でも可いのだ誰でも可いのだ。あのそら源吉を何して早く何を何するのぢや、えッ解らぬ奴等だ、早く源吉を醫師が歸らぬから早く其何を早くせいと其醫師が、其何を爲ないと醫師が走つて行かないから觀に行けといふのだ。ム、お三が



行つたか、出来た彼れは足が疾い。ム、走るわ倒けるな、おい倒けるな怪我すな。ホ、ウ  
 最も行つたか彼れは足が疾い、車夫に爲れば醫師より反て、ム、何、醫師、では無かつた源吉  
 か、源吉よりは疾からうに、女だから惜い者だ、と何を云ふやら周章たりな此翁。  
 醫師といふ奴は實に何うも悠長なものだ、まだ來ないとは不埒なものだ、あの先生も老ては驚  
 馬か、緩急極まる。時は黄金といふ文明的を御存知無いか、文明的を知らぬと云へば源吉の  
 鈍い奴が何を爲てゐるぞ、利口なやうだが文明的を知らぬ所が馬鹿だ、今の若さに彼れでは實  
 に困る奴だ。歩べと云へば走り、走れと云へば飛ぶ、これが即ち文明的、それを知らぬは時代  
 後れた、と新右衛門は頗に小言を並べながら臺所の直唯中にムツと座りて一方ならぬ不興顔  
 萬事意に悖るを慤れたく、獨り業を拂やせど其甲斐なく、何時か手持不沙汰の氣味なりしが何  
 思ひけん其處なるも鍋に命令けて、初野も菊を疾く此處へ。

(十一)

何心無き兩人の膝を正して並ぶを見るより、新右衛門身を乗り出して居丈高に睨め附け、何故  
 なれば今日が日迄、喜美子の病氣を我にも知らせず醫師にも診せて打捨置きしぞ。以ての外の

不念と不埒とも不都合とも不行届とも不心得とも、云はうやう無き儀とは知らざるか。我より  
 言はずとも自ら其罪を悟て恐縮すべき筈なるを、遂に一言の謝罪も述べず、剩へ兩人揃ひも  
 揃ひて平氣な顔とは呆れ果る馬鹿者なり。我は今月上旬より社用頼に繁く外出勝に、尙引續て  
 の縁談沙汰に彼地此地と走り廻り、其上見合ひの濟みてよりは婚禮の用意に一刻の暇も無く、  
 食事も二度とは宅にて食はず夕景の外は留守の多き今日此頃、喜美子の上迄は兎ても注意の届  
 かね事なり。さるを其方等は何の爲に家内に在りて何の爲に留守を守るぞ。少許我が目の及ば  
 ぬ時あれば、直隸斯る不都合の出来、怪しからぬ次第頼み甲斐無き兩人なり。元來喜美子は物  
 靜な性質とて、多くは居室に閉籠り勝なれば、二三日其顔を見ざりしとて、格別我が怪まむや  
 う無し。其方等の不覺より我迄不注意の親と成りぬ。分疏あらば云へ聞かむ、何故なれば今日  
 迄打捨置きし、其の理由聞かむと、烈火の様に面を赤めて、顔へる憤怒の聲鋭く、膝を扱いて  
 急込み急込み、眼色を變て詰寄る見暮、遺の笑ましき布袋紳士も子故に患る鬼子母神なり。  
 新右衛門の瘡癩の珍らしからぬに馴れて、平素は左程に思はぬ二人も、今日といふ今日は身に  
 染ひばかり恐しく、何時か疊に手を突きて次第に頭の下がるばかり、順には謝る辭も出せず。  
 わけて氣弱き初野は、何と云ひて罪を免れむ何と云ひて怒を緩べんと、肚胸を衝く心配に冷汗



の額に鈍染むを覺えず、青くなりて顛ひ出し、途方に暮れては何より他を力草、お菊ばかりを心頼みに、早く何とか我に代りて、兎も角も御不興の弛ぶるやう、何とか宜きに云て呉れよと思ふ意を目に云はせて、恐るゝ夫れとなき、胸するだけが、一生懸命の働きなるべし。されども慙れたしお菊は悟らず。

二人の無言に愈よ燃立つ新右衛門、さあ云へ、云はぬか、辯疏あらば云へ聞かう、と尙詰寄て夫れ見よ夫れ見よ、一言有るまい、不埒至極、初野も初野だが第一に不都合なは、菊其方だ。其方を二人の娘の傳役と頼んだは斯様な不都合の無いやうにどの爲だ、其方は仲々見上げた者と思ふたに全く我が眼鏡違ひか、但しは増長して役目を忘れたか、孰れにしても第一に悪いは菊其方だ、元來其方は喜美子の子守で有つた者、喜美子とは切ても切れぬ主従の縁が有る、それに斯様に喜美子を輕しめて大切に致さぬは何たる事か、先づ此點が甚だ我の意に適はぬ。若しや喜美子が此儘に死なば其方が殺したと云はれても何と云解く言葉が有る、と昵とお菊を打瞞りて次第に膝の進むを覺えず。

氣の勝たふ菊の斯程迄に罵られて何時迄か黙すべき、此言葉に少しく顔色變りて稍乗出し、段々の御立腹一々御尤もでは御坐りますれど、と云ひながら聊か初野を顧て遂に氣を變へ、また

がお嬢様は何をも御存知無い筈、お叱り遊ばす事は御坐りませぬ、悪ければ私一人の罪。さアお嬢様、貴嬢様は御許を願つて彼方へ御退き遊ばしよし、え、宜しう御坐りますすと、貴嬢様は御叱りを受ける筋も無ければ何も御存知無い筈と先づ初野を無理に立たせつ。

(十一)

これに初野は飛立つ思ひ、さも嬉しげに昵とお菊を腫め、さも恐しげに卒度父を偷見て、疎々と又た施々と、戦々競々の笑顔に驚歩を走らせて、奮躍らむばかりに逃て行く無邪氣さ、あれで追付け奥様かと鼻には顔色さへ變へしお菊も、これには不覺に可笑しくなりて不圖新右衛門の氣色を覗ひ見るに、怒れと俾れと思愛は流石にて、子を叱る親も、子の逃足の疾きに笑みぬ。平常ならば其の後姿に新右衛門、例の高笑を漏らしたかりし所なれど、追に鼻の辭の手前左様も爲り兼ね、眞の義理だけに今尙不興顔を妝へども、初野を庇護ふ此の計らひの甚く己が意に適ひて、眞實胸の裏には順に怒の和さしのみか、腸の底の何處にか、遽に嬉しさの湧くやうな心地せられて、優しきお菊の心根よと寝めても遣りたき思もするに、何時迄已れを欺き得べき、睨んだ掃りの眼は次第に、ほれ〜と見惚るゝ眼となりて、自ら斯くとは悟らぬ不覺、一瞥に



女は能く他の賜を透観くといふに。

お菊は新右衛門の顔色を見て、今は早や心安しと遽に愛嬌ある笑みを傾け、稍膝を進めて扱旦  
那樣、如何にも此度の事件は私の不調法、不都合とも不埒とも誠に御詫言の申しやうも御坐  
りませぬと、今日迄貴方様の御耳に入れず打捨て、置き置きたるは些か仔細の有ります事。  
さ、其處で其仔細を申しまする前に、是非共御耳に入れましたいは小嬢様の御孝心、それはく  
御優しいとも御感心なども、何とも申様か御坐りませぬ。私のやうな涙脆い者は、感心の餘り、  
斯う申して居ります中、早や不知涙になります。其御孝心な小嬢様が、御孝心からの御失  
錯を遊ばしたら、其時は旦那様、貴方様は御叱り為さりますか、御叱り為さりませぬか、先づ  
此れを伺ひましての上、仔細を申上げませう、如何なもので、と顔を見られて、新右衛門は烟  
に巻かれたる心地、謝罪る筈のお菊が謝罪りもせで、無關係の喜美子を引出しての奇怪の間條、  
合點ゆかねど、元來子を賞められては天へも飛立つ新右衛門、猶豫なく首突き出して成程と首  
肯き、喜美子の孝心な疾くより我も承知して居る。それでは此度の不始末も其孝心からと云  
ふか、と訝しむ風情。さ、それならば貴方様も、御叱りは為さるまいと存じますが、如何で、  
と念を推されて、如何にも叱らぬ決して叱らぬ、と我知らずの誓言立て。それ聞て私も安心、

とお菊は愈よ満足の面持、それでは詳しいお話を致しまするが、御病氣は實は一週間以前か  
らで、御坐りましたのけれど最初は左程の事も御坐りませず、つい頭痛だけと存じて居りました  
が、四五日前、左様、丁度御見合ひの済んだ翌日で御坐りました、遽に御血色が大變に不可ま  
せぬので私も吃驚、直貴方様へと存じましたが、小嬢様は決して病氣を報知せて呉れる  
などの御言葉、それでは済みませぬと私も種々御諒め申しましたれど辛抱の出来ぬ病氣なら  
ば知らぬ事、これしきの事を事々しう申上げて、病氣は何より嫌ひの貴方様に、御心配をか  
けては子たる者の道に背く。頭が少々痛むばかりで外に何處も不快うは無い故、是非々々隠蔽  
して呉れ、決して云ふなど何うしても御承知遊ばさず。夫れでは私が旦那様に済みませ  
ぬ故、これだけは御言葉に背いても御報らせ申さんければと私が立上るのを無理に引止めて、  
是程事を分けての頼みを聽て呉れねば、お前を一生怨むぞ一生仇敵と思ふぞと大變な御不興。  
それでも私が復た立つ所を、病氣の所為でか少しは瘡の立つた小嬢様、寝ながら私の足  
を御捕りに爲つて、これ御覽遊ばし、と片足を前に突出し、眞平御免遊ばし、誠に失  
禮では御座りますれど、と些か裾を搔遣りて、これ此通り搔擽て口惜しがッてお泣き遊ばすの  
で御坐ります。是程一心に覺召すも御孝心の餘り、私も感心致しまして、思はずはろりと致



しました。其御心を察しますれば左様々々もぎどうな言も云ひ兼ねまして、兎も角も旦那様の  
 お氣が附く迄、と斯う存じましたのが、私の不調法、誠に申譯も御坐りませぬ。唯小嬢様の御  
 孝心に、つい絆された私、知れた時の此御咎めは其時から覺悟の上、と申すも餘りづぶし  
 いので御坐りまするが、全く右様の譯で、と語り畢てお菊は俯向きぬ、さしぐむ涙を拭ふにや、  
 拭ふ眞似を爲て見るにや。

腕を拱きて熱々と聽き居たる新右衛門此時噫と太息して、喜美子は誠に孝心な者では有る。  
 併し餘り孝行過ぎて、病氣などを隠して呉れて、夫れで若し大變な事に成らうものなら實に取  
 り返しのならぬ事。餘り孝行過ぎて反て親の身は心配する、今後とも斯様な事を隠して呉れて  
 は反て困る。又た妙な事を云出すやうなれど、亡くなつた彼の母が此孝行を聞たらば、無や無  
 泣て喜ぶ事でも有らうに、と新右衛門は思はずもほろりとして普しは辭も中絶えしが、纏て又た  
 深く嗟嘆して打慟れ、世間には不孝な子を持って泣死に死ぬる親も幾百人數も知れまいに、我は  
 宿世に如何なる功德を積だものか、誰しも皆新右衛門殿は何と云ふ御果報な御生れぞ、二人の  
 娘御が揃ひも揃うて御孝心な、何より其れが羨ましいいと云て呉れる。眞に我も二人の孝行が忝  
 けない程嬉しいわ。えだが親の心は又た格別なもので、あゝお母親が有つたなら、未々氣儘は

かり無理ばかり、云ひたい三昧爲たい三昧に親を困らす年齢で有るに、一人の親と思へばこそ、  
 一層我を大切に斯迄孝行を勵むで有らうぞ、萬事片親無しの不自由さも不自由と云はず、斯迄  
 温順しいのも結局は不幸が藥に成て、茲が所謂苦勞が教へた智慧かと思ふと不愠で不愠で、  
 我には二人の孝行が嬉しいよりもいぢらしい。菊、笑うて呉れるなよ、孝心な子を持ても、親  
 は矢張泣いて居るぞ、と際上げて打泣きぬ。  
 待人は待つに遅く待たぬに速き噂の影なり。斯く語らふ間は新右衛門もお菊も何時と無く醫師  
 の事を忘るゝとも無く忘れたりしが、此時恰も門前の車の音、愈よ夫れと覺しきに二人は齊し  
 く座を飛立ち、齊しく馳せて出迎ふる此時遅く、彼方に早き御見舞の呼聲、續て老先生の鷹揚  
 なる咳拂ひ、新右衛門の耳には尊き警嘩のやうに聞えて先は満足の片頬笑み、涙の痕は皺のう  
 ちにや潜みけむ。

(十三)

病氣は胃加答見との診断にて摸様に依れば長びくやも計られぬと毫末も心配なる容態は無しと  
 の事、新右衛門は此れに漸う安堵して翌日より又た外出勝に、偶々家に在れば必ず清の訪來



りて、よく／＼急ぐ懇談なるべく、彼の妾宅のお峰も補手の爲とて入込み、初野を相手に出入  
 繁き呉服屋へ、それ／＼の注文誂へ買入れ等を引請けて日々忙はしく振舞ひぬ。尙日頃出入の  
 何某、別家の誰某など、新右衛門より頼まれしものも頼まれぬ者も、皆御用を聞て、彼方へ走  
 り此方へ走り、朝に晩に出代り入り代り、各々とり／＼の役目を分つも、有る手から翻るゝ黄金  
 と見ては、我から集る蟻は盡きせじ、頭を下げて土を舐るも、甘い汁の有ればなりけり。  
 人増せば水増して、勝手元は遠に目の廻る程忙はしうなりたれど、何故かお菊は此れには目も  
 呉れず打捨置きて、片時も葦所に足を置かず、朝々顔を洗ふ時のみ井戸端に出来れど、それも  
 濟めは直様喜美子の部屋に引籠りて、終日のお伽に氣樂らしう小説を讀聞かせ、夜も次の室に  
 打臥して暫しも枕頭を離るゝ事無く、師走ならぬと猫の手も借たき一家の容子を見て見ぬ顔に  
 喜美子のすや／＼眠る時は己れも傍にて晝寝の手枕、或日夕嵐の聲覺に噫三つして舌打鳴し、  
 此奴はお峰機との御門違ひと忌々しげに獨語ちしを、何故か苦々しげに喜美子の笑ひし。  
 初野はまた今日此頃の一家の忙しさを皆我故と思ふに獨り手を束ねてあらむ事の如何にして  
 も心苦しく、目の廻るやうに立働く下女等をも他目に見て居る事の成り難く、責て我身に適ひ  
 し程をと一統の恐縮して制むるをも聽かず、折節は持馴れぬ庖刀を把りて甲斐々々しき襟巻け

に出入の八百屋を驚かす事もあり、天晴の輿様振りぞと饒舌のお三が皮肉の外は、お峰と初め  
 下女下男誰も皆心に口に褒めぬもの無し。されども獨り新右衛門は或日此姿を見て不興の眉根  
 を打盛め、其方は折々偽善めいた事を爲る、此周章者、何が何でも娘は娘らしう奥に居よど何  
 時に無く憎々しさに叱り飛ばせしを、誰の耳にも道理とは聞かず、笑止と初野を偷見て思は  
 ず額に汗せし昔々、偽善といひじを何の事やら得も知らざりしぞ笑止なりける。  
 此時お峰は優しく取做し、いえ／＼此れは旦那様が御無理、お嬢様を周章者とは聞えませぬ、  
 此様に遊ばすので大抵か女中の風みに成りますと、尙何事をか云はむとするを後に聞流して  
 新右衛門は奥に行きぬ。  
 跡に消けたる初野を圍みて、下女は一齊の百囀り、最初の程こそ兎や角と感る辭の殊勝なり  
 けれ、追々他を貶す下司の舌の唾の飛沫馳も及ばず、お嬢様や私共は骨折て叱らるゝ傘屋の  
 丁稚、打て變つたえら者のお菊は遊んで褒められる果報者と、徐々不平の狼煙を擧ぐるに素破  
 鎌倉と一時に乗り出す膝つき毛、後先争ふ尻馬の其尾に附いて尾に鱗を附け、針を棒にと云做  
 せば、夫れに枝葉の嘘迄添へて、やれ一昨日は十時に起床たの、それ昨日も晝寝が五時間だつ  
 たの、擦つたの捻んだのあの、いものいと五月蠅き迄に饒舌立て、慰むる善の初野を到頭窮ら



せて仕舞ひける。例ならば唇口とて斯迄には得も云ふこと、例に時耳引き聳てたるも峰の笑顔の氣味よげなるを、心願みの力なるべし。

悪口も漸う下火に成れば、お峯が又もや油を濺ぎ、眞個に皆様が尤もだ、斯んな事私は云ひたくも無いのですが、お嬢様のお耳の便次に申しませう、と枕辭を置きて、如何に大切な御看病を、旦那様直接にお菊様へ御委託が有つたからとて、朝寝晝寝の閑が有るなら、實て御病室へ運ぶ三度のお膳ぐらゐは取りに来たつて可いでせう。それを取りに来ぬから此方で運ぶ、運べば可い事にして當然だといふ顔でさ、それも宜しいが御病人の御給仕を濟ませた後で、自分は臺所で据膳を食散して、跡を其儘皿一枚洗はうとも爲す筈置いたと思へばよいと立つ、何と恐じい權柄では御坐りませぬか、全然お客様でさ、旦那様は能く此れを御承知で以てお叱りも爲さらず反て看病が行届くとお褒めです、私は如何に何だつて餘りの氣儘と思ひますがお嬢様は如何思召すと、これも初野を喰て掛りぬ。

思へば妻無き宿の花は反て風波の種を蒔くべく、母無き娘は棚無き藤の風にも波にも驚き騒ぐ、星家の家庭は此亂服。

(十四)

一週間は病褥の苦夢なりき。今日は喜美子も何日に無く氣分よしとて晩食後はお菊を相手に珍らしき笑聲さへ漏す程に、お菊眞底嬉しうなりて愈よ興を添へんと人並外れて多辯なる口も未だく物足らず覺ゆるにや、可笑しう道化たる手眞似雜りに只管饒舌りに饒舌りしが、果は追々圖に乗て日頃御最負の片岡我當の聲色を使ふやら右團治の七變化の早變相を眞似るやら、只さへ大きな眼を白黒と剣出したり首を振たり足踏したり身振り怪しう其聲奇しく、何時か身一つの面白さに有頂天の現心無く我を忘れて、飛んだり跳ねたり拙しとも見苦しとも云ふべきやう無き踊を一さし、舞ひ收めたる時喜美子は身悶えして笑ひ泣きに可笑しうて可笑しうて横腹が痛むと暫時は息切るばかり笑ひ沈みぬ。

此物音を唯事にわらじと三は周章て、駈附け來しが、案外なる此躰に吹出して引返し、旦那様まわくお聞き遊ばしませと委細を語るに新右衛門はくくして、お左様か左様か賊にお菊は才人だ、さてく喜美子が笑うて居たか、うく上機嫌で居たか夫れはく、何笑涙を翻して腹を抱へて頓けて居たか、お左様か左様か夫れは夫れは。それでは追付本復しや



う、何より芽出度い先づ以て嬉し事だ、と涙になりて喜ぶぬ。

此方にては喜美子の遠に眠うなりたりと云ふにお菊心得て枕頭に屏風引廻し夜具の裾を風の透かぬやう丁寧抑へ、十六夜行燈の火を少し許り細めて後、差寄りて閑雅に三指をつき、左様なればお静にと遺に恭しき挨拶を殘して物静に次の室に立ちぬ。時刻は未だ少しく早けれど用無き身の獨り起きて在らむも詮無き業ぞと床を敷きて枕に就き、寝ながら置時計を見るに針は未だ八時を指したり。今から寝ては長き夜を如何にと少しは驚き、我ながら餘りなる氣樂さに且は呆れ且は可笑しく、臺所は今ぞ忙はしき最中なるべきと、思遣れば遺に勿躰無き心地のせぬにもあらず、今日此頃の宵寝朝寝を嘸や朋輩の口を極めて悪様に云ふなるべきを、想見れば幾許か氣の咎むる所もあり、今宵は何時に無く夫れ等を氣にして何とやら枕心の苦しかりしが、彼のち峰の憎らしさの何時しか胸に浮ぶと共に、ニ、儘よと不敵なる性根になり、女の意地に拗ねて、何處迄も拗ねて呉れむものぞ膽の太い量見になりて寝るべし寝るべし遠慮は無用、お峰風情に負けるお菊かど妙な事を口中に呟きて、漸と眼を閉ぢ胸を静め心置き無く眠らんとすれど働き馴れし身の終日爲すべきやうも無く遊びに暮らす頃日とて、渾身に些かの勞疲も無ければ妻戸の風に眼は研えに研え、きりくすの聲のみ耳に澄みて、反へすくも寝

られぬ夜なり。

勝手も奥も寝静まりて物音もせずなりぬ。お菊は生憎に物思はれて十二歳の折引續て両親に離れ孤兒となりての昔の苦勞夢のやうに想出され、尚行末を幻に浮べて今宵秋の哀れは身に染むばかり、勝氣なる女も獨寝の枕には心細き思案の出で勝に、何時か涙の溢る、折柄、喜美子の居室に怪しき物音の微けく聞ゆ。初めにコトコトと戸をたたくやうなる響して鼠の走れるにやと覺えしが、稍ありてバリ、と忍びやかに紙を引裂くやうなる、カサコンと揉むやうなる、様々なる、音いと微けく、小歎み勝に四度五度聞えける。

(十五)

夜も甚く更けたるに今頃何事を爲玉ふにや、曩には眠しと迄仰せられしに尚しも熱睡まで在すにや、さるにても訝かしき物音の心得難しとお菊は良久し聞耳聳てしが、何思ひけむ嘲むが如くニヤ／＼と笑ひて聽て忍びやかに起上り、足音を偷みて襖の方に這ひ寄りて身を萎縮めつ、渾と柱に凭掛り、息を殺して隙見に室内を覗ふに、隔ての屏風は其儘ながら、枕邊に置きし行燈は何處に遷されしか其處には在らで、撥退けたる抱巻の天鵝絨の襟僅に見えたり。此れに喜



美子の起出し事の明白なれど何處に行きしか其影も無く、在處知られぬ燈火の光眩き迄に明し。

お菊は愈よ怪しみて小首を傾け、見えぬ物は甚ど見たさの思切に、若しくは影法師でも映らば何を爲玉へるかを知らるに易しと、尙一心に覗く待心、折柄の虫の音も立聴きの妨げと憎らしく、彼の屏風突倒さば思はずなる御姿の見ゆる事も、胸には襟々の想像の浮びて愚にも附かぬ邪推をするも折にふれたる下司の情なり。

纏てまた髪と同じ襟なる怪しき音の程近き邊に聞え、尙溜息吐くかと覺しき氣色もするに、思懸け無き邊とて、恠えて我知らず身を退きしが、此れに喜美子の在處を悟りて即て不覺に點頭く笑顔、要こそあれど又もや這ひ出し此度は遙の片隈へ進寄りて、横襟に顔を襖に當てながら、ざり／＼と漸う闕を外れむばかりに向の方へ押す程に、撓むとは無けれど少しは反りて塗縁と塗縁との隙間の自然に濶くなる儘に、やれ嬉しや見えたり見えたり、喜美子は机に凭れてあり。「お菊は案に相違して少しは拍子の扱けたる心地なりしが、尙よく見れば巻紙を押展べて筆の運びの迺々しく、可愛き口をむづ／＼と動めかして文言葉を案じたる様なり。たゞ驚くべきは燈火の光を受けたる横顔の物凄き迄に青ざめたる、今日は朝より血色の宜かりしものをとお菊は

訝かしさに眼を睜りて、何の考へも無く昵と凝視めに凝視めたる儘、呆れて暫時は所在を忘れぬ。

如何なる羞かしの戀故に、如何なる包ましの文故に、斯迄人目を忍び玉ふぞ。深夜人知らぬ筆のすさびは、誰に思ひの架橋ぞ、心憎き御振舞よ、と尙不覺に見惚れけるを、聴くも喜美子の悟りしや、否や、急にからりと筆投棄て屹と此方を見向きし容子に、南無三見られてはとお菊屹驚して身を後襟に退くと齊しく、急ぎ寢床に引返して周章狼狽夜具引被さぬ。

寝ながら熟々想見るに、此程より喜美子の素振に怪しき事のみ多きが上に、何時も／＼物思はしげなる面色して胸苦しう心惹らるゝ風情に見え、眉目の間に歴々と愁の雲の深く霞みて一日も霽れたることを知らず、殊に人を厭ひ談話を嫌ひて只獨り涙に暮れ玉ふ事、如何にしても戀ならではと思ひしに果して果して此通り油断のならぬ事を爲さるゝ。小娘と茶袋とは茲の事、朝夕も側を離れぬ此菊の人並優れて大きな眼を何時の間にか抜き玉うて、何處に何様な好い人を拵らえられしぞ。情なや扱は此度の御病氣も、賊を云へば淺猿しき戀病の類にや。口惜しや馬鹿で無い搦りの此菊を、よくぞ／＼盲人にせられし。宜い年齢をして此菊は、え、何事ぞや唯十七の世間見ずの嬢様に、見事に負けたか立派に負けたか。



(十六)

大事の大事の嫌様に逸早くも虫のつきて、此菊の不注意より到頭疵物にして退けしか。不覺々々一生の不覺と菊は無念遣方無く何とすべきと當惑の胸を抱きしが、尙よく思ひ見れば否否まだ大丈夫、まだ疵物には成り玉ふまじ、また遂げ玉へる戀にはあるまじ。忍ぶ戀なればこそ思つて云はぬ戀なればこそ、惱みに惱みて病氣に迄なり玉ひしなれ。思ふに此文は初めて筆の穂に出る花薄、招く心の有るかは知らねど、靡き臥したる尾花が妻の、露の契りは未だなるべし。

孰れにしても打捨難き一大事、黙つて觀て居る時には有るまじ。躍入て彼の文突然奪ひ取て、屹と御折檻申さんか、但しは明日迄知らず顔して此由旦那様に言告げて、屹と御礼明願はんか。御折檻は易けれど一旦思込たる事は何と断念り玉はぬ日頃の御氣性、我等の申す事は怒りこそ爲玉へ聽分け玉ふべきにあらず。道理に聰き天質ながら道理で行かぬ此道に、一念打込みて病氣に迄ならせ玉ふ例の一隨なる御氣性、最早槓桿でも動くまじ。殊更一旦怨み怒り玉ひし事は何時々迄も忘れず執心骨に入るかと覺しき御氣性、我を憎しと思はれなば呆るゝ程の

酷き事して、是非とも復讐を遊ばすなるべし。茲で嫌様を懲らさんは何より易すき事なれど、夫れでは行末我が爲宜からじ。思へば旦那様も彼の様な方なり初野様は年齢こそ老けたる嫌様なれ、其實はまだくの無邪氣さ、唯一人喜美子様だけが御年齢を召さぬに恐ろしい位御利口な。此菊の持餘すは喜美子様ばかり、行末は如何程惻愍に成り玉ひて酔でも眞弱でも喰へぬやうに成玉ふべき。今喜美子様に怨まれて、我若しと御箱の憂目に逢ひなば今日迄の辛抱も水の泡なり。あゝ云はぬ事云はぬ事、喜美子様を疵物にさへ爲て退けぬば我が役目は済む事なるを、此儘黙て見過せばとて何と工風の出ぬ事あるまじ。

お菊は斯く思ひ定めて靜に寝返り打ちつ、夜は甚く更けぬれば兎も角も眠らんものと、目を閉ぢて氣を沈むる折柄、喜美子は未だ寝ざりけむ、障子の開く音すると共に火影わが室の丸窓を照して、忍ばしき足音は竹縁を母屋の方へ遠くなりゆき、響きの絶えしは東司の邊と覺へたり。お菊は思はず手を拊て莞爾と笑ひ、好しくと獨語ちつゝ、むくくと起上りて竊に間の襖を開くや否や、飛ぶが如く彼の机の邊に行きぬ。

見れば一封の書狀、裏向きになりて硯箱の上に置かれたり。此れなりけり此れなりけり、いであのれ誰への文ぞと取る手も遅く表を見れば、怪しや宛名は女と覺しく、水盞の跡句やかに春



田はな子様まゐるとありて所書きの詳しく記されしは郵便に出さんとの心なるべし。  
 何の事ぞや、何の事ぞや、抑も此れは何の事ぞや、扱は色文と思ひしは全く我が邪推にてありけるか。春田様とは先年嬢様が女學校へ通はれし折よりの御友達にて、今尙互ひの往來繁ければ文の遣取不思議には有らじ。何の此れが色文なるべき、何の此れが戀なるべき、と遺のお菊も呆氣に取られて良久しは茫然として徒に手紙を凝視むるのみ、我を忘れて佇みたる儘頓に爲すべき由を知らず。

髪には躍入て此手紙、無理にも奪つて懲らし申さんと迄思ひしに、よくまア短氣を出さざりし、危く大恥を搔いて退けて宜い馬鹿を見る所なりしと、今更後悔すると共に餘りの事の可笑しさに堪り兼ねてふツと吹出し、手紙を以前の處に置き直す間も笑倒けるばかりに腹を抱へつゝ、聲立てまじと諸手に口を抑へて逃るが如く部屋に歸りぬ。

今宵嬢様も我と同様に、寝られぬにこそ一層長き秋の夜の、枕を飽きし心遣りにこの筆のすさびなるべきを、勿躰無き疑ひを懸けて嗚呼濟まぬと口の中の詫言しつゝ、布団の中に潜り込みて、嬢様御免遊ばせや。

心の雲も跡無く霽れて胸清々しうなる程に、最始の身の上の物思ひも今は全く忘れ果て、様々

なる妄念の皆消えては、心氣頓に静まりて半夜を眠らざりし疲れの程を遽に覺え、何時となくお菊はぐツつりと寝入りぬ。

久しき後喜美子は忍びやかに歸り來しが、何故か手も足も甚く顛ひて目に異様の光あり、菊や菊やと呼びながら遠慮無く障子引開けて椽よりづかゝと枕頭に歩み寄り、答なき寝顔を驚と眺めて、何思ひけむ冷かなる笑みを漏らしつ、其儘わが居室に入ると齊しく机の前に近寄りしが、曩には裏向けて乗置きし書狀の今は表を見せたるに、喜美子は淋しくも打笑み、怪しと思へる氣色も無く、其儘屏風の内に入りぬ。

(十七)

枕に響く虫の聲を、聞くとも無く聞かぬとも無く、切なき胸の憂事を、思ふとも無く思はぬとも無く、眠れるにもあらず覺めたるにもあらず、うとくとして四邊の暗くなりしと思へば、ほのくくと燈し火も見え、ゆくりなき父の笑聲の鮮かに聞えしに驚けば、思はぬ姉の傍の歴々ど中に浮び、何時か四阿屋のお菊の饒舌に、我身は風のやうに窓を飛び脱け、高高く舞ふ空の時雨、身を知る雨ぞと泣くかどすれば、醒めて見合ひの日の夢なりける。



夢にまで見る見合の日の悲しく怨めしく口惜しかりし事々を、喜美子は今更のやうに想起され  
て不覺に涙の流るゝを覺えず、我にもあらで溜息のみ吐く折柄、椽側の障子のするゝと開く  
音しぬ。何者と咎めん聲も、周章て咽喉に塞るばかり、屹と其方を顧眄るに、黒影風の如くふ  
わりと飛んで阿那やと見る間に早くも屏風の蔭に隠れぬ。  
誰ぞ誰ぞと叱して起上らむとするに、驚き玉ふな怪しきものに非ずといふ、其聲儘に男なれど  
父にもあらず車夫にもあらず、誰ぞ誰ぞ、誰ぞ誰ぞ、聞馴れぬ聲の氣味悪し。  
起出でんも恐ろしく斯くて在らむも心細く、深夜女の寢室に飛入る奇怪の男の子は抑も何者、  
泥棒か何故に身を匿す、亡霊か何故に我を怨む、何故に此室へは來しぞ何故に夜中に忍ぶぞ、  
今は誰にてもわれ名を問ふまじ、たゞ此儘に立去り呉れよ、人見ば愛きを疾く立去れど、聲厲  
まして罵る面前相互の鼻の衝合ふ迄に差覗かせしは遣は如何に、怪しや訝かしや思ひも寄らぬ  
春雄なりけり。  
餘りの意外に喜美子は呆れて言葉も出でず、思はず知らずわな／＼と渾身顫はれ息塞り、満顔  
冷水を浴びしやうに粟立ちて胸潰れ腸跳り、叫んで人を喚ばんとすれども咽喉箇涸れて舌牽  
釣り齒の根も合はぬ驚愕に口も利けず。

春雄は怨めしげに眼を瞠らせて、扱は愈よ忘れ玉ひぬ、忘れ玉ひし人に兎角の心盡しは仇なが  
ら、忘れぬ身の思ひは今日より愈よ募りこそすれ消えまじき戀の炎に焦れ死すべき行末なる  
べし。されど夫れも怨みには思はじ、家も知らず名も知らずで戀初めたるが嗚呼なれば、身を怨  
みても止むべき今なり、殊更三年の昔、御身が女學校よりの歸途を待設け我が獨乙帽の中なる  
鮎文を、人通り無き町の板塀勝ちの他目無きを幸ひと御身の足下へ投げたりし時、御身は并を  
拾ひ玉ひて嬉しき笑顔を見せながら遂に返事を玉はざりし、其怨み今に忘れぬと厭ひ玉ふと推  
しながら諦められ涙の月日も送りしものを、今更兎や角と播口説く程の恥知らぬ曲者の我に  
も非ず、最早何をも云はで管ならぬ御身の無情を斯く云ふ胸の骨に刻み、此儘泣ても還るべし。  
さりながら、賣ては物の哀れの數の一つに、我が片戀をも探入れ玉へ、思へば去年の暑中休暇  
に、故郷の月見がてらの夕涼みの或日、中の島公園の四阿屋にて思ひ寄らず御身が二三人の御  
友達と女中とを引連れ、前過ぎゆき玉ふを見し時の其嬉しさや如何なりし、而も御身は何故に  
我を熟々と打贖りて、我が笑む儘に笑み玉ひし。其心は鬼々しくも他の戀を嘲みたるにか、懐  
かしくも忘れ玉はざりしと我に較べて悟りしや迷なりけむ、憎しく果して美人は妖魔なり此  
恥雪ぐには御身の姉上と契るに如かじ、それよ／＼天晴恥を纏て雪がむ、可し、最早哀れども



思召すな、最早我も泣いては還らじ。さらばよ君と云ふかどすれば早や立上るに情無や、ア  
 待ち玉云ふ事ありと、思はず叫ぶ必死の一聲、何ぞ我が耳朶を貫き、肚腸に響くぞ、尙何  
 事の異變あればか驚々たる太鼓の音宛然迅雷の亂山を遠るに似たり。  
 驚て飛び起れば悲しや口惜しや是れ、曉の鐘の聲々、お菊は呆れて枕邊に在り。

(十八)

此日の朝まだき、初野は三人の下女を指圖して銘々の手分けを定め部屋々々の掃除に取掛りし  
 が、程無く己が引請けたる内の三室を済まして、残るは父の居室ばかりとなりぬ、日頃塵一筋  
 だに見逃すまじき潔癖ある新右衛門とて、此處に愆なる箒を入れて、粗略なる掃除せんは反  
 て他處の塵を運ぶの縁とも成るべく、怠るとにはあらねど追に今日一日ぐらゐ拾置くとも何の  
 仔細もあるまじきかと、馴れぬ働きに少しは疲れを覺えし頃の逃思案に、障子引開け見るに、  
 遺の父も今日此頃の多用と外出勝とに氣を奪られて家に心の向き兼る折柄とて、珍しくも朱檀  
 の机の曇れるは塵なり。

朝々の掃除は何處を清むると、初野は遽に下女の怠りの程を屹と窘めたき思に成り、叱らぬ

ば屬まぬ下司根性に今更の不興堪忍、難き心地もせしが、いや／＼頃日の忙しさに此れしきの  
 不行届は大目に見るが慈悲なるべく、斯る事を一々捨て叱らむには、誰しも思遣り無しと我  
 を恨みむ、況して忙しきも縁談故、开を我の情を懸けずば下女も立瀬の無き事ならむ、斯く自  
 ら立働くも他の爲にあらぬものを、と漸うに思返して先づ机を掃はんと上に乗たる手提革靴を  
 取除るに、一封の書狀其下に敷かれたり。危し斯る事よりして大切な書類等の自然紛失する  
 なるべきに、父上も眞個に遽に御年を召されし、近來は甚くも粗々かしう成り玉ひぬ、と心細  
 きは女性の常か初野の質か、仔細らしう眉を顰めて、兎も角も革靴の中へ入れ置くに仔細はあ  
 るまじと、見るとは無く見るに怪しや、いと婀娜きたる女文字の而も何とは無しに見覺えのあ  
 る筆蹟にて、星新右衛門様必く御秘見の事と認せしのみか未だ封の儘の無名文なり。

如何なる内證の報知かは知らねど、必く御秘見と迄断りて其名さへ隠せしは思ふに餘程の  
 一大事ありて开を口づから告げむにも人目を厭ふ身の上と覺えたり。一大事は何事とも知る由  
 無けれど必定父上の御身にも深き關係は有るなるべく、差出したる人は尙更の事、よく／＼黙  
 し難き仔細に驅られて此洋紙の封筒一枚に、浮世を偷む隠篋の着心悪しき思ひなるべし。  
 さるにても女筆の心得難き、或は父上の隠し妻か。それにしては星新右衛門様と餘りに餘所々々



しき宛名なり、墨の匂も見事に過ぎたり。或は淫奔けたる後室などの思ひの餘りを涙に染めしか。彼の様に見えても父上には女の忘れ難き處ありと、可笑しな事を何時かお菊の云ひけるが、扱は左様した筋にもやと、次第に怪しさの愈増しになりては不覺に堅き封じ目の心憎き思ひを爲して、初野は我ども無くて打返し打返し左見右見帯も紙采も捨たる儘に忘れられて只餘念も無く眺め入りぬ。

見覺えある筆蹟を抑も誰れなりしかと様々に考ふるに、其人胸に在るやうながら其名は頼に浮び出でず、たゞ水莖の跡の甚どまう顔はれたるに胸跳らせて執りし筆かど、不覺女心の哀れさの思遣られて最惜しく、披きて讀むべき事の叶は思ふに文章他人の賜をも斷つなるべしと、尙も未練に凝視めたりしに、如何なる機會か但しは初めより然りしか、中なる文字の封筒を透きて覺束なきながら薄々見ゆるやうなるにぞ、竊に嬉しさを笑みに溢して、少しは四邊見廻るゝ思ひながら物珍らしさを興がる程の心地も添ひて、如何にもして封の上より實ては二三行なりとも讀まむものをと様々に工風して處々を指もて抑へ試むるに、やゝ明さまに透き寫りて先づ目に入りしは縁談の二字なりけり。

縁談とはと初野は甚く打驚き、父上に對ひて縁談と云はむは即て我身の上を指すなるべし、扱

は此女浮きたる筆にあらざして怪しくも我が身の上を沙汰する消息にやと、遽に胸の波立ちて今は封じ目を搔破りたき思ひを爲し、目倦き透かし讀みの慾れたる最早堪へ難き心地なれども、詮無き次第と強て毒く胸を抑へ、尙一心に瞳を凝らして其下を見るに、墨の色や薄れて夫れかと悟るも覺束無き限りながら、その迥々しさを暫く正しきものとすれば、あな思々しき破談と讀まれし。

破談とは破談とはと初野は眼色を變へて驚き周章て、何事ぞや縁談を破談とは、抑も此れは何事ぞや。あのれやれ憎き文よ、破談と云ふは何者ぞや何奴ぞや。思ふに父上は未だ見玉はざりし此文、奇怪至極の此文、少しも早く父上に見せばや少しも早く我れ見ばや。縁談とは破談とは一刻片時も捨置き難き大事なりと、我知らず座を蹴上つて其儘駆出さむと一刹那、圖らずハッと心附いて思はずオ、と叫ぶ一聲、それよと胸を拊つ手より果敢なく文ははらりと落ちぬ。

餘りに思ひ寄らぬ事なれば今迄は更にも思ひ寄らざりしが、夫れよと見れば愈よ夫れに相違無く、怪しども訝かしども意外ども案外ども云ふべき言語に絶へ果てし、たゞ怪しからぬ限りなれども實に怪しからぬ珍事なれども、見れば見る程疑ひも無く露毫末も擬ふ方無く、遣は是れ



喜美子の筆蹟なり、音是れ喜美子の筆蹟なり。  
 さるにても喜美子は何故に餘所々々しう宛名に父上の本名を記せしぞ、思ふに夫れぞと人の心  
 附かざるやう故と斯くして己が名をさへ隠せしならむか、開は兎も角も、抑も何故なれば妹  
 の身にして不禮にも姉の縁談に口を挿み不埒にも破談など、秘密の告口せんとはするぞ、其心  
 根如何にしても不審なり。云ひたき意見あらば父子姉妹の間に何とて遠慮の要るべきか陽に云  
 はむが道なるべきに、何を苦しみて斯る秘書を作りしぞ、熟々腑に落ち難き其所爲の程寧ろ淺  
 間しき心地のせられて、初野は呆れもしつ怒りもしつ、良久しは途方に暮れたる面色なりしが、  
 聽て何をか獨り點頭き、手早く彼の文を取上げて袂の中に押匿し、日頃に似げなき聲高の而も  
 周章たる調子にて頻りに三を喚立てぬ。

(十九)

先程圖らず眩暈のせしより遽に氣分の悪うなりぬと、程好く其場を言拵へて跡を三に任せ置  
 き、己れは居室に歸り行く初野の心、神ならずして誰か知るべき。  
 居室の四邊に人無きを見澄まし確々と障子を閉切りし後は、深窓を訪問ふ松風の聲、沁る銀瓶

の松虫の空音、共に心耳を澄ますばかり。されど初野は床しども思はず。  
 疑心暗鬼を描く胸元を悪魔の指に搔ぐられてや嬉しげに竊に打笑み、折好くも湯の沸きしよと  
 獨語ちて静々進む足音を偷むも、思ふに人無きを知りながら尙も安からぬ驚歩の一步々々に  
 我知らずして疊に罪を刻むなるべし。  
 聽て好みの友禪の坐蒲團を、桐洞の火鉢の前に直して夫れに坐を占め、僅に顛ふる指先に銀瓶  
 の蓋を取除けて其跡に彼の文を置き翳せば、湯玉沸々と飛跳り湯氣濺々と立昇りて小氣味好き  
 事云ふ無りも許く、日頃心弱き初野も何と無く此れに氣の引立ちて今迄の後護さも頓に忘れ  
 た、理も無く微笑まる、思ひして烈火と燃ゆる炭の燼せて、折々火の粉を飛ばすを左も興あり  
 げに暫し凝視めぬ。  
 稍ありて最早好き頃ほひぞと再び彼の文を取下し見るに今は封筒濡紙の如くに霽りて遠の糊も  
 溶けて流るゝばかりになりぬ。仕済したりと花簪の脚もて少しづつ封じ目を剝しゆく程に、  
 些かも紙の破るゝこと無く、思ふが儘に披かれたり。  
 初野は左も嬉しげに打微笑みて、披くを遅しと中なる巻紙取出しさま颯と投展へ、まづ終局の  
 署名を見るに果せるかな喜美子なり。



今更に怪しく胸は打騒ぎて我にもあらず手も顔はれしが、元より猶豫ふ心無ければ更に首めより読みもて行くに、怪しむべし未だ半に至らざるに顔色次第に朱を漲ぐと見る間程なく又土の如く、見る／＼青くなり赤くなり吐く息も太く重く、漸うにして讀了れば更に復讀返し、讀返し讀返す其度毎に苦惱の面を打盛めて深くも思案に打沈みしが、果は口惜しげに齧齒を爲し、或は碯と文を投棄て、或は拾ひてまた繰繰げ、眼を瞋らせて思はず罵る聲鋭く、えゝも如何せう如何して呉れう、姉の夫に戀をするとは淺間しい奴淫奔けた奴と、怒りつ怒みつするも是非なや、實に斯く讀まば斯く讀まるべき文の文言、次の如し。

世にあるまじき御願なれば世間の耳も恐ろしくかつや斯る淺間しき事を如何に思ふも女の口より云出候はむ事の面伏なれば、故と斯様の秘書もて御老眼を驚かしらる。されば今こゝに打明かしまゐらす事の仔細は何卒々々姉上様へ御内證に遊ばされ候やう呉々も念じ上らる。

さてとや妾事、忘れもせじ先月三日の雨の夜ばなしの折柄に、姉上の取出し玉ひし春雄様の御寫眞を拜見いたし候ひしが、其時の悲しさと怨めしさと筆にも辭にもつくし難く、心地死

ぬべう覺え候。それより遠に世の中の味氣なく、泣き暮らす日數も積り／＼て遂に病の床に打ふし候事、よく／＼の嘆きと御推もじ、すこしは哀れとも思召し候らへかし。たゞ何ゆゑの涙ぞと問ひも玉は露と答へて消えも入りたき思ひに候

かゝる淺間しう世にあるまじき妾の迷心をうちつけに現在の父上へ打明しまゐらす心苦しきは誠に／＼死ぬるよりも辛く羞かしく候まゝ昨日迄も今日迄も人には云はで、たゞ命にかへても包み隠さむとのみ思ひ定め、寧ろ此身を殺して、諦め難き煩惱の夢を醒さむものぞと、獨り心の中に覺悟を極めて候ひしが、さては亡きあとに父上の御嘆きの程の如何ばかりぞと、それを思ふに悲しと遺瀨なく、考ふれば考ふる程不孝の罪の後世おそろしく、さるはいと責めて妾が淺間しの願さへ叶はし假令畜生と云はれてだにも生ながらへんかとも思ひ惑ひ、又は其れより、云はで釜の身を焼くのみは焦れ死なむが増しなるへしとも思ひ屈し、意は二途を踏みながら兎も角も暫し生命を此文に預けて、さて後浮世に心残さず潔く最期を遂るか但しは尼とも成りて靜に定命を終るか、その孰れかに身を定めむと、女の身の羞恥を忘れて、次の御願を陽に申上らる。

世にあるまじう淺間しき御願とは、姉上の此度の御縁談を破談に被成候はんを、妾は神か



けて祈らむばかりに存じ候次第にて、これぞ妾が一生後生の御願、誠に二つなき生命を賭けたる御願に候。就ては羞かしながら何卒々々妾の寫眞を一日も早く春雄様の御目に懸け下され度とすれば、或は先方より破談の儀を申出づべきやも計り難く、春雄様若し夫れにても尙御婚禮の儀御承知に候はば、果敢なや妾も夫迄に候

わはれ父上、此文を讀ませ玉はば、嗚や嗚妾の心を汚らはしう厭はしう思はしう思召し、さしも滄溟の深きより深き御慈愛も一時に洩れて抑如何ばかりか御慣りの畏しう御憎しみの凄じう候はんと、よし死ぬへきにも夫れを悲しく、若し左もあらば不孝此上あるまじく、先だつ不孝を夫れに重ねなば、妾は畜生道にも陥つべきかと、今より渾身の戦くばかりに覺え候らへども、それさへ今は恐れも致さず、萬事を覺悟の妾何卒々々狂氣とも亂心とも思召し、因果なる子を持ちしと御諦め遊ばし、たゞ何事も御許しの程を偏に御願申上げに、斯く姉上の御縁談を御芽出たしと共々に喜ひ勇むべき妾の身の反て妨げを致し候も、何ぞの因果に候ふべく、思へば情なき事に有之候

十月十六日

喜美子より

父上さまへ

(二十)

悪魔は既に初野の胸を罪に縛りぬ、斯くて如何なる因果の糸を繰らむとはするやらむ。彼の生命を賭けたる願の文は思はぬ人に披き見られて、憫れむべし喜美子の生命は、今や全く初野の掌裡に握られぬ。

されども斯るべしとは神ならぬ身の如何で喜美子の思ひ寄るべき。濡れぬ先こそ露をも厭へ、濡れての上は言はぬ燈の胸の炎も早晚消ぬべく、事成らば可し事成らねば死ぬる迄ぞと、覺悟の上は中々に糸の亂れの物思ひも跡無く解くる心地のせられて、今朝は喜美子も何時に無う心涼しく胸清々しき寢覺なりけり。

明日知らぬ夕露も、暫しは花に眠る心、刑場の末期の水を酒に願うて舌敷打て笑ふ心、孰れか今日の喜美子の覺悟に似ざるべき。

看よや喜美子は朝餉の箸を差指くと共に、自ら起出で、手箆筒の抽斗より蠟紙を受出し枕頭に押披きて、金襴、緞子、錦類織物の種々より鹽瀧、繪子、紬、羽二重、扱は友仙縮緬、鹿の子



の類、襟々に色可愛き小切を處迫き迄に取散らして押繪の模型を左見右見頻りに工風を凝らしつゝ、ち菊には飯粒を練らせ厚紙を切らせ、兎角して漸う細工に取掛りぬ。

關す劍の稻妻の下に、微笑む程の喜美子とは固よりち菊の知るべき筈なく、昨日より引續いての笑顔を珍らしと見る己が目もさへ嬉し涙に掻き暮れて、さしも一時は打驚かれぬる御病氣も最早此分ならば占めたもの、道は若い御威勢とて興驚する程早く御全快を遊ばすなるべし。あお難有い、難有い、御血色もずんと宜しう御坐りますると、ほく／＼して、おど／＼して、喜び勇める其の風情、道理と見る目も哀れにて、此れも愛惜の涙の種、喜美子は思はず顔を背けぬ。

思へば今日が死別れと成るまじものとも限らぬ身の上、我身の命數旦夕に迫れりとも、何とも思はず夫れとも知らずに、あのまア嬉し相な菊の顔はと、不便と哀れと骨肉に浸入り、堪へ兼ねて我知らず、一旦見まじと睨りし目を不覺に瞬く暫時の一瞥、それにも慊かた御願み、呢と見遣ればお菊も見遣り、彼れ笑む儘に我も笑む、笑むは泣くより叫ぶより喜美子に辛き刹那なるべし。

おはれ此押繪細工も、やがて死ぬべき身の篋の品とも成れがしと、豫て造れる我が意とは、神

ならぬ身のお菊の夢にも得こと悟るまじ。言はぬ別れ知らぬ別れ、浮世の契も最早是れ迄、お前に迄も隠す思ひは、よく／＼切なき義理と察して、必ず後で怨んで給るな、此儘眠て死なむ迄ぞと、心の中には掌を合せて口の中には最期の詫言、遠に咽喉迄衝上ぐる悲しさを、おつと前齒に喰締りて堪へ堪ふる断腸の思ひ、泣かぬ涙は胸充溢に成りて張裂くばかりに湧上りぬ。

(二十一)

無邪氣き御遊びのお相手に、何時しかお菊は小供に返りし心地せられて、思ふとも思ひ出さるる昔の事々、喜美子が未だお芥子坊主のお頭に、可愛き新蝶々の附鬘を結着けて居たりし頃、友禪紙にて貼りし小さき紅葉傘、覺束無く差翳して、楓の様な赤き手に何の御心にや小裙を取て、身を揺てちよろ／＼と小足に走られし事ありしに、其も可愛らしさと云へば夫れは／＼何とも云ふに云はれぬ程のお可愛らしさに、お菊も未だ其頃は小供心の、嬉しさに堪り兼ねて奥様々々と思はず知らず大聲揚げて駈戻り、駈戻り、其儘ち居室へ躍上つて突然烟草を喫うて居玉へる御手を驚掴みにして、まア／＼御覽じ遊ばしませと、譯を聞かねば只將呆れ果て、居玉へるを無理無恥に引出し參らせ椽先へ出でしに、其時は最早傘をも投棄て居玉ひたれど折好く



も此度は未だ廻り兼ねる舌に、アレサツサコレサツサと高らかなる挑聲笑可しう、眞似事はかりの盆踊に餘念も無く遊び玉へる最中にて、以前よりも尙一層可憐なる御姿に、奥様も思はずオ、くどばかりに掌を拵ち玉ひ、餘りの御喜びに次の辭も頓には出でず、良久しは我を忘れて打贖らせ玉ひしが、果は笑倒けて彼れ見よ彼れ見よ、兎も角も踊に成て居るが感心では無いかと、さらでも見惚れたる菊の袂を、頭に引動かし玉ひ、打興じ玉ひ、後は御褒美の虎屋の羊羹菊に迄も下されし、其時の嬉しき年月経たる今に忘れず、其時の喜美子の餘今も尙目に浮くやうなりと、此れを話の首として、尙記憶えたる有の儘を語り續くる古事の數々、面白しと云ふも即て果敢なく、嬉しと聞くも即て悲しく、盡きせじの物の哀れを忍ぶに餘る昔かな。何時ともしも無く溢るゝ涙に、喜美子も小切を膝に濡らし、お菊も練りたる飯粒に、自ら仇なる水を添へぬ。

稍ありて喜美子は押繪の模塑を下に置き、眞に菊やと向直り、此様な話を爲て居ると、何處からか母様の優しいお聲が有々と聞えるやうに思ふで無いか。私は何とやら氣が沈んで何うやら悲しう成て來たよ、と良久し涙を抑へ、何故かは知らぬが頃日では、無闇に母様がお懐しうて私は最うく逢ひたくて逢ひたくて、と遽に聲を頓はせて、私は寧ろ死なうかと思ふ、さうす

れば未來で御目に懸れるから、もうく病氣なんぞ平癒らないで可い、私は最う死にたいよ、寧ろ死ぬる、死ぬるく死んで仕舞ふ、私なんぞ死ぬる方が可い、菊、左様思つてお呉れ、死ぬるよ私は、死んで仕舞ふよ。菊、菊、どうぞ左様、さう思つて、おも、おも、思つて、よう。

(二十一)

お菊は興奮して飛上るやうに膝を乗出し、わらまア嬢様は、まア何たる事を仰しやりまする、呆れて物も言へませぬ。如何程奥様がお懐かしうても、貴娘が御逝去遊ばしては堪りませぬ、まア如何な事、飛でも無い事を、死にたいなど、縁喜でも無い可思な事を、と眉を顰め、向後花の咲かうといふ御年齢で、左様な思はしい事を嘘にも仰しやるものでは御座りませぬ、と暫しは氣遣はしげに喜美子を昵と打贖りしが、遽に又氣を溜へて事も無げに笑ひ出し、眞個に私の饒舌が過ぎて、詰らぬ昔噺を初めて、様々な事を云出したものですから、不知奥様をお懐かしう思召して不圖死んだら逢へるだらうかと妙な事を、ホ、飛んだ事を、ホ、最うお忘れ遊ばせ、ホ、嬢様とした事が、まだお泣き遊ばすの。幾許お懐しう思召しても死なれた方は致方が御座りませぬ。未來で逢はうと仰しやりましても、果して逢へるものか逢へないもの



か、未來の事が何うして解りませう、何様な事だか知れたものでは御座りませぬ。逢はうと思  
うて死んで見て、逢はれなければ何と遊ばす、ホ、其様な詰らぬ事が、ホ、先づ死損で御座  
ります。さア嬢様、もうく左様な事はさらりと忘れ遊ばして、さア嬢様、もうく泣  
き遊ばすな、と慰め賺せど其甲斐無く、喜美子は愈よ咽入りて泣伏せし儘身動きもせず。遺に  
少しは菊も呆れて、何故又奥様が今日に限て其様に御懐かしう御座ります、これが昨日や  
今日に御逝去遊ばしたと云ふでは無し兎も角も一年餘りは貴嬢様も、無事にお暮らしたされ  
では御座りませぬか。思ふて甲斐無い事はさらりと諦め遊ばすが詰句男らしいと申すもの、さ  
斯う申しますると女が男らしい筈は無いと貴嬢様は仰しやませう、けれど女も男らしい無  
ければ智恵者とは申されませぬ。貴嬢様は日頃雄々しい御量見が有つて誠に萬事が諦めのも強  
い眞個に菊などが兎ても及びませぬばかり穩健した御氣性で御座りますに、今日は又何故其  
様に、と云掛りて、遠に心附いて再び絞出す速座の笑、ホ、ホ、此れは全然お釋迦に説法と  
云ふ筋で、此様な事は先刻御承知の嬢様に、さア可笑い事菊は一生懸命で御諫言申して居りま  
す。ホ、女も男らしい無ければならぬとは、何時ぞや貴嬢様が此菊奴に仰しやつた御言葉、  
其時は散々に御叱りを受けましたから、さア今日は復讐て御座りますよ、鸚鵡返し竹篋返し、

さア如何で御坐いますよ、男らしい諦めて凍々しく笑顔をお見せなさるか但しは菊には及ばな  
いと立派に降参を遊ばすか、日頃からお氣の勝た貴嬢様、滅多に降参遊ばすまい、所で菊は斯  
うして攻めますと手を差延べて咽喉の邊を掻ぐれども、喜美子は僅に身を躲して聲をも立てず  
泣入るのみ。此れでも駄目かと菊も手を退き、何とか慰むる方法は無きかと暫し考ふれど別  
に仕様模様の有るべき筈無く、今は詮無し此れより外に再び笑はせん由も無しと面白くも無き  
に故と業々しく例の雲雀の笑聲してどたばたと立上り、嬢様は御卑怯で居らッしやる、お逃げ  
爲されば追掛けますよと、尙も處嫌はず掻ぐるに遺の喜美子も堪り兼ねて起上り、口惜しまされ  
の熱立聲してア菊何だよ失敬な、お前は不可ない、本統に不可ない失敬な事を爲でないと、  
柳眉を昂げて睨むを機會と、お菊は故と飛退つて恐ろしくも無きに恐縮の躰、半は洒落に兩手  
を合せて、御免遊ばせ御免遊ばせ、豚尾坊主はコレ此通りと、兩手に袂を組合せて恭々しく  
額に觸し鹿爪らしく三拜して莞爾ともせぬ眞面目顔に笑はぬは笑はす手管なりけり。  
されど喜美子は此姿を怨めしさに打眺めて、本統にお前は氣樂な事ねえ、如何すれば其様に  
成れるだらう、單の半日でもお前の様になって見たい、私は最う最う羨しいよ、と尙もつれづ  
れと良久しは打瞞りてのみありけるが、思はず知らず太息して急に背くる目を屢打ち、差俯向



きて啜泣くにお菊も今は呆れ果てつゝ、アレマ嬢様と一聲叫ぶ利那に其身は前に跳つて、薺と喜美子を抱き寄せつ抱き締めつ、如何して又貴娘様は、今日に限つて何故其様に、え、嬢様、何故又貴娘は御機嫌直して如何して笑うて下さらぬ、え、如何して笑うて下さらぬ、と其手を取て力の儘に握詰め、不思議相に熟々顔を覗込むに喜美子も薺と縋着き、え、も思遣りの無い菊だ、笑うて呉れといふ親切で、何故又お前は泣いて呉れぬ、と身を顛はして良久しは正躰も無く泣くぬを立してしが稍ありて何思ひけむ突然お菊を突離して飛退く拍子に裾搔合せ、無二無三に止所無き涙を搔拂ひ搔拂ひ、決然と成て最う泣かぬ最う泣かぬ、思ひ切た締め切た未練に何時迄泣くものか、お菊私には最う泣かない、決して泣かない泣かぬ、泣けど云ても泣くので無いと、齒を食締め胸擁握り、一生懸命聲漏さじと身悶えして、思へば乞食も命は惜しく、下人も笑うて暮らす浮世に、泣いて暮らすも因果の此身、此上泣死するものか、見事に笑うて死んで見せると、無言ながらの覺悟も凛々しく、今更口惜しき涙々を嚙込み嚙込みで、無念や果しなの袖時雨、折柄の松風も軒に寒し。

(二二三)

其翌日の正午の事なりき、此室に三度の膳を運ぶは何時もお三に限りたるに、今日は如何なる風の吹廻しか、初野と二人にて運び来りぬ。アレ勿躰ない姉様かと喜美子も呆れて笑止がれば、お菊も此れはくどばかり額の冷汗を拭ひながらも、心の中には生分別の小才な嬢様、當附事して我が怠りを責めんとか、要らざる處へ智慧を出して奥様氣取りも氣障な物と、少しは怨めしき初野の振舞に滑瀾筋を隠し切れず、お三の還るを見送るや否や顔色變りて初野の前に兩手を突き、切口上に苦味を利かせて癡様恐入りますです、一言半句も御坐りませぬ、十言の御折檻より菊には此れが好く利きました。ハイもう以後は私が運びますから、どうか今日限り御無用に遊ばして、と言葉も少しは顔はれて腹の中には此面當の憎々しさ、初野獨りの才覺には些と出来過ぎた厭味なり、必定おのれお峰の差金、如何して返報して呉れうと、口惜しさに思はず齒を喰締めて早くも胸は其思案なり。

初野は目を丸うして、アレマ恐しく廻氣な、そんな事を云つて呉れては私の親切が無に成るのみか喜さんも氣が悪い。お見舞がてらの手の序に卒度持て来た迄の事、それを別段氣にする譯も無いでは無いかと、後は又他事も無く笑靨の露を翻しつゝ、菊は案外氣の小さな。疑り深ひも戀の實とか何とか云ふが、お前は近頃戀でもお爲かど、其の肩の邊りを叩きながら、異味あ



りげなる尻目は寧ろ、妹の氣色を伺ひぬ。  
 喜美子は厭はしげに眉を擡り面白からぬ目を背けて、あゝはしたない何たるお言葉何たるお所作と背に汗する心地して、お菊の思惑も羞かしく、これも尻目に覗ふ心。  
 お菊は又此言葉に、日頃の嫉妬の胸の裏を見透されしやう思はれて不覺に赤らむ顔を傾け、アラまア嬢様お口の悪い、これも近來の御修業でせう、お峰は兎角碌な事を教へませぬと、己れは兎角お峰を貶しぬ。

初野は唯無言、打笑ひのみ、何處迄平氣に居玉ふ事ぞ、あれ程迄の下人の辭を如何なる耳に聞かれしかと、珍らしからぬ妹の癖にも今更呆るゝ浮々しき、斯くても我が身の姉上様か別して春雄様の嫁御寮かと、これと思ふにも浮世の約束事の淺間しく、彼れで冥加な月日を送り、彼れで一生何不自由無く、思ふ人と添添けて唯安々と嬉しう面白う暮らし玉うて夫れで濟む。お浮世に、人は氣性も身持も要らぬ、馬鹿でも阿房でも不品行でも淫奔でも好色者でも何でも可し、運さへ有れば華族は華族、運が無ければ才智有りても穢多は穢多、其運故に此身は死ぬべく姉上は榮へに榮へ玉ふ。運より外に一物無き浮世に、何と思ひて今日が日迄やれ女學校の音楽の、それ裁縫と茶と生花と、要らぬ勉強も爲たりし事ぞ、女の道が夫れでは缺ける否徳

義が此れでは許さぬ、など六箇しう昨日迄も考へたりしが迷にや、氣儘三昧に暮らすのが所詮浮世の世渡りか、眞個に或は左様かも知れぬ。思へば端無いと蔑む此身が愚にて、端無い姉上が結局世間の廣いのか。此身も姉上の様に端無く、戀の色と口から出儘の大放題の羞恥知らずにてありませば、何の今日迄泣ては暮らさじ、面白可笑しう笑うて暮らして、死なうと假にも思ふまじきを、え、是非も無し天性かと、喜美子は嗟嘆に暮れたりき。

尙想見れば三年の昔、春雄様より思寄らずも附け文されし其時に、斯様な律義な氣質の無く、彼の姉上の氣風で有らば、疾くにも此戀切るに切られぬ事と成りて、斯今く涙の憂目も見ず死なねばならぬ苦しきも無く、首尾よく添添けて居たりしかも知られぬ運で有つたものを、慈し親の許さぬ戀を懼れて返事の文も遣らうとせず、泣きの涙で逃げて居たりし其心根が今更口惜し。されども悔て返らぬ昔、練り直すにも直らぬ氣質、たゞ是非もなや此身は馬鹿か何かは知ず、徳道堅固か左も無いか、夫れも自ら得こそ知らぬと、十七年に凝固りし清淨の胸は氷の如く、よしや戀の炎に身を燃き果し跡なりとも、溶れば元の清水の心、一點の塵にも汚れざる無垢の儘にて死なば死なむ、馬鹿でも可しや清く死なむと、我ども無く觀念の眼を靜に閉ちて、やがて切る玉の緒を何しに繋ふ薄明を、聚るも涙の心地にて、茶碗持つ手も物思ふ身の力無し。



(二十四)

進まぬ食事は早く済みぬ、お菊は膳を引下げて口故には憎くもあらぬ臺所へと急ぎ行きぬ。  
 跡見送りて初野は徐ら身を前ませ、例の親しげにひた／＼と寄添ひて喜美子の左手を膝の上に  
 引寄せ、まさ／＼しう太息して此瘦せた事は、赤兒のやうな手で有つたに痛々しい骨が出て、  
 御覽よ、夫れ指輪がする／＼と脱れますよ、と打濡りたる聲音低く、哀れげに呷く程の親切に  
 も、心弱りし頃日とて喜美子は涙に暮るゝなるべし。

眞に喜さんさへ此様に不快くないとねえ、と初野は語を繼ぎ、私は最う頃日程嬉しい月日は無  
 いんだけれど、因果な事ねえ、芽出度い時には得てして魔が障す浮世だよ、眞に儘ならぬとは  
 能く云ふたもので、要らざる心配事が思も染めぬ處から出て来て、其爲に嬉しい筈の物が悲し  
 い事に成たり此上も無い喜ばしい事が云ふに云はれぬ辛い苦勞に成たり、本統に最う最う吉が  
 凶やら凶が吉やら、何が何だか少しも知れないのが浮世だよ。私の此度の縁談でも全く左様だ  
 よ、今ちや妙な事に成て仕舞つて、と遽に言葉を切つて、一心喜美子の眼中を直視めたり。  
 扱こそ彼の生命を賭けたる願の叶ひて、愈よ破談と極まりしか、よし未だ極まらずとも彼の文

に認せし通り、我が寫眞を送らむ事に成りしならむ、さればこそ此様に厭味辛味を並べ立て、  
 我れを責めんとし玉ふなれど、斯く思ひつゝ聞くが儘に頭熱し胸躍りて理も無くむしやくしや  
 と取逆上せ最早黙て居られず、殆ど夢中に成て我知らず咽喉を飛出し熬立聲の高く鋭く、  
 止して下さい夫れは何です、貴方は何が芽出度無いです、何が因果です何が凶です、魔が障し  
 たとは何の事です、私には些少も解りませんよ、知りません知りません其様な事は知りません、  
 と狂氣の如く叫ぶや否や枕引寄せ夜具引被せて、御免と一言いふより早く脊振向けて横様に臥  
 しぬ。

初野は此れに佛然として、あら何ですれ喜さんは、可笑しな人だよ何を怒るの、何をお前に訊  
 きました、知らないッて何だらう、變な事を云ふ人ねえと、憎々しげに腕め附けて、暫しは腹  
 立たしげに舌打のみしてありしが、やがて冷やかに打微笑み、遽に立て足音を偷み、物をも云  
 はず出たりぬ。

引違へてどたばたと還り來しお菊、ホク／＼笑ひして踊るやうに手を振り廻り、さア／＼芽出  
 度い／＼と、座にも着かぬ喜び騒ぐに喜美子も訝り、若しや我身への吉左右かと少しは頼  
 母しく其譯聞きたく、寝ながら何が芽出度いの、何が何うしたの、何が／＼と我知らず息機ま



して問迫るを耳にもかけず取合ひもせず、お菊は愈よ勇み立ちて日頃の願が愈よ叶ふた、お家は長久怨敵退散嬢様二人は纏て奥様下人の菊途出世々々、眉目類る、笑顔の如何にも嬉しき仔細あるらし、えしもう菊は何だよねえ、早く静に開かしておくれ、熱々氣を揉ませると氣分が悪くなるによう、と怒れ出す聲に漸と氣が付き、やれ〜待て下さいまし、私の出世は貴嬢様のお庇、決して最う最う騒ぎませぬ、それでは只今旦那様から承はりました其始終、事長くとも一通り、お聞きなされて、と瞳許を坐し、得意の白眼を團洲ほどにむき出して、下さりませと出掛る處を、怒れたる喜美子に突仆されぬ、厭やたよ菊、申儀ぢや無い、早く早く、お聞かせつたらよう。

(二十五)

斯くてお菊の語りし始終、第一婚禮は來月十日と略其日の定まりし事、第二に喜美子の分家の事第三お菊が改めて妾の位に直るべき事、第四に新右衛門京都へ隠居の事、第五は其別荘の買入方を既に奥様の實家なる石本様へ頼みある事、第六には目下京都に燃糸會社創立の計畫あり、新右衛門夫れに賛與せる事、第七は初野の婚禮濟み次第新右衛門は直に喜美子お菊を引連れて

京都に上り該會社の爲に運動する筈なる事、以上を芽出度き出來事と云ふ。聞く事々皆思懸け無く、喜美子は夢見る心地して、芽出たきか芽出度無きか、喜んで可いのか嘆いて可いのか嬉しいのか悲しいのか皆無分からず、思はぬ磯邊に驚く鷗の、足許から鳥の立つ急な話に思慮を失ひ分別無くなり、茫として一切雲の漂ふ心なり。

彼の生命を賭けたる願の叶はざりし事は、流石に問はでも著しといへど、噂ばかりなりし分家の斯く早くなりしは案外の中の案外にて、而も地を變へたる西京とは昨日迄も今日迄も夢にだに見ず、扱は我身に春雄様を諦めさせむとの父上の御考にて、斯くは地を變へて御隠居遊ばすにや、勿體なや一方ならぬ御配慮の末ぞと、涙ぐみし外は、何の思ふ所も無く、死ぬ筈か死なぬ筈かも思案に及ばず、それなりけりの夕暮に、不圖春雄の事を想出し、姉の婚禮の近きを思ひ、遽に氣を顛動して骨々も砕くるばかりの驚き、泣くにも泣かれず今更に色青さめてふるふる〜と顔へ上りし時、お菊は何氣なく枕頭の行燈に火を點けたり。

此夜喜美子は眠らざりき、否眠らんにも眠られざりき。長しとも長き秋の夜の終夜、泣きもせず嘆きもせず、涙一滴翻すでなく溜息一つ漏らすで無く、寢返りもせず身動きもせず、たゞ一心に考へて考へて考へて明せし翌る朝、喜美子は唇の色灰



の如く、顔の色土の如く、雲鬢亂れて石葺の如く、星眸濁りて鉛の如く、見る影も無き凄れ姿のよろ／＼として、風にも飛ぶべく霜とも消ゆべく見えながら、無言に椽先へ立出で、朝嵐を厭はず散る露を詫びずして庭に降りての飛石傳ひ、何思ひけん泉水の邊を幾度か幾度か廻りに廻り彷彿ひに吟行ひ、遂に彼の四阿屋に入りて腰を休め、怨めしげに朝寒の梢の聲に耳を傾け、愁然として曇れる空の雲の行衛を眺めつゝ、石の如く動かざる事久しかりき。

(二十六)

食事の後は、お菊の強て制むるをも聞かず病氣も殆ど癒えたればと、喜美子は湯を遣ひて顔手足の垢を落し、大凡一時間ばかり洗ひに洗ひ拭きに拭きて後、呆れたるお菊に迫りて髪をも取揚げ、無造作なる和蘭陀巻に結終れば、瘦せたるも寒れたるも一入美しさを添ふるやうにて、是迄凄い程の美人と思ひしは未だなる昔、病後の凄さは女の目にさへ身顔ひの出る程にて、お菊は酔心地に成りて兎角の褒言葉も口には出でず、嬢様、凄く凄く凄いと、凄いはかりを言ひ續けぬ。喜美子は淋しき笑顔なり。

晝過る頃醫師來りぬ。喜美子は温泉に病を養はん事の可否を問ひ、老先生は最も妙なる由を答

へ、醫藥も最早廢めて可し、反て入湯の方健康を回復するに効あらむと寧ろ勸むる言葉に、喜美子は満足し、醫師は還り、お菊は又昨日迄の大病を嘘かと呆れぬ。

此夕父の歸宅を待受けて、喜美子は何時に無く欣々と寢床を起出で、寢衣の上に琉球紬の書生羽織を引懸けて椽傳ひに行き行くも、身窄みに裾引締め襟掻合せ髪撫で上げ、遠に心嬉しの父の居室の障子に映る大きな影法師も四五十日見ざりしに懐しさも一層にて、嘸や斯くてお目に懸るを上無く嬉しと思召さんと早や其笑顔も目前に浮ぶ心地しつ、兎角して内に入り、會釋に笑顔を傾けながら靜に坐に就て仰見る時、新右衛門我を忘れて平癒つたかと飛上り、うゝ髪も上げたか是れは、全然快いか夫れは、明日は祝ひた否々今夜だ酒だ酒だと狂氣の如く喜び狂ふ其目は充盈の嬉し涙、喜美子も思はず泣きたりき。

扱て新右衛門は彼の京都の分家の事を初めとして、お菊が語りし通りの事々を尙詳細と説き聞かせ、春雄などより十層倍立増つたる立派な男を持たすべしと興に乗てか將た本氣か、なべての耳には嘘とも聞かざるべき大業なる嬉しからせを飽程聞かせつ、喜美子は又醫師の言葉も有ればと、其れを根據として有馬入湯の爲め明日にも旅立ちたき旨を願ふに一も二も無く心の儘と許されて飛立つばかりの嬉しき思、固より病氣嫌ひの新右衛門は婚家の病人を心憂く思ひたり



し折柄とて尙更の満足此上も無き好き思附きごと、何も文明的、早い可しとの例の性急、直ちに其要意を下女下男に命したりき。

(二十七)

同伴は菊の外に出入の酒屋の後家も何、見送りのお纏ひは其息子と定まりて喜美子は思立ちしより二日目の朝、遂に有馬行の途に上りぬ。

涙の淵を我がら跳出でし鯉の心には、轍に噴く末の憂目を思ふ隙無く、浮世は茲ぞと氷れる谷を飛んで出でたる鶯は、深雪の梅の枝瘦せて霞ふる夜の夢を知るまじ、あはれ喜美子は其鯉の如く其鶯の如く、三躍して家を出でにき。

跡は病人も無く泣聲も無く、芽出度き星家は芽出たき笑に充ち満ちて昨日と過ぎ今日と暮れ、忙しや忙しやと云ふ間程無く其日とも成り、やんれ芽出度の若松様の、千代に八千代に榮へ榮へふる相生の松の其高砂や、此浦舟に帆をあげて、早や着きにける蓬萊の鶴と龜との契久しき春雄と初野との婚禮、首尾滞る所も無く、芽出度し／＼の中に祝ひ納めぬ。

氣輕なる初野の事とて若夫婦の名染むも早かりければ、金儲けに心奪られ京都に魂飛ばした

りし新右衛門、何時迄か家に在るべき、翌れば十二月の某日、彼の惣系會社創立の運動の爲め、いよく京都に上り、曾て買入れより家具家什の準備迄一切石本へ頼み置きたる小川町なる別荘に移り住みぬ。當坐は石本より遣はしたる下女と車夫源吉との三人暮らしなりけるが、人手少き新世帯の亂脈なるに困り果て、有馬へ此由を報知せ、其中頃二人を京都に引取りぬ。

喜美子の病氣も今は全く平癒して、瘦せも恢復り色飽も昔に返り、温泉の効目今更新右衛門を驚かし、久しく見ざりしやうに逢瀬を喜ぶ親子の傍に、明日より御新造と呼べるべきか將又與様と云はるべきか、それともお家様と尊まるかど、不覺に心嬉しき笑顔を隠し兼て少しは顔を打赤めつゝ、若くしげにお菊の俯向きて座りたる、茲に新なる一家の團樂の樂しげなるは、他目も羨ましきばかりなりき。

年も早や暮るゝに近ければ新右衛門も若夫婦に打任せたる本宅の心許なく、是非此冬を大阪に越し新年も濟ませたしと思ひ、二人の有馬より歸りて三日目の日、喜美子と呼びて此由を云ひ聞かせ、其方は未だ春雄を知らねば紹介すべき筈にもあり、姉嬢の顔見知らぬは不都合なる次第にもあり、旁明日は同伴して清堀村に歸るべし、正月は何れにても好きな處でするが宜し、兎も角も一應は歸らねば遺に姉への手前も有らむと、争ふべからざる言葉に、何故か喜美子は



従はで、大阪へは最早一生歸らぬ覺悟と、以ての外なる返答に新右衛門は驚き、強て言葉に威を合ませて納得させむとすれば愈よ我を張て果は泣くに困じ果て、緩々お菊をして其仔細を問はせん事に定め、其翌朝新右衛門は本宅に歸りぬ。

斯くて其年も暮れ翌年正月十五日、新右衛門大阪より歸りて後は、再び春雄と喜美子との紹介の事を口にせず、月日は無事に過ぎて梅の花散り鶯の聲も老けて櫻咲く彌生の頃ともなりしに、日頃病を知らぬ達者なる初野の肺病に罹りし旨の手紙來りて、茲に新右衛門が閑居の夢を打醒がしぬ。

されども例の病氣嫌ひとて親しく見舞に歸らむともせず、書狀の往復に眉を擡めつ開きつして日を送りし四月五日の夕暮、病氣危篤の電報到着、最早捨置難しと取る物も取敢ず、其夜喜美子引伴れ大阪に歸りぬ。

(二十八)

一時は今にも息引取るかと看護の人々色を失ひし程なりしが、初野の定命や盡きざりけむ、一日二日と追々に快氣に向ひて此分ならばと醫師先づ笑顔を見せたりき。

春雄は病室に看護の手を離さず、下女の疲れて枕頭に居眠る時も、靜に觀音經を打誦して幾夜を此れに明しつゝ露程も倦みたる氣色無き殊勝さに、新右衛門は涙に成りて喜びながら、淋しども淋しき涙の宿に堪へ兼ねてや、初野の病氣危篤なりし一夜の外は嘗ても病室を覗きし事無く、何事ぞや其れのみか折節の黄昏に、お峰が許への通車忍ぶ戀には是も便の閑路を飛ばしぬ、厄病神に追はれて逃ぐる心なるべし。

喜美子は又兎角に春雄と室を同うして打解けて語らふ事を厭ひ、成るべく避けて物も言ひ交さず勝に、彼方より何事をか問はれし折は他目にも訝かしき迄に言下忽ち色青さめて俯向きて答ふる聲わななくと又おどくと打顫ふを常としぬ。されば姉の病室へは、此れも滅多に足を入れず多くは昔の我が居室に閉籠り、衣裝箆管手箆管など、皆京都へ運ばれし跡の、がらりとして淋しく廣きを心細げに物案じ顔にて晝も夜も只一人、侶無き儘に物思ひの遣瀨無く、戀人を目前姉の夫として、朝夕に其聲を聞き其姿を眺むる胸の、諦め果し今も尙血を吐くばかり苦しき時折、人目無きを頼母しく泣きたい程打泣いて打泣いて、さりげなき笑顔を除所にも強て裝るなるべし。

或日の夕暮、月面白くさし出でたるに、花の香を吹く風温かに、樹立物古りし庭の眺めの床し



きに、喜美子は良久し竹様にイづみて、心も夕霞の空に成り、魂も宿に迷へる蝶と飛ばれて、ほどく浮世の事を打忘れたる風情なりしが、何思ひけむ遠に居室に引返し、床の間に置きたる月琴を取だし調子を整ふる間、既に面は憂を帯びぬ。

斯て愁はしげに庭の面を打眺めつゝ、纏て弾じ初むる指先軽く、牙えに牙えたる撥ながら、遺に病人を憐りてにや、音さへ低き絃の音を甚ど尙微けく細く掻鳴らし、消え入るやうに打顔ひたる有るか無きかの小聲にて、哀れげに悲しげに謠ふが儘に、節取りの折節に自からにして閉づる目より、ほろ／＼と翻る、露の數々月を帯びて膝に散りぬ。

奏で終り奏で初め、曲一曲に謠ふ聲音の稍々に高く、濡り勝なる絃のねも次第々々に高くなりゆき、興愈よ深くなりて只我知らず、只我知らず、喜美子は遂に聲張上げて細く高く謠ひける間に、夜もや、更けて風の音のみ牙ゆる空に月搔曇る臘夜の櫻翻る、吹雪の眺め、更に幾段の哀れを増しぬ。

其處此處に雨戸引く音聞ゆるに、今は早や病人を憐かるに及ばじとてや、眺めに飽かぬ庭の面へ何時か降立ちて月琴を抱きし儘に彼方此方の櫻の蔭を縦ひ行きて、苔蒸したる石橋を渡り、泉水に臨みたる例の四阿屋に入りて暫しは月を打仰ぎ、咽び流るゝ水を眺め、不覺に涙に暮れ

たる風情、稍ありて又靜に撥を取直し、奏で初むる絃聲遠に急にして謠ふは血沙に咽べるか、謠聲いよ／＼低く濡りて絃のね愈よ高く牙えたり。

折しもあれや彼方の松の樹立の下に、朦朧たる一箇の黑影忽ち浮びぬ。喜美子は目聰くこれを認めて屹と見向けば忽ち消えぬ。

目を閉ぢ空を仰いで絞るが如く謠ふ一節、謠ひ終りて目を睜けば黑影既に傍にあり。

(二十九)

喜美子は驚き叫んで飛上り、無言に逃げんとするを引止めてアレと待ちなさい、驚いちや可けませぬ、私です、私です、と云ふ聲は春雄なりけり。

喜美子は袂を捉へられて暫しふるふるツと顛へしが何を云はず又掻鳴らす撥の音は、迸しる撥の急なるより急に、流るゝ水の砂石を走るに髣髴たり。

喜美子様、私は貴娘に是非聞て貰ひたい事が有ります、卒度撥を止めて下さいと、春雄は側に腰打懸けぬ、されど喜美子は尙無言の儘に撥を拂ふ事更に急なり。

春雄は昵と喜美子を膾めて、幾度か嗟嘆しつゝ、遂に無言に羞俯向きて兩手に眼を仰へたり。



喜美子は此姿に暫し見惚れて、魘て顔を背くるや否や狂氣の如く烈しく絃を掻鳴して、謠諧共に泣きに泣きぬ。

春雄は稍ありて顔を擧げ、喜美子様、あゝ思へば貴娘はち怨みです、實に私は、實に私は、貴娘を怨みる、何處迄も怨みる、死ぬる迄怨みる。斯う云てる間も實に怨めしい。何故貴方は、三年前に賣めては貴娘の名前なりと、何故知らせて下さら無かつた、實に私は其れが怨みだ。のみならず此度の事の前に貴娘は父様へ秘文を書く手を以て、何故に私へツイ一筆御報知が無かつたです、これが何よりも怨みだ、實に此れが何よりも怨みだ、と涙れ落る涙を擦上げて男泣きに泣きぬ。

喜美子へはたりと月琴を投げて兎角の言葉も無く遽に咽入りて泣くねを立て良久しは正躰も無し。

月は此時雲に隠れて四邊は忽ち闇と成りぬ、歸雁數聲遙に勝駒の山を繞る。

稍有りて喜美子は涙の面を正し、春雄様、春雄様、あゝ春雄様と呼んでは悪う御坐いますか、それでは兄様、兄様、アレ返事を爲して下さい。それでは御言葉に従つて春雄様と申しませう。では春雄様、あゝ嬉しい、お怨みに覺召しても、其様に返事をして下さる上は、私は貴方を怨

みませぬ、殊更今のお言葉、私を怨むと仰しやつた、其怨んで下さるのが、まア何れ程か私には嬉しう御座います。昔の事をお忘れ無く、其様に思召して下さいは、まア何れ程か私には難有う御座います。

眞に最う其お言葉で私は悲しい中にも嬉しう御座んす、まア今日では貴方は私の姉嬢、二人は兄妹で御座います、徹座も戀の無い、清浄な、潔白な、眞に最う清浄潔白な、清浄潔白な兄妹で御座います。私は奇麗にスツバリ諦めて居ります、ハイ最うスツバリ諦めました。

姉の死病を訪ねませんでは世間の口も如何と存じまして、今度は據なく歸阪ました譯ですが、今後再び貴方とは逢ひませぬ、ハイ最も婚禮の以前から疾くに其覺悟をして居りました。逢ひませぬばこそ色々の事を思ひ出して悲しうも怨めしうも成ります、逢はぬば諦めも附きませうし、何時か忘れる時も御座います。其時に清浄な、潔白な心に成て嬉しうも目に懨からうと、私は斯様に思ひ切て居ります。貴方も何うか忘れて下さい、諦めて下さい、思ひ切て、思ひ切て、筆を最う憎いでも思召して、戀も昔も最うもう、夢と思つて、何うぞ左様思つて下さいまし。ハイ最う夢です、夢です、夢です、何も彼も夢なんです、身悶へして泣く其手を、突然取て抱き寄せ、春雄は顔と顔との觸るゝばかりひとと胸を合せて良久し涙に暮れ



たりしが、漸うに稍手を弛へ、炎の如き息を吐きて、夫れは無理です夫れは無理です、いゝや無理です、無理だ、無理どしか私は、何うしても思へぬ。今諦めると云つて諦められれば、何の今日迄失敗した三年の昔の戀を忘れないで居ませうぞ、疾くに思ひ切れた等なんだ、いゝえお待ちなさい、僕の云ふ事をお聞きなさい。いゝや諦めぬ、思ひ切らぬ、何うしても諦めない、思ひ切らない、人世の最大幸福は戀にあるのだ、貴方に嫌はれたと思へばこそ兎も角も忘れやう忘れやうとしても居たです、彼の文を見て貴娘の心を知た上は、貴娘を妹として初野と暮らす事は私には出来な、否決して暮らしては爲ない。

何、文ですか、文は一昨日、初野が危篤で有つた時に私に見せたのです、初野は彼の文を父様の見ない前に偷んだのです。さ驚くでせう、けれど初野は私と貴娘との間柄を知らない、で全く貴娘が私の寫真を見てから妙な心に成て、縁談の邪魔して貴娘の寫真を送つて、自分の夫に奪はうと思つたのだと、斯様に初野は思込んで居るです。私も其時別段何も云はずに済ましてしましたが、其夜は實に驚きと悲しみが一つに成て、泣くにも泣かれぬ思ひでした。而も心中竊に、初野が死んで呉れるやうと百遍餘りも、口の中で騰つて居たのです、だが死なぬ、死んで呉れなす。

喜美子は呆れて春雄を睨め、眞青に成て顔ひ出しぬ。春雄は少しも此れに心を止めず、烈々火の粉を飛ばすばかり眞赤に成りし其顔色淫丹の如く、舞々と喜美子を抱きて尙説進みぬ。

其處で私は貴娘に一つの願が有る、貴娘が此れを聞かぬと有らば是非が無い、私は貴方を殺して死ぬる、恐迫するのでは無いが、否々戀の誠は恐迫をも許す。兎に角此願は是非共聞て貰ひたい、其願とは外でも無い、私は初野を捨て、貴娘は父様を捨て、東京へ逃げるのです、何故驚くんです、驚く事は無い。貴娘は兎に角、私は現今の儘では生きて居る甲斐も無い、だから最う名譽も道徳も何も彼も一切捨てた、一切捨て、戀に替へた。

さア喜美子様、承知だと云つて下さい、只一言承知したと云つて下さい。夫れで最う僕は死んでも可い、名譽も財産も何も要らない、戀の前には其れ等皆糞土だ。何うです喜美様、さア何うです、何うです、と次第に舞々と抱き締むる其手はわな／＼と戦けり。

喜美子は泣く／＼、それは不可ませぬ、既に斯う成た上で其様な事を爲れば誰しも二人を畜生と云ひませう。私が今日迄幾度か死なうと思ひながら、遂に死なず、死ぬるよりも苦しい思ひで漸と無理から諦めたと云ふのも、全くは畜生と云はれたくないからです、いゝ畜生に成りたくないからです、と言葉は茲に絶えて、後は只萬行の涙瀧の如し。



あゝ貴娘は、あゝ情無い、貴娘は實に、實に、愛の貴重なるを知らないのだ。何うすれば夫れが悟れるだらう。え、何故それを悟つて呉れぬ。あゝ貴娘は詰らぬ道徳心の爲に貴重なる愛を縛られて居る、何故それを解て呉れぬ。情ない自縊自縛といふのが夫れだ。断然其縊をすたすたに切て仕舞つて、頼む頼む、頼むから早く自由の精神に立戻つて、愛の爲めに萬事を犠牲にする覺悟に成て下さい、と春雄は涙に咽びながら言葉々々に力を入れて念よ請々と抱締むるに、喜美子も思はず取纏り、渾身を悶へて泣きながら、春雄様堪忍して下さい、堪忍して、と我知らずも擲着きぬ。

涙々に良久しは身も世もあられず泣き悲みしが、斯くても思ひ思はれたる二人の此處に袂を連ねたる嬉しさは、愛きが中にも又遠なる心地せられて、何時か互に茫として心も白雲のやうになり、恍惚として顔と顔を押し當てたる儘、物をも言はず身動きもせず、茲に吹く風自ら緩く、數撞の鐘聲徐ろに軒を繞る其折柄、何事ぞ忽ちに闇を破りし叫聲鋭く、猛然として狂出でたる喜美子血相變へて、身を腕き足躍らせて必死春雄を突飛ばし、其儘逃ぐるを遣らばと矢庭に抱止めつ、突放せば縋着き、掻抱けば擦脱けて、倒けつ轉びつ、逃ぐるを追うて、落花狼藉たる築山を廻れば、何時か奥庭の森深く、晝尙暗き樹下蔭を右往左往に抜けつ潜りつ、途竭き

て木の間を出る月を碎いて川と流るゝ泉水を跳り越えつ飛び越えつ追ひつ追はれつ只死然の雌雄の蝶。

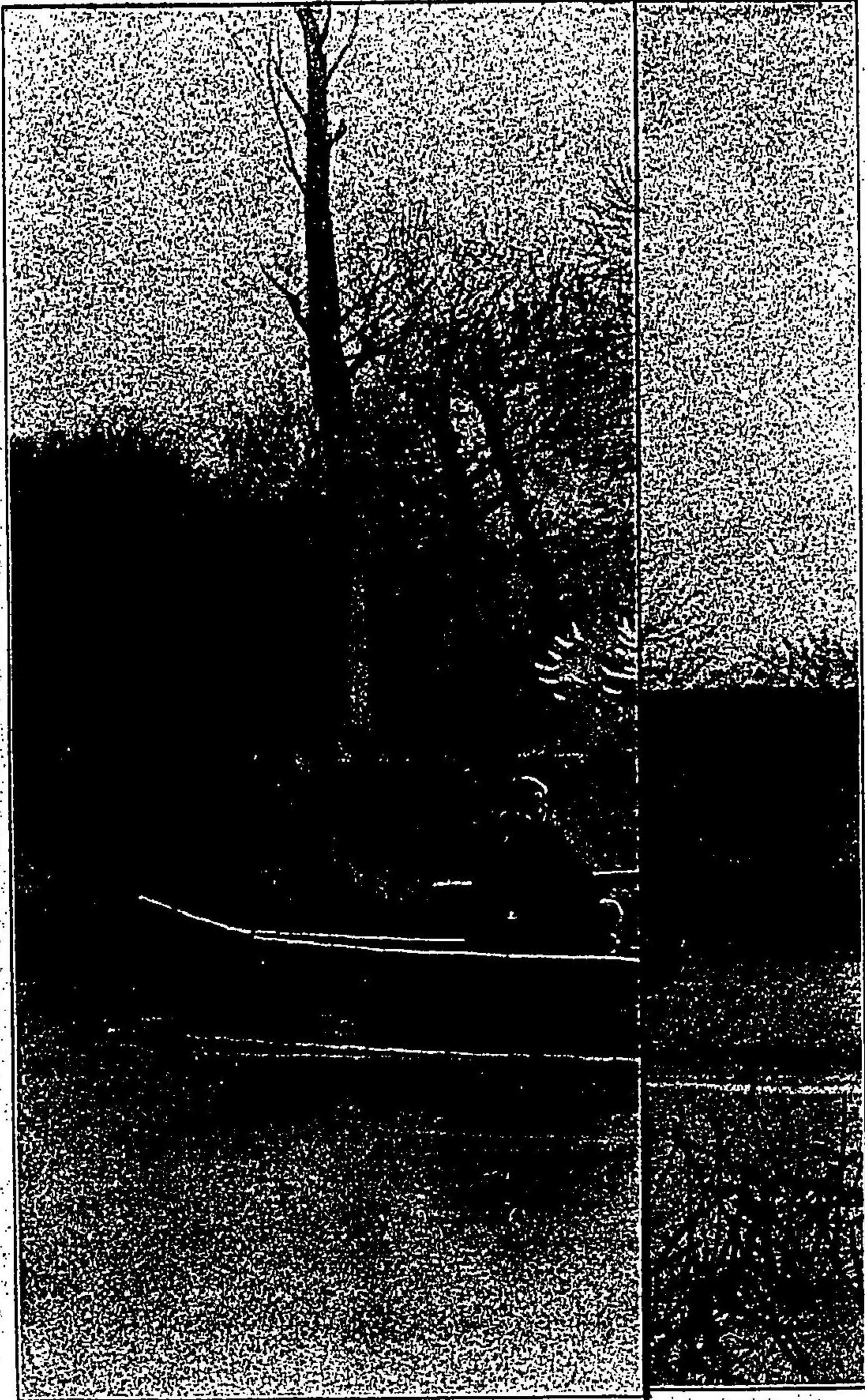
逃げ惑ひて竹椽に躍上り、居室に飛込めば續いて飛込み、普し揉合ふ其機に孰れ足蹴にかけたりけむ、十六夜行燈端無く倒れて真如の光忽ち消ゆれば跡煩惱の闇暗し。

其翌朝、例の四阿屋の軒端に、喜美子は死してイめりき。

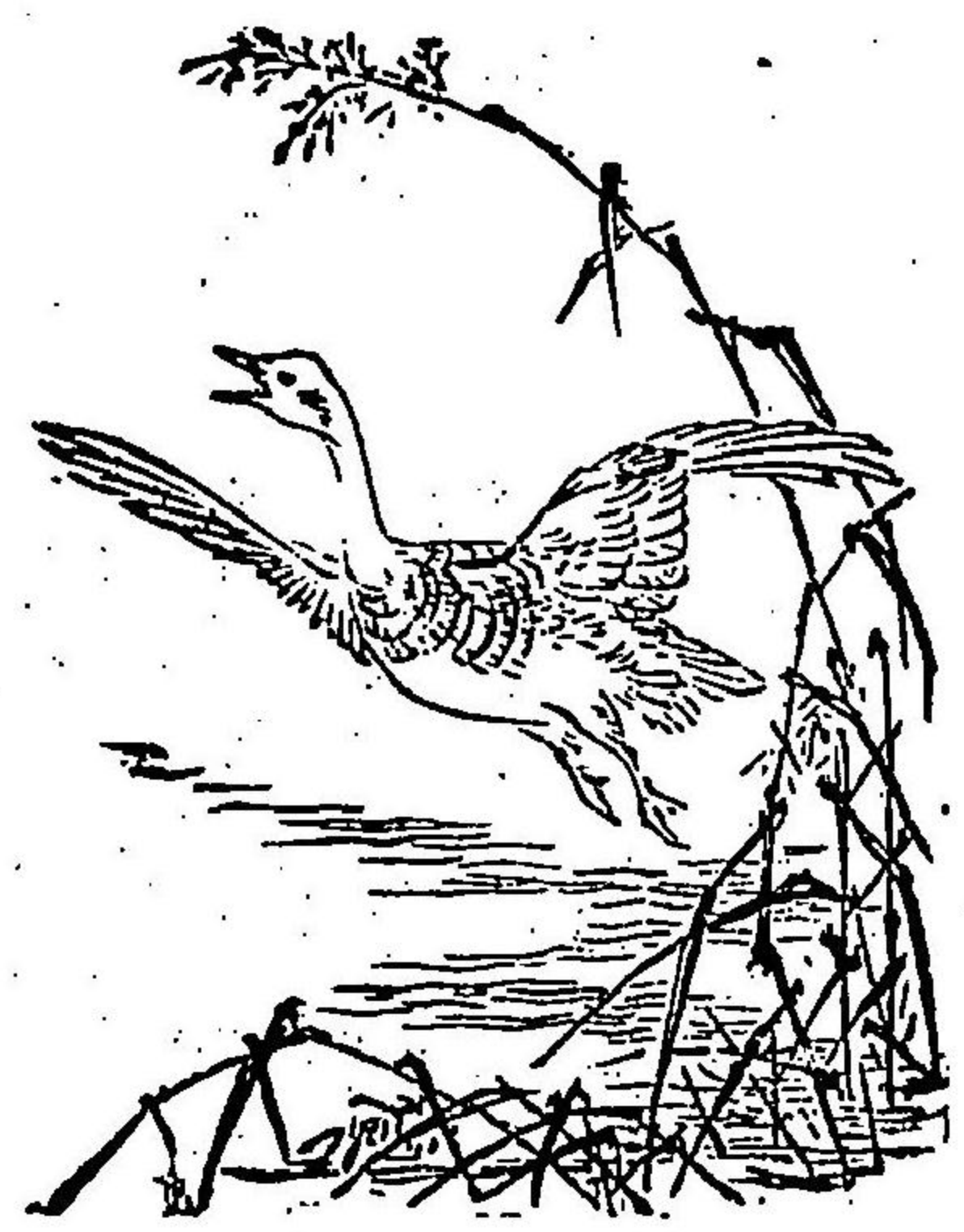
讀者若し大阪に遊ばし、必ず先づ天王寺瘋癲病院を訪はせ玉へ、春雄は今現に其處に在り。初野は其後病癒えて頃日後夫を迎へしやに聞く。

鈴 舟 終





小川一眞寫真彫銅版及印刷







小川一眞寫真彫銅版及印刷

田舎の花嫁  
(鈴木悦三郎畫)



# 露の蝶

三木天遊

(一) 己れは、どうでも死なねばならぬ。

降り暮らしたる時雨の窓の露車、見るに果敢なさは人の身も心細く、程近き増上寺の梵鐘の聲、聞くに胸のみ騒がれて、枕紙は寝覺々々の涙に朽ち、袖は糸の亂れの思ひに綻びて、吹くと無き夕風も骨に沁み入るかどうら寒さに、薄蒲團引被ぐとて、瘦せ枯れし皺腕を凝視るに附けても、つくづく明日の命を覺束なく、あゝ最う己れは助かるまい南無阿彌陀佛今日も暮れたか。

兎ても助からぬなら、寧ろ一日も早く死にたいものだ、病み付いてから彼れ是れと早や三月、可哀や娘は店と看病と臺所とを一人に、劍の刃を渡るやうな危い世帯を、まだ十七の小腕に斬て廻はし、夜も落々寝ず、喰ふものも旨くは喰はぬ貧乏暮らしに瘦せて、初花盛りの年輩に髪も結はねば湯にも浴らず、唯一心に稼ぐを見ても、あゝ己れは片時も早く死にたいものだ、兎



ても助からぬなら、早く死ぬるが娘の爲め。  
 死ぬる己れの身は年齢に不足も無く、浮世も厭になれば行く先は地獄が極樂か、孰れにしても黄金の餓鬼道の此苦しきは免がるべければ、唯此上は御芽出度なるのが責めても、辛苦の帳消し、死ぬれば火の車が迎へに来るか、如來様が手を引いて下さるか、蓮の臺で晝寝して、甘露の食滯の屁を放りて、尾籠至極と天人に鼻を摘まるゝか、但しは劍の山で芋刺にせられて、其上を釜で煮られ、三疊喚ばれて生戻り、血の池でおい／＼泣いて八釜しい奴と鬼に舌を抜かれるか、誠に未來は有耶無耶の、夢の夢の、雲の雲の、一切解らぬ事ばかりを、兎や角と考へて、何の末の未迄案じるでも無ければ、どうで行かねばならぬ處は行かねばならぬものと決めて、唯もう死んで仕舞へば如何とも成るやうに成る筈なれば、心配も要らず、苦勞も要らず、人も生命を惜まねば何事も氣安いもの、寧ろ一と思ひに咽喉でも締めれば、夫れで己れの身は濟んで仕舞へど。  
 思へば思ふ程不便な娘、其孝行が一入のいぢらしさ。また七つ子の昔母を失うてからは、天にも地にも親を一人と、親甲斐も無き意氣地無し己れを、杖とも柱とも頼みにして、死なすまじ殺すまじの一心に、憂きも辛きも忘れての働き。其心根を察して見れば、己れとても早く

平癒つて笑顔を見せて、嬉しき年の暮を親子二人の水入らずに、差向ひの寝酒に越しても見たく、固より無理から死にたいでも無けれど、思へば可憐娘の血の汗を、むさ／＼と苦い薬にして、なけなしの財産を乾し上げた擧句、假令生き残つてからが寄る年浪に働きの無い躰、始終は娘の出世の邪魔になりて、行末女の手腕に要らざる重荷、所詮は老い朽ちて喰ひつぶしの己れ。娘が孝行なればこそ、有るまじき事ながら姥捨山の昔を今に、譬へば芝浦へ投げ込まれたとて何の不足も云へまじき身と諦めれば、貧乏人に長命は無用の事。早く死ぬるが娘の爲め、あゝ己れは如何でも死なねばならぬ。  
 附き纏ふ厄介物さへ無くなれば、世間は女を捨てぬもの、況してや娘は鷹が鷹の容色よしに生れたれば、結句娘の身は案じたもので無しとは思ふもの、頼まれぬは浮世の人、身の上の好い時は兎角ちやはやと親切面して、五月蠅い程頼まぬ世話もして呉れど、一旦他の落目を見れば、我勝ちに逃げ出して町を避け門迄も通らぬ薄情、夫れを思へば寄邊なき捨小舟、浪風荒き世を如何に渡らむ。あゝ何とせう此れも氣懸かりな。  
 世間に鬼は無いと我から決めた昔は必竟佛性の自分に較べての迷ひ。何として、何として、世間は鬼の住み處、人を見れば泥棒と思へどは天晴悟つた何處の苦勞人が残せし言葉ぞい貧乏



した今、成程と合點のゆく事ばかり。娘の孝心口では誰しも譽めながら、今日迄遂に一人も不便の者と頼み無い身に智慧の一つも貸すもの無く、剩へ平素俠骨を賣る差配迄が、見て見ぬ振りが愛相が盡きてか、眼が腐つてか腸が腐つてか、今朝も今朝とて此躰裁を知りながら、有るべき事か無かるべき事か、邪慳にも店賃の滞りを催促つたやら。あのれ差配風情が假令世話あやうとて世話にはならぬが、此薄命に世辭にも笑止と云ふ事か、出て行けがしの賣め催促、其鬼々しい根性の何處を俠骨と自慢をほざくぞ。あのれ此己れの足さへ立たば、假令血を吐いて死ぬる迄も稼ぎに稼いで、見事十兩の金子其類柄に叩きつけて、泣き面の血にむ迄は容赦せまいに、口惜しいは此死病。噫無念の儘に死なねばならぬ因縁か。

それよりも尙憎く、意恨は骨に徹して其肉を啖喰るも嫌らぬは、あの荒物屋の久七奴、一昨年の晦日、手を合はせての男泣きに生きて居られぬと頼むを憐み、切場の苦しみを助けてやりし昔の恩を今は仇に、少し許りの借金を何も知らぬ娘に催促つて、處もあらうに大道の真中で、立催促したと聞いた無念さ、口惜しさ。噫これでも世間に鬼は無いとは、何處の頼馬が陰謀の餘りを吐く事ぞ。金が敵の世の中は何方を見ても大畜生、人間らしき奴一人も無し。

生き残つても生き甲斐も無き老の身に、頼む親類も無ければ朋友も今は皆警敵。貧乏すれば斯

く迄他に賣められるか。あ、死にたい事と死にたい、死ねば無念も口惜しいも殘念も何も無し、もうく浮世は厭だ厭だ。

己れは如何でも死なねばならぬと、獨り觀念の眼を閉ぢて、死にたい死にたいを唯朝夕の口癖に、他の見る目も心細き迄に病み寝れたる老翁あり。枕頭なる十五六の娘が、賃仕事の針の手忙はしき横顔を、涙に潤みし眼につれくと凝視めつ、泣くが如き細き聲して、お喋と呼びぬ。

(二) 泣くなど云ふより外は無かりき。

呼ばれて娘は針の手を措き、真底悲しげに眉を蹙め、氣遣はしげに其顔を打噴りて、また胸が痛むの、それでは脊をど早や立ちかゝるを、周章て、目顔に制めて否々何とも無い心配すな。今日は氣分も餘程快い、氣分も快い事は快いのだが、娘己れもな、己れも鬼でも最う永くはあるまらよ、斯うまめくと衰弱つては、消て行くやうに思ふのよ、今日は死ぬるか明日は引取るかと今ぢやあ最期が待ち危びし、覺悟は疾くに極めてゐる、もうく己れは死にたいばかりだ。



あゝこれ待つて呉れ最う泣くのか。いや悪かつた悪かつた、もう／＼云はぬぞ心細い事は最う云はぬ。なわに己れだつて、一人娘のお前の行末も見ないで、無理に此儘死にたくは無い、死にたくは無いが老少不定だ、況してや骨々も緩んで仕舞つて、身動きも儘ならぬやうに成ちやあ、兎ても最う。

あゝ困つた、また泣くか、さう泣かれると何だか己れも悲しくなつて、死んだ跡が心がいり、折角覺悟を極めてゐるに、また種々の迷が出で、執着輪廻に纏はれて死ぬに死なれぬやうになる苦しきは、結局冥途の障りといふもの、もう／＼決して泣いて呉れるな。泣いたとて死ぬるものが助かるで無し、萬事を因果と締めれば己れが死んでの後、此れを何うせう彼れを斯うせうとの思案も、出る程の考も出て覺悟の上は狼狽へて途方に暮れる事も無い道理。其所を思つて見れば、己れは如何でも助からぬものと、今から己れもお前も覺悟を定めて、唯行末の思案の臍を固めるが何より大切。泣いたとて死ぬるものが助かるでは無し、かう成ては女々しい涙は何にもならぬ糞にもならぬ、己れは疾くに覺悟を極めてゐる、お前も情願覺悟をして呉れ。いつ迄斯うして藥を浴びて、お前の苦勞を重ねさせうぞ、おれはどうでも死なねばならぬ身、また如何でも死で行く躰、お前は是から蓄も春の花を咲かせて、運次第器量次第、氏無くして

玉の興とも云ふものを、出世は今の世に女程冥加なもの無し。生きてゐたとして役には立たず所詮喰ひつぶしの厄介物の、空意氣地なしの死に損ひの己れは、一日も早く死ぬるがお前の爲めだ。己れといふ足手纏ひが無くなれば、心配するな世間は女を捨てぬものだ。況して小奇麗に生れたお前なれば、やれ嫁にならう、やれ嫁に娶らうと、それは／＼、五月蠅いほど云ふ人が有るであらう。其中で氣に適いたへ嫁に行き、初九詣でも結うて見ろ、如何な孝行なお前でも、やれ／＼父様が死んで下さつた御蔭で、安心な躰になつたと、これさ怒るな今こそ左様思つて居れど、左様なつた曉には位牌に對して能く死で呉れたと御禮を云うやうになる例だ。ハ、斯う云へば復泣くか、それで復怒るのか、其孝行は忝い、忝いが何の泣く事があるものぞ、さうなるが世間の定式だ。なわに愚痴ぢやあね、眞個に己れは喰ひつぶしだ、厄介物だ。お前が其様に大切に云つて呉れる程おれは愈よ死にたくなる。己れさへ死ぬばお前の身の上はどうともなるわさ。もう／＼命も惜くは無い。なわに己れは泣きやまない、もう／＼泣くな、お前も泣くな。泣くなと云ふ身も泣きながら、涙を隠す一言ばかりの空笑ひも、末は堪り兼ねて顔を反向け、涕打かみて泣くなといふより外は無かりき。



泣くなど云はれて涙は彌増しに堰り来て、いと尙悲しさの暮る思ひ、天にも地にも唯一人の親、而も行末長かるまじき老病の御身に、一日なりとも安心させて好な肴の一つも参らす事か、責めて藥だけは充分に服用させてと思ふも甲斐なき女の手腕に、それさへ心に任せぬ足らぬ勝ちの口惜しさ。思へば人間生を棄けて誰とて命の惜からぬものは無きに、現在親の口から死にたいと云はせる不孝の咎、誰に報ゆべき行末も恐ろしく、意氣地なき身の唯此儘に、親一人を苦勞の擧句に殺しもせば、罪は未來永劫わが骨に彫まれて、何の日か消え何の日か銷らるべき、假令我身は飢ゆるとも、假令此骨を粉にするとも、よしやお前は死にたいとも、どうでも私が死なせはせぬ。お前は何時も、世間は女を捨てはせぬと、氣安めのやうな事ばかりを、眞實らしうも云ひだが、横町の古着商の阿千代さんを御覽、兩親に離れて百日も経つや經たず、に店を畳んで、叔父さんが悪人とかで此春芳原へ賣られたとやら、どうでも女一人残つて立派に出世をしたものは無い、何日もお前の云はる通り、世間の人は皆鬼ばかり、死だ阿母様の遺言にも、お前は兄弟とて一人も無し、これからは父様が杖柱、世間の若い男等が何れ程親切に云つて呉れても夫れは皆お前を欺す詭し言葉、決して決して誠は聴くなど、呉れぬと云ひだつたを、私はよつく覺えてゐます。阿母様に夙く別れて私程不幸なものはないと思つてゐる

のに、此上お前に別れたら、私は生てる甲斐が無い。お前が若しや死んだら私は一處に首でも縊ると、思ひ入て父の顔を肥と凝視め、はふり落る涙を袖にも絞り兼ね、抱巻越しに執り着いて、諸手に弄と瘦せ細りし首を抱きて、顔を胸に埋め、どうでも死で下さるな、後生だから死で下さるなど、緊擗着いて泣き號ぶ不憫さいじらしさ。悲しや此れを殘して行かねばならぬかと、覺悟極めしとて親なり子なり、あゝ是れが何として死なれうぞ。あゝ己れは死なれない、死なぬ死なぬ、もう一死なぬと齒を食ひしぼりて、涙の後は何時何時も、死にたい心も死にたい口癖も、娘の悲嘆に消え果て、生命を心の儘なる様に、思はず知らず死なぬと叫びぬ。若しやは今宵は、明日は如何にと、死を待つ身も流石子故に之を怖れざるにあらず。況して死を怖る、娘の身は、折節の小夜の寢覺にも、寢顔を火影に透し見て、射を氣遣ふ苦勞の程朝夕に絶えず。来る日も来る日も心細く味氣無く、泣く泣く暮れ行く夕べ夕べは、親も子も一日の命を削られし思ひに、三度の食事も孰れ其中死ぬべき身に、要らざる冥途への駄賃と思へば更に旨からず。生ける甲斐なき父子暮らしの哀れ果敢なや。

其涙の露の宿は、愛宕山の青嵐脊戸を叩て、寢覺がちなる老の夢路は夫れも無情く、芝山内の松原軒端に不斷の翠を籠めて、破れ底に是も恨みの風の音、偕も昔は大樹様かと舊主を思ふ夜



咄しに、父が幕府の威勢を語る、おなり門に程近く、見るかげも無き鬱悒き店に薄燐き古暖簾の墨色も覺束なけれど、筆跡ばなりは古代なる和流見事に、御鹽煎餅と書き做したる下に、戸倉店と添へたるも似合はしからぬ氏に素姓も無と忍ばれて、襷げかゝりし春慶塗の小笠二つ三つ並べたる硝子の蓋も大方は破壊れて紙の縷目も煤びたるに、近頃は招牌ばかりを名残に鹽煎餅は一片も無く、是れを思ふに餅を搗くべき男の腕に事缺きてと覺しく、かゝる世帯に如何にして資本を得しや、一目に數へ盡す程ながら些かばかりの駄菓子を賣りぬ。

晝はお蝶店番の片手間に、賃仕事の手忙はしく、欠呻する間も惜しげに、往來の人を一瞥だに見むともせず、何時も何時も一心不亂の横顔の、目を追うて瘦せ細るを、浮世の人は娛樂に飢えて、悲哀に目無く、誰とて不憫と見るものも無かりき。

(三) 見たい處を見せてやるのさ。

裁縫を頼まれし本場結城の小袖、我ながら小氣味よきばかり巧妙に出来上りて、わが物ならぬと綺柄の意氣なるも頼母しく、これに綺羅を着飾る人よりも我れ先づ嬉しさに打返し、縫目を眺めて不覺に微笑み、懸て折目正しく丁寧に畳みて、日頃の霖雨に延引勝なりし洗濯物の種

種、昨日の晴天に、利き過ぎたる糊を氣遣ひて是れには惜げながら詮無ければ積み上げ、大切なる絹布皺にせまじと別に包みしを其上に置き、更に兩種を風呂敷に纏めて先づ此賃銀に三日許りの薬料はありと、何日に無き満足の眉を暢べて、奥の室に向ひて父様それではと云ひかけて、早や御熱睡と寝顔に打笑み、其儘包みを兩手に抱へて、お蝶いそぐと我家を出でぬ。

小走りに二町ばかり行きて立ち寄りしは、下宿業内田と記せし瓦斯燈の尙新らしき家。静に格子戸を開くれば疊一疊ばかりの板框、寧ろ式臺と云ひたげなるが有りて玄關の障子感心に閉切りあり。其構造通常の下宿屋と稍趣を違へたる、思ふに此業に素人なるが近來思ひ付きて創業めしか、さらば八字髭達しき方々又は濃縮細の志さきたらしなく、結目前に堆く、アルハベツト見知らぬ眼に金線眼鏡を輝めかして、厭味は淺黄の繪子の手巾を面隨だらけの首に巻いたる、高等職人の類を相手に、臺所せぬ下婢の容色よく、偶々荒くれたる書生の空室を尋ねれば、打扮を淺間しげに噴りて五月蠅げに、御坐りませぬと障子を確と閉切る類の家にて、半可通の鼻毛、田舎漢の尻の毛、扱くに鑷子の忙はしき怪しき宿とも見らるべし。お蝶は障子を開けて歩みながらの小腰を屈めぬ。

乾布巾で磨き上げて桑緑の艶々しき桐柱の長火鉢に頬杖つきて、何をか思案顔なりし内儀上目



にお蝶を見て莞爾笑ひ、おや蝶ちゃんさあ此方へと指もて火鉢を叩きながら、今日は何だか薄寒いのでねへ構はぬから暖たまりよ。おや左う最う出来たの、おやあ洗濯物だけ二階のへ渡して来な、絹布の方は私から明日にでも届けるから、夫れで勘定はコウト幾許になるかねへ。左う、それで可いのかねへ。おやあ忘れぬ間に呈げて置かうと云ひながら、火鉢の抽斗より財布取り出して銀貨を摘み出し、洗濯物は骨ばかり折れて賃は安くて本統につまらないねへ、夫れから見ると仕立の方は、殊に絹布と来ちやあ較べものぢや無いね。お前様は素人には珍らしい腕前で、ホンニ洗濯物なんぞ玩把らして置くのは惜しいからね、私も成るべく仕立の方をと心懸けて種々と依頼人を索しては居るがね、どうも無くて私も頃日ぢやあ落胆してゐるのさ。左うだよ洗濯物は骨が折れてね、なかに針の動かぬ人の仕事さ。お前さんのやうな良手のあるものは、仕立の方が腕前も見えてさ、左うだよ、全くだよ、結句洗濯より針の方が骨が折れないよ、左うだらうとも。併し夫程になるには餘程勉強したいらうね、何教はつたのは二年足らず、おや左うなの、それで能くまあ、全然素人ぢやあ無いよ此出来榮は。たつた二年なの、おやあおや驚いたね、天稟器用なんだね、まあ此子は。内儀は惚れくどお蝶を贖りて其眼は得云はぬ嬉しさに輝やけり。

打噴られて打俛首れ、いしえ不器用ですよと云はでもの事を、恥ぢ入て云ふ性根の愛らしさ。胸は明日の日病人への馳走を敷へて、心は此後の囑托を多かれがしと、飽迄世帯じみしお蝶、褒めらるゝ嬉しさをより活計の業の殖えしを嬉しく、どうぞ此後とも宜しくお心懸けなすつてと遠に丁寧な頭を下げて、私は最う誰一人頼母しうして下さる方も無く、唯當家の御仕事ばかりを待つて居りますと、早や涙含む目元、打頭ふ聲音、哀れ苦勞が教へし世辭か練言か、暫時の笑顔も速き愁の雲に隠れぬ。思へば裁縫の教師に褒められて学校の退出を待ち侘びしく、歸るや否や両親の前に次第を語りて悦喜に鼻を動かかせ自慢は十日ばかりを絶間なく口を出る、世の嫌様の習例に比較ぶれば、まだ十六の小娘が褒められて泣きし心根も甚どませたり。内儀は両手を舉げて抑へるやうにお蝶を制し、何さ左様心配をお爲で無い。かうしてお互ひに氣心も知れて見りやあ、私も及ばずながら打放つては措かないよ。それにお前は針も此通り手に入れたものだし、容色は眞個に此邊りでの評判物、いしえ眞個だよ。實は斯うなんだよ、二階のお客様方がね、始終お前さんの事ばかり言つてさ、皆が口を揃へて、やれ容色が佳いの、やれ孝心者だのと罵々云つてさ。それで私が、それ何日だったか、湯屋で逢つた時に、洗濯物や任立物が有るから一度宅へ来ないかつて、實は皆様が餘り見たがるから伴れて来たやうな仔



細だよ。おや何が羞かしいの、怒つたの、ホ、ホ、ホ、此娘はまあ、怒らんでも可いわさ。だつて仕方が無いわ、腹が立ちやあ別嬪に生れた因果と思ふが可いのよ。何怒りやしないの、さうなくつてさ。惚れないと云つたつて、男が惚れるから仕様が無い。なわに見たがる奴には存分見たい處を見せて遣るのさ、施しをすと思や濟むでは無いか。

それで思ひ寄らず突然お前が来たものだから、さあ二階の連中大騒ぎだ。有りもしない衣類を引き出してさ、誰も彼も頼む〜と我勝ちに二階を飛び降りて無闇に重ねたもんだから、宛然古着屋か七ツ屋の庫後へだ。ホッホッホ流石のお前さんも仕事が澤山なのに喜んだもの、一つは又胆を潰して私の顔ばかり見てたんだもの、私は最う可笑しくつて可笑しくつて。

内儀は笑ひに痛む腹を抱きて、真面目に俯首けるお蝶を自烈たく、おや此娘は真面目で、濟ましてゐるよ、皆の心入れが可笑しいぢや無いか。眞個に別嬪には生れたいね、面が見たいばかりで速座に仕事を山のやうに積んで呉れるさ。蝶ちゃん嬉しかあ無いの、お前故に彼の大川さんね、洗はないでも可い寝衣まで出して、着替が無いので此頃は銘仙を着て寝るのよ、若い方は、大きな聲では云はれぬが、女に係けちやあ馬鹿なものだよ。

それから二階でお前さんの話が些どの間も絶えないよ。二三日前から洗濯物は何日出来て來

るつて交代のお訊問だ。五月蠅いね〜何日出来るか知りませんよつて窘めて遣るとね、急ぎはせぬが己れの不在に來ると困るから、夕景に持参せいと云つて呉れなと、鬚でも生やして何といふ馬鹿らしいのだらう。女に係けちやあ皆是れた、不在に來ると困るからつて、オホ、何が困るのだらう。別嬪には生れたいものね、男は皆こんなもの、出世は腕次第だ。

お前さんも心配しないで、氣を浮々と持つが可いのよ、慥か今年十六だつてね、追々奇麗になるばかりさ、これからが花盛りだ。今に男が澤山附き纏つて、身動きも出来ぬやうになるよ。羨ましいね私なんぞあ最う駄目だ、四十の聲を聞いちやあ男も裸足で逃げ出すよ。

私も及ばずながら出来る丈の世話もするから、閑があつたら毎々遊びに來るが宜いよ。折節はお客様のお相手もすると又善い事も有るよ。お染なんぞあお客様から半襟を頂いたり、二十錢三十錢と祝儀を貰ふので、つい小使錢に不足も志ないよ。獨身暮らしの方は大氣なものでね、それに總じて殿方は氣さんじなもので、苦勞も忘れるやうな面白い話をなさるから、氣が詰る時は何時でも遠慮は無いから遊びに來て、まあ其顔を見せても遣るさ、施しと思つて。見せ物に成たと思つて。

オホ、是は申儀さ。



私もお蔭で立派な官買様や會社へ勤めなさる方や、種々懸念にして頂くから、行くくお前様の爲に悪うはせぬからぬ、姉とも阿母とも思つてお呉れよ。お前さんのやうな孝行な従順い娘を持ちたいよ、私はもう何だか久しい昵親でもあるやうに、眞個に他人と思はないよ。歸り了りて内儀は昵とお蝶を凝視めぬ、其目は何となく光を帯びて、一種の云はれぬ熱心の色も見えし。

お蝶は唯口重く、忝き由を告げて尙此上の保護を頼み聞へつ、貧に育ちて斯る無端き言葉も自然浮世の耳に馴れたれば、嬉しと笑むべき浮きたる心は露も無けれど、淺間しと囁むべき眉も寧ろ可笑しさに日頃の物思ひの霞も晴れて、兎に角に慙くばかり持て嘸さるゝを可厭とは更に思ひ寄らず、唯羞かした顔のみ紅葉の色を染めぬ。况して頼み無き身に頼みある言葉の端々、濁きたる身の思はぬ流水を聞き得たる心地して、之れには胸もむづ痒きばかりに嬉しく、恩を仇なる世の中に珍らしくも願母しき人よと心から涙に咽びて、忝き由は誠に胸の底より出でぬ。

折柄二階にけたまはしき柏手の音、内儀は笑ひて、性急な大川様が、お前の聲を聞きつけて、待兼ていらつしやる、聰耳な事。

それではお前さん其れを持って、云ひも果てず立て階子を昇るに、お蝶心得、洗濯物小脇にして従ひ行くにも、知らぬ中は何とも思はで済みしもの、先方の胸を知ての上は、今更顔を見らるゝが辛く、見せるが羞かしく、今日は殊更取亂したる扮装、是れは詮なしと諦めても、まわ何とせうぞ此亂れ髪、餘りの餘りの見苦しさと、胸躍らせて、咄嗟の際にも女心の細かく、竊と頭を探ぐるに今日に限りて、口惜しや忘れたりや、えゝも掃櫛の無い折も折、拍子の悪さよ。

(四) お前は嫌厭かも知れないけれど。

廻れば廻廊鏡の如く、陥むに勿鉢無き駄足の恥かしく、するくど滑るに音ありて、内儀が穿ける革の上靴の我にも欲しや、責て爪垢の隠れぬべきなど、何と無く心憶れて見るに初めて二階の有様、お蝶が目には玉樓に入る思ひして、内儀を是程の分限者かど不覺に見らるゝ後、右の耳の蔭に長き疵ありて襟足の禿けたるを、泥棒にや斬られ玉ひしと打噴りて、財産が有りても怕きは浮世と、つまらぬ事に心奪られて刀の痕とは推しながら、是を毒婦の商標と知らぬお蝶、ませたやうでも小供の目には唯闇の闇なる世の中なるべし。



突當りの障子細目に開けて、内儀俄にも蝶を後に圍ひ、オホ、ホ、ホ、と笑然怪しき高笑ひして、立ちながら待兼様と云ふ、室内よりは何が可笑しいのかと、是は二人の聲なりき。何がつて今更、おつに濟ましたつて駄目ですよ、可いよ逢はせる人を見せないから、濟ましたきやあも濟まじなさいよと瘦せたる身を肩尻張りて立塞り、いゝえ退かない逢はせませんよと愈々笑て果てしなし。

困るぬ内儀さんにも、此年齢で小供のやうな真似をするど一人が笑へば、何時迄其處に立ておたつて、一人ぢやあ二王とも見えないよ、退かなきや可い僕が退かせるど今一人は立上て立躰に内儀を引摺込み、態々案外の背臉して、あや蝶ぢやんか小些も知らざつた。

知て知扱て待焦れて、其實内儀の坐山戯に慣悶氣味ながら、今更思ひ染めぬ振りも事可笑しう、少許は間の悪げに周章たる目禮して、さあ此方へも勢無く、飄輕なる身はも蝶の閑雅さにとさまぎして、座に復りし時は氣色ばかり顔を赤らめぬ、口には似てまほらしや此男、流石に未だ初心も残れり。

も蝶は羞かしき中にも、憊る戯れを流石に可笑しう、日頃涙に馴れて取に珍らしき高笑ひ、口輕なる内儀に釣込まれて、つい我知らずの笑顔、凄れし頬にも片笑唇泣きて、男の目には是れ

とて罪の一つなるべし。

内儀の與へし坐蒲團を強て辭退して丁寧に傍に疊み、無言に一禮の後身を退きて斜に手を向き、手齋に風呂敷包みを解き敷ある衣類を取り出して片隈に置き、糊の堅かりしを呉々も謝りて是には懲り玉はでと此後を願ひ、堅くなりて坐れる姿、何處かに奥床しき爪はづれ、いつの程にか真面目になりて、惜しき笑顔の何處へやら。

内儀は此風情を鈍かしく、眉を擧めてコノ蝶ぢやん、そんなに眞四角に座らないで、可いから座蒲團をお敷き、馬鹿に堅くるしいのは、古風で近來流行らぬからぬ。それに此處にいらつしやる方は皆捌けた方で、萬事が當世風で、先づ遣りッばなしで、どちらかと云へば女好きで、ホ、御免なさいよ、夫れぢやあ堅氣な女嫌ひでいらつしやるが、兎角女とぢやあばや仰しやるのがお好きだから、ホ、ホ、未だ不可いの、だつて左うなんですもの。だからね、何も遠慮は要らぬから、お前も此家では氣晴らしを爲ると思つてね、と後は流石に口の中なり。

聞きしも蝶の顔色は變りぬ、大恩ある人に叱られし程に胸を打たれて、愛嬌に乏しし我身を悲しく、馴れぬ挨拶の拙く、素振の厭味に見えしにや、親切なる内儀さんさへ氣に障へて、見かねて夫れと無き折檻の心かと、さらでも馴れぬ人の前には蠅の飛ぶにも胸躍らする乙女氣の習



ひなるに、内儀の言葉の我を嘲みしやう聞做されて、冷汗は額に當惑の胸の中、何とて斯うは口の重きぞ。

氣散じなる皆様の前に我獨り物をも云はぬは如何にも高慢らしう見えて憎かるべく、座輿を殺ぐは失禮の第一と内儀さんも能く見兼ねて我を迂痴者よと愛相を盛かし玉ひてかど愧かし、斯くては臆て此御二人にも厭はれて、遂に此家の闕高く、從て折角拾ひし内職を放れなば、損は我身にありて嫌はるより夫れが可厭なり。兎に角に茲嫌はれてはなるまじき我、行末御最負を願はねばならぬ身の、エ、何とか云うて見たし、面白き事は得云はぬ迄も、實て愛相らしき一言もど、考ふるに口は愈々重く、云ひそくく胸のみわく。

一座の白けしに内儀は不興なる顔色、男二人も無言なりしが臆て八字鬚ある年當なるが思ひ出せし様に茶器取り出し、内儀さんお染は居るか、何か旨さうな菓子をと銀貨一片投げるを内儀は拾ひて、お染も三も湯に行たざり、もう追附と猶豫ふをお蝶好き機會と身を起し、私が一走り帯締め直すを内儀は叱るやうに制めて何私が行くよ、お前はお相手をして居など、立上り様に二人を見て莞爾、石田様も大川様も御果報ですよ、まだ奢つても可いでせう。外の御二人を御覽、折も折散歩に御外出で、無歸つたら口惜しいでせうよと喋りながら、二足三足

行きて復立戻り、二人の顔を覗き込みて、何か最う別にと異様の目語、此五月蠅さを鷹場に冷笑うて石田は八字鬚を靜に捻りつ。知れた事よと云はぬばかりに、其れしきの事は年輩甲斐に氣を利かすが可いね、珍客の前で御馳走の品定めでも有るまいと、其實苦しき腹の中を、内儀の警いに憤悶れた風情に見せかけて、さも面白からぬ眉間の皺、是ばかりは隠れぬ誠、罪なき

烟管は灰吹に叩かれて、濟まぬ顔は烟の裏に包まれぬ。内儀鼻端に笑を浮めて初めて合點したる顔に夫れでは例のをと鳥渡石田の顔を見て、臆て忙がしげに廊下をはたぐと。

お蝶は馳走と聞きて身を縮めぬ、それでは濟まらずと逃げ出でんかと右顧左眊するを、疎かさず膝の前に茶碗を置かれて、捨ては行かれず當惑の色眼に現はるゝを、石田は優しく手を取る程に、もつと前方へと頻りに招きつ。お前は遠慮をするから可くない、夫れも苦勞が教へたのだ、まだお前の年頃には遠慮も何も無いものだに。是れから僕が退々活潑に躰けて遣るから、可いか兄と思ふのだよ。毎々遊びに来るのだよ。さあ〜ずつと此方へ來な、さう遠くに居ちやあ談話が聞えぬよ。なわに禮も糸瓜も要るものか、僕は國に丁度お前と同年の妹がある、お前の苦勞に馴れて利發なのを見ると、妹なんざあ實に馬鹿だよ。感心だ、お前の孝行にも驚い



たよ、看病やら商賣やら何から何迄一人で働いて夫れでまだ内職もせうと云ふのだから、眞個に感心だ。僕もお前の身の上を詳しく内儀から聞いてね、泣いたよ眞個に。それで最う逢はぬ以前から、一人で勝手にお前を義妹と極めてゐるのさ、ハ、ハ、お前は嫌厭かも知れないけれど、お蝶は嬉し涙に膝を濡らしぬ、内儀さんにも母とも姉とも思へど云はれ、今また此立派な方に、妹と思ふと親切な言葉を開く此身は何處に取得ありて是程優しくされる事ぞ。勿体なし何の私風情を妹の何のど、夫れは餘りに情過ぎて、どうやら少し御申儀らしいと首を斜めた、右手を疊に身を屈めて、怯々見上げて昵と男を凝視めし目元、自然なる愛嬌溢るゝばかり、雪より白き容顏の頬の邊りに紅葉を染めて、丹花の唇は袖に隠れぬ、見惚れて氣の遠くなる程麗はしき其姿に、二人は心を奪られて、我を忘れ、暫しは茫然として無言なりしが、先程りよ石田にのみ先を越されて口を挿む隙の無かりし大川、茲ぞと膝を乗り出して石田様の口前に詭らされては不可ないぞ、此人は口ばかり宜くて夫れは薄情な心と後は高笑ひにして、蝶ちゃんはまだ嬰兒だ。石田様などを信用しては可けない、と云ふを打消して、おや大川が、猜みんだな、怪しからん薄情など、は人を害ふにも程がある、と石田は流石に不興顔なり。

(五) 骨身も鳴る程嬉しくなりて。

松に縋りし藤の花は宵々の月をも宿すべし、棚無き藤の地を這ひて、人に踏まるゝ花の身は、世に頼り無きお蝶が上なり。

絶らむとすれば無情き嵐に挽き離され、起きむとすれば強顔き草鞋に蹂躪られて、浮世の人は皆鬼ばかり、愛き身は唯此儘に朽ち果つる行末と、神も佛も怨めしくなりて此世に望を絶ち、老病の父さへ見送らば我も諸共に死なんと迄、思ひ迫りも折も折ゆくりなくも内田の内儀に親切なる言葉を掛けられ、母とも姉とも思へど、假りにも他人の口からは嘘にも出まじき事を思ひ入たる涙聲に聞かせられて、お蝶勿体なき迄に、忝く、地獄で佛に逢ひし程の嬉しさに先だつは涙にて、聞くに露程の疑も挿まねば、勿論其心の底を味ふて見る程の廻り氣も出ず。唯無關に其人の頼母しくて頼母しくて、今日此頃は朝夕に其噂の口に絶えず。耳遠き父に五月蠅い又たかと眉を顰めて、叱らるゝ迄になりぬ。

叱られて口は咄めど、心は片時も其人を忘るゝ事無く、氣散じて氣輕で親切で實意で少しは瘡痂あれども若い時苦勞をなされしとやらにて思ひ遣り深く、夫れで恐ろしく智慧が有て世に聞



ふ男優りとは彼の様な方を云ふなるべしと、名染むに附けて次第に敬ひ親む心深くなりて、内儀がべちや〜と喋り立つる金切聲さへ、他の氣を外らさぬ愛嬌と首肯きて世才に長けたるに心から感服し、我が口の重きを愚物の證據と淺間しがりて何でも彼の様に萬事を面白可笑しく云ひ做して巧みに人を翻弄ぶように成らねば、才智ある女とは得も云はれまじ、我にも内儀の智慧の欲しや、如何にすれば彼れ程賢くなれるだらうと、折節は胸に手を置きて、我が身の愚なるを情なく思ひ、思案に耽ける日の多くなりぬ。

如何に心は正直なりとも、智慧なければ渡り難き世を幼き胸にも幾そ度の苦勞に兼てより能く悟りつ。我も内儀程の智慧さへ有らば親一人を涙に暮らさせもせず、我身も錦を飾る袖は無くとも兎に角に食ふ事には心配せず、やす〜此世を渡らるべきに、假令小供の腕なればとて、日々小買の米に胸を痛め寧ろ死にたいと迄に思ふ意氣地な事も結局は愚なればこそ。智慧だに有れば浮世は何事も思ふが儘に、出來ぬ事の一つも無く、辛い事も末は樂しき實を結び、苦勞も反て出世の種と成る例、誠に賢い人は一生の幸福、如何ばかりか浮世も面白かるべき。夫れとは反對に智慧無き者の淺間しき、貧すれば鈍すると辛苦に遭ふ程馬鹿になりて、親切なる人も可哀相だが彼れでは困ると末は見放し、見放されて立瀬なく、身は唯捨舟の頼邊無く漂ふ末

は、得知らぬ磯邊に捨處無き腐れ板と朽ち果て、死後のうき耻を世に晒す習ひ、愚には成りたくなし、馬鹿と蔑視されて餓死するも人一代、ゑらいと云はれて出世をするも人一代、あゝ何うすればゑらいものと人に尊まれ、何うすれば出世の出来るものかと、人知れず考ふる事の多くなりて、寝られぬ雨の夜も重りぬ。

智慧の欲しきにつけ、先づ内田の内儀を模範と定めつ、兎も角も賢き人を模範なば自然其智慧を受け得べしと、幾日の思案に思ひ極めし、幼弱き心根の不憫なり。

出世の望ましきにつけ、思ひ起すは其人の言葉、容色だに好ければ出世は腕次第と藝の日聞きしより其聲耳に残りて消えず、誠に父上も世間は女を捨てぬものと何時も〜口癖に云はるゝものを、彼是符を合はすやうなるも頼母しく、孰れも世間の風を飽迄吞だ苦勞人の言葉、一人は實の親なり一人は母とも思ふ人、よもや〜嘘ではあるまじ、嘘で無〜とすれば我は容色の好き方か、内儀の云はるゝを誠と聞けば、嬉しや我を美人とか。

我は眞實美人にやと、骨身も鳴る程嬉しくなりて、竊と塵だらけの鏡臺を取り出し、映し見る像を今更珍らしく打眺めて、昵と凝視めて、儻少首を振て見て、恍惚と見惚れて、不圖心附いて四邊を見廻はし、更にひた〜と寄り添ひて、微に目を細め、故とニツと笑つて見て、露



出れし前齒の齒並悪しきを悲しがる無邪氣さ、浮世に神のましまさば、涙に潤みし目を閉ぢて、哀れ見まじと嘆ち玉はん。  
 花に眠りし露の蝶、清かりし夢も暫しに醒めて、仇なる香りに狂浮れ、怪しき風に誘はれ、迷ひ行く末如何なるべき。

(五) これこれ、これが女の玉の輿。

お蝶或日所用ありて新橋邊へ行きし歸るさ、路に逢ひし藝妓の風俗昨日迄は二た目とは見ざりしものを、今日は何とやら懐しきやうにて我知らず見惚れ、立ち停りて見返るに島田留の意氣なる首筋の美しき、出の衣装の立派さ。尙見送るに心も其腕車と共に飛びて嗚呼彼れも女、我も女、容色も夫程劣るまじきに、此見る影も無き扮装折々の流行も聞かで爛り返つて暮らす果は、彼の腕車曳く車夫風情を天晴働きの有る立派な男と大事の大事の夫に持ちて、夫れで他に羨まるゝ程の幸福。悪くすれば大酒飲みの、悪所好きの、博奕好きの、喧嘩好きの、仕事嫌ひの金儲嫌ひの、女房嫌ひの、子供嫌ひの、箸にも棒にも懸からぬ悪黨を亭主に持ちて朝から晩迄打たれたり擲られたり踏まれたり蹴られたりして、夫れで米代の心配から春秋の衣服の才覚、

酒屋新屋の借金の断りやら晦日晦日の諸拂ひの苦勞、何から何迄一人で脊負つて赤見の世話晩酌の準備の片手間に、血の汗流して巻烟草や状袋や摺附木の箱貼りや羽織紐の縫り鼻緒の仕立、ミシンの稽古菱葉帽子の編方迄習うて、何でも彼でも手當り次第に、季節々々の賃仕事を夫れから夫れへと一日の手も空けず。稼ぐに貧乏は反て追附き、働くだけ肝腎の亭主は懶惰を極め込み、好い嗅持てお蔭で氣樂に酒が飲めると憎くさげに鼻の先で冷笑ひせられて、それでも子の可愛さに縁も切られぬ不運、泣くの涙で一生を九尺二間の地獄に窘み、鬼に抱かれて骨肉も粉に髪も抜ける類もとける、永の苦勞に病身にもなる、毎日の心配に癩氣も起る血の道も出る、さんざ苦勞の擧句の果は満足に樂も飲まず穀潰し奴早く斃ばれと云はねばかりな愛目に遭ひて子供の出世も見ず餓える程に邪慳にせられて、其儘世間の光明も知らず闇から闇へ死んで行くと云ふような、無残な身の上に成るかも知れず。あゝ貧乏ほど厭やなものが世間に有らうか、我が身の末は何うでも此位な因果は覺悟をせねばならず。年頃に成た上釣り合ふた縁と云へば土方人足車夫の外には魚屋八百屋荒物屋など。同じ商人と云はれても下卑た方で無ければ、到底着替の一枚も無い裸躰同様な我を嫁にと望む筈は無く、棟梁の親方のと随分顔も利れた工匠、或は又何屋と名代の腰篋を懸けて人も一目に首肯く程の家にては、箆筒長持釣臺都合何荷の荷



物と、五月蠅き迄に準備を詮議して、嫁娶りに世間の信用も極まり、家格も是れに準じて定ま  
るべき、人間一世一代の大禮と見得名聞を先にして、随分と出来べき丈の華奢を街ひ、是れに  
借金も苦しからずと、飽迄世間の手前に面目を思へば世に乞食女を拾ひ上る茶人は無く、兩掛  
片荷も襪履を詰めねば塞がるまじき我が身などは兎ても兎ても、夢にも其處等の花嫁とは成ら  
れぬ事なり。譬へば男に想はれて未ほどの約束互の胸に刻まれて、水漏らさじと契りを籠めて  
の人知らぬ深い中に、其男實意淺からず思ひ遣り深く、其方故には世間の義理も親兄弟も捨物  
にして毫も未練無しと嬉しい事を五月蠅い程に聞かされ、我も此外に男は無しと極めての後、  
いざ嫁の詮議となりての上は、流石に親の前世間の前、あの鹽煎餅屋のと口切る程の勇氣の出  
やうか。よしや一思ひに云つて退けても親類縁者夫れ好からうと手を打つ者の有るべきや。况  
してや現在夥しき嫁入道具の其品々を敷へ立てられ、呆れて例の媒人口かと、目を睜りし事  
が眞實眞の誠にて、目前見合ひの席に錦の帯の綺羅々々しきを是があのれ我物かと思惚るゝ程  
の花嫁を、己れは厭やだと唾を吐いて何としても彼女で無ければと、世間も欲も打捨てる剛情  
が、男なりとて出来べき事か、我とて男ならば左様々々無欲な事は出来まじ。思へばく我れ  
は何たる不幸な生れぞ、兎ても立派に嫁入りの出来まじき身の上か。持つべき夫は瀧間しき土

方か車夫か。人間らしうも無き匹夫に添ふて一生を長屋の奥座溜の傍に暮らさねばならぬか。』  
斯くては女は氏なくして玉の輿といふも、了解らぬ事の第一、容色さへ好くは出世は腕次第と  
云ふもどうやら、嘘らしう思はれ、昨日迄も今日迄も是れを力に何時に無く心も浮々と暮せし  
が今更馬鹿らしうなりて其心が我ながら解らず。何の爲に身を斬るやうな錢を捨て、二年ぶ  
りの髪結の手に髪も婀娜めいた緒熊に結うたる事ぞ、何の爲に小袖も小綺麗に着替て帯迄新し  
きを締めたる事ぞ。何の眞似ぞ、何のたはれぞと、一切我身が不思議になりて馬鹿げて馬鹿げ  
て馬鹿げ切て、淺間しさに胸を湧やし、汗癩も起り、ふらくとなりて思はず半町ばかり  
走るが如く足早に行きしが、四辻の角にて鉢合せするばかり、ハタと行き當りしは八字鬚殿め  
しく、金縁眼鏡の眩く、其眼元の怕らしく、羽織の五ッ紋帯の金鏈、一目に知らるゝ天晴の當  
世紳士。是はと恐縮して周章て、道を避くる途端、また生憎に突當りしは見る目も覺むるば  
かりの美形、婀娜ッばき大丸鬚細面に映り宜しく、綺羅を飾りし帯小袖、目も眩ければ品は何  
とも見わかぬと、流行の粹を蒐めし扮装意氣とも粹とも何とも彼とも云ふに云へぬ麗はしさ、  
眞紅の蹴出しに駒下駄も隠るゝばかり、此處風も嵐も禁制の事と貼紙したき程に裾裾き亂らは  
しく、浮れ男の魂飛込むべき邊りの歩むに伴てちらめくに此夕暮の寒さの他事ながら笑止



なる風情、憎からぬ薄化粧の頬の邊りに、噤うて見たき程えたるき片笑唇を見せて、何をか笑ひ聲して彼の紳士に呶けば、口ばかりはムウと他事も無げに、其實腹の虫は嬉しさに此言葉を承知せず、笑へとかばり頬の邊をピリ／＼と躍らするに、南無三尊だと紳士の威厳を破らじとてか、撚りし鬚を強く引張りて、潰崩れ掛る目顔を引き締め玉ふ。

摺れ違ひ襟蘭麝の香りに呶びしお蝶、遺女の目とて咄嗟の際にも首肯きぬ。屹度與様では無

50

必定夫れと見込を立て、更に美服の羨ましく、願て其姿に我を忘るゝも女の癖、お蝶は思はず膝を叩きぬ。これ、これ、これが女の玉の輿。

(七) 一面の唐紅、此血潮は何事ぞ。

兎ても良家に嫁がるべき身の上にあらずと、果敢なき境遇を口惜しく、昨日迄の愚なる思案の我ながら腹立たしき迄に淺間しうなりて、落胆とせし折柄、不圖見し女の四邊眩き許り着飾りて萬人の眼を奪ふ姿の嫉き迄に羨ましく、曇に見し藝妓の條の幻に浮ぶ出の衣装と、彼是心に較べ見て、いづれ劣らぬ袖の色。彼れも女か我も女か。猿にも衣装の諺あり、我も彼の

様に綿を飾らば慥く迄みすばらしき姿でもあるまじ。根が愚の生れ、智恵では他に負けるか知れぬと、自惚では無い揃り、容色で他に負けはせぬ。何の何の、彼の藝妓も此權妻様も、餘り美人の方でも無い。眞實自惚では無い揃り、顔では我身に勝てはせぬ。

夫れに面憎いは彼の權妻め、男に衝當て周章てた風情が、何故面白いのか我を尻目に冷笑うて、旦那に呶いて居たのは何と我を嘲みしにや、摺違ひし後二人で高笑ひしたは他を人とも思はぬ證據。笑はれずとも極りの悪きに、笑はれては愧かしいより口惜しいもの。小癩なは彼の女め、我を貧乏人の娘と蔑んで、折も有らうに人の失策を、目前に笑ふとは無禮な奴、衝當つたは互の不注意、我を笑ふ口あらば、自分の旦那の鈍問なのを咎めもせよ、どれ程をらくて、づうづうしい女め。どうせ妾ほどの者、素性を洗へば何處の馬の骨か知れもせぬに、出世をすれば彼の高慢、我等を虫とも見るならむと、お蝶は賤しき身を悲しく口惜しく無念に思ひ、我も何時迄斯くて在るべき、見よ今に彼れ程の榮華は片手に握らん、嫁と云はれ妻と云はる、許りを出世とは云へじ、玉の輿とは彼の内福の聞え高き横町の質商の内儀がお寺参りの歸るさ、門口に横附けの辻車の謂には非ず。兎ても人らしき人を夫に持つ事の成るまじき我、最早一生夫を持つまじ。兎ても良家の妻には神掛けて祈ればとて成られまじき我、最早一生妻とは云はれじ。



よし去らば夫と云ふを旦那と呼び、妻と呼ぶを妾と云はれさへせば、乞食も雲の上に一足飛びの大出世必ずしも昔から無い儀にあらざ。道には道あり、目的違ひの道を行かば、千里を走るも思ふ處に着く事叶はず。行くべき道を知るは智慧にして、愚なれば假令心は正直なりとも、渡り難き今の淨世とは茲の事。現在我も昨日迄は、良き人に思はれて良き人に嫁がんもの、百年願へばとて淺間しの此貧しき身が、長者の妻には成られぬものを、釣合はぬは不縁の原因とさへ云ふに、其釣合はぬ奇縁もあれかしと之れを望みに、猿猴が月を掴まんと手を伸べた様な馬鹿なる考へを眞面目に今日迄胸に持て居た其心根が、了解らぬ了解らぬ些とも了解らぬ。愚なる我も今日は不思議に賢き思案の出でし事かなとお蝶は不覺に打笑まれつ、扱は町内隠れ無き男優りと、随分顔も賣たる内田の内儀を母と見て、見真似聞真似に自然斯うした智慧も出来しか、十六の小娘には天晴胆も潰る、分別と、人聞かば呆れもすべしと、自贊の胸の裡嬉しと湧き騰る思ひに、氣もいそぐと、嚮には失望に渾身痠をたる如く重かりしに、再び新なる望を得てお蝶は知らぬ間に家に歸りぬ、心も空に手も足も浮き上るかと思はれて。歸れば何時も細き聲にて、お蝶かど問ふべき父上の今日は睡りておはすやらん、物音も無き静さに老の夢を破らじものと、お蝶は足音を偷みて竊に奥の間に入り、陰氣なる家は未だ夕暮な

がら闇なるに燈も無くて嘸ぞ心細く待たれしならんと、少しは狼狽氣味に急がしくマツチを擦り、二分燈心の小洋燈に火を移して、怪しや忽ちキヤツと叫で後に倒れぬ、唯見る一面の唐紅此血潮は何事ぞ。

(八) 此間に死んだらお前が仇敵だ。

お蝶は稍あつて器械の如く跳起き、氣も半亂の聲を限りに父を喚びつゝ、飛掛つて片手に抱き起すに父は昏睡の夢漸く醒めて、凹みたる眼を細く見開き、苦しげに溜息吐きてお蝶か待たぞ、お前が歸て呉れたから、死ぬるにも安心だ、周章てな周章てなど、後は肩息になつて目を睡る顔色、物凄き迄に青ざめたり。  
 お氣を慥に持て下さい、お氣を慥かに持て下さい、お氣を慥に、お氣を慥に、とお蝶は早や泣聲に成て胸のみ躍り、手足顫へて、どうせうくとおどくするに、父も遺に死別を今かと断腸の面色、冷涙潜として頬を流るゝも、これを拭ふに力なく、苦痛を前齒に噛み締めながら、心配するな氣は慥かた、大丈夫だ氣は慥かた、其言葉は飽迄雄々しく、其聲は飽迄徹かに、断續の息は糸よりも細く、ヒリ／＼と顔も唇は土の如し。



今は泣いて居る所で無しと、お蝶は心を定めて立ち上り、阿爺様も氣を慥に、どうぞまつかりと遊ばして、私は直とお醫師を、と云ひつゝも尙振捨て、行くに忍びず、あゝ外出るにも氣遣ひな、どうぞしつかりと遊ばして、あゝ出るにも心配な、どうしたら宜からう、どうせう、どうせうと、行きつ戻りつ、うろ／＼するを父は見兼ねて、構はぬ行けと目顔で知らず其眼も涙。それでは些との間と言ふ間も惜しく、早や門口迄飛び出して何の心か又駆け戻り、それでは些との間と再び云ひ直して振り返り見る其眼も涙。涙々に見交して出で行く身も心細く、見送る身も心細く。

早や暮れ果てし夕闇の、空に身を知る村時雨、闇は人目の包ましからず、雨も厭はじ袖袂、急ぐに小笠も何かはせんと、帯引締めて高裾褰げ、裸足の儘のすた／＼走り。

生憎の雨、生憎の風、衣もまど／＼に濡れ濡れて、人見は如何に亂れ髪、雨降らば降れと雨に逆らひ、風吹かば吹けと風を切て、馳せる馳せたり息をも續がす、飛泥を蹴立つる脛も露出に、

お蝶は一切狂亂夢中。

突然後より抱き止むる男の腕、えゝ何者の悪戯ぞ、慮外な放せと無言の儘に藻掻きに藻掻くを尙引止め、やゝ待てお蝶。腹が立つても女は女、血相變へて何事だ、ま、待て、待て、と引据

えんとす。えゝ放して放して、放して下さいと振離してまた駆け出す。追ひ絶つ男も懸命、これ何うしたものだ短氣は悪い、えゝッ待てつたら待たないか、腹が立つても女は女だ、兎ても腕では勝てぬ、まゝ待て待て待てと尙引戻す。

引戻されて隠めきながら、お蝶は益す心苛立ち、聲振絞て言葉も荒く、放せつたら放せ邪魔するな、何でも宜い手前の知つた事でも無い、邪魔するなエ、此野郎、退けッ退けッ放せッ放せッと、身を跳きつゝ両手を振つて後様に滅多打ち、果は口惜しさに泣き立てんとす。愈よ狂氣と男も必死、放さぬ放さぬイ、ヤ放さぬ、放しちやあ己いらがお前の親父に濟まぬいんだ。其手の生血は、お蝶お前は人を斬つたな、但し斬られたか、さあ云へ、さあ云へ、云はぬば茲は一寸も動かさぬ。溫和しいやうで手前は短氣だ、なあに仔細に依りやあ、己れも八だ引受けても遣らぬ。まあ待て、さあ云へ、云へば放す云はぬば放さぬ、と男も苛つて言葉もまどろ、満身の力を腕に籠めて、茲一大事と息を断らして締め附ける。鷹に捕られし小雀の、夫れよりも尙脆きお蝶、骨身も碎くる羽翼締め口惜しや女の腕の果敢なさ。慙れど腕けど其甲斐無く、瞬時を争ふ父の危急に、あのれ何奴なれば不禮の妨げ、折も折、時も時、此間に若しや死に玉は、何とせん。憎き男め如何にしても放さぬか、どうしても力及ばぬか。女の腕のエ、モ口惜



しい、男であつたら踏殺しても呉れるものを、エ、モ口惜しい、エ、モ無念な、と怒り心頭に發して胸は烈火の燃ゆるが如く、奇ちに奇ちて耳も聞えず、取り逆上せて狂氣の如く、血走る眼を睨と見開き、絶ゆるが如き聲振り絞りて、邪魔すな放せ、後生だ放して、エ、氣に懸かる。此間に死んだらお前が仇敵だ、何の怨恨で放して呉れぬと、齒を噛み締めて悲鳴の一聲。何死ぬとは誰かと男は思はず手先を緩むる。お蝶は得たりと身を空様に躍らせつ、死力を出して撮ね飛ばし蹴飛ばし、尙も絶るをひらりと交して、闇の章駄天。

(九) 貴重なる片頬笑み。

行末は盛りの春、花は未だ綻び兼ねし年輩ながら、頼む親木は枯れくへて、朽ちゆく梢に残る甲斐なき苦一つ、春待つ仇し心には、癡て咲くべき色香を惜むも、譬へば折棄の柳の枝に、緑の糸は何時迄残らん。待たでも吹くべき木枯しに、倒れ伏すべき父の身ならば、何思ひ出のお蝶が行末、如何になりゆく我身なるべき。

死なば諸共と思ひ迫りしは昔の心。父も殺さじ我も死なじ、天賦の美貌何時迄土に埋らせん、捨賣にしてからが出世も榮華も積で沙を拾ふより易しと、手に唾して奮ひ起ちしは昨日の心。

今若し父に別れば、身は唯浮世の風に迷ふ、片羽挽がれし秋の蝶、何處に立瀬のある事ぞ、涙の淵に沈みも果てし今日の心、若き身そらは棹無き舟の真帆片帆、灘も港も唯闇雲に過ぎ行きて、心は毎日に變る風向きの定めなく、思案も分別も何に任せし浪路なるらん。雨は愈よ降りしきり、吹き添ふ風も荒れに荒れて、心泣き身にも恐しく物凄まじき夜なりけり。闇澹たる病室の孤燈の影、隙漏る木枯しに瞬きて消えむとする事三度四度、心細き明滅の光も見るに果敢無く、宿り遅れて埒にや迷ふらむ、聲哀れげに鳴き噪ぐ鴉も、親に離れし友無し鳥かと聞くに思はしく、斯る事にも心騒ぎて胸痛く、手足顫ひ渾身戰慄き、物凄き光を帯びたる眼を睨りて、瞞きもせず一心に醫師の面を凝視めたるお蝶、丹花の唇今宵は土の如く、玉の如き容顔も今は宛然死灰の如し。お蝶の父は死せるが如く破れ蒲團の上に臥して、人目には虫の息も覺束無げに、寐てか寤ても見分かぬ許り。今しも醫師の手に掻き開けし胸元の、薄氣味悪き迄瘦せ果て、見苦しき迄に助骨の數も露はなるを、一目見るだにお蝶の涙、父のよりも先づ我が胸の張り裂くる思ひなるべし。

今は唯、祈るは神佛、頼むは此先生の外に無く、世に忍しき迄に施療の顯著なるは、譬へば腕



に魔力の潜むかと畏く、神効驚くべき其投劑に代へんとならば、よし此身は父の犠牲に供へ、此骨を粉に碎いて散薬にするも、露程此先生を疑ふ事の無かるべく、毫末程此命を惜む事も無しと迄、お蝶は此醫師を深く信じて、身を斬るより切無き月々の薬料も、何惜むべき父の命を救はせ玉ふ天の使へ捧げ奉るに、かばかりの端錢こそ恥かしけれ、勿体無き事を折々は、父の枕邊に四邊山の斷の末、何時も出る樽に蔭ながら手を合せて、御恩を拜む事も幾度。

愆く迄敬ひ尊まるゝ醫師は、年齢の程未だうら若けれど、色白の細面華族様のやうに上品なる止、沈着いたる動作頼母しき迄物静に、常に物言ふさへ叫く如き小聲にて、笑ふ時も多くは前齒の現はるゝ事無く、平素極めて寂しき人として何と無く神々しき處あり。されば稀れ〜に見受る此先生の片頬笑みを、病氣全快の前兆と、病人は愆る事に目聰く首肯き、枕を投げて勇み立つを、なべての病家の習例と聞ゆ。

お蝶は診察の始終を打瞋りつゝ、此貴重なる片頬笑みを、若しや若しやと待心なり。

醫師は聽心器を執りて今や全く無念無想、睡るが如く、石像の如く、目を睡り、首を傾け、寂然として一髪をも動かさず。折柄臺所に金盞の音するに始めて閉ぢたる眼を見開き、顧て少許お静にと叱りぬ。されど其音尙止まねば、故どか醫師は迷惑の眉の皺、笑止とお蝶は浮上る様に立ちて薬所を覗き、少しは憤悶れたる聲いと低けれど甚鋭く、八様静にッてば、手水は未だ要らぬから静によ、貴方は周章して困らすね、先生がお叱りだよ、と左も思々しげに睨むが如く男を見下し、先刻も先刻で困らすし、と是れのみは口の中に、聞えぬ程の舌打しぬ。八と云はれしは意氣地無き笑に、此奴は近頃大失策と事も無げに頭を掻きて、何の心か身を萎縮めける。

(十) 私は御免を蒙むる。

良久して診察も済みぬ。四十男が荒くれたる毛脰を窄めて、苦しげの摺足に恭しく差出す小盥を些し引寄せ、式ばかりか指を濡して纏て开れをも拭ひ終りしかど、待ちに待ちたる片頬笑みは終にお蝶の目に入らで、父は愈々危篤と覺えし。

失望の餘り、遽に頭も打碎かれしやう覺えて、がつくりと首も折れたる如く、支へ兼ねてぐたりと俯首き、座に堪へぬばかりに力を落して、お蝶は氣も消え、魂も滅入る思ひに、此儘此身も死行くかの心地、暫時は我にもあらで茫となりしが、斯てはど氣を取直し、腑甲斐なしと我を叱りて、弱る心を膝りの上の拳に支へ、兎角は病狀を訊ねるに如かじと屹と頭を擧げて醫師を



見れば、早や立上て歸り行く風情。お蝶周章て、飛起ち、先生鳥渡と袂に絶ると、靜に願て穩なる一瞥を與へながら、何か心ありげなる胸、仔細あるべし。

偷む如き態に、朽ちたる床板も軋む事無く、羽織の袖のさやく音のみ甚微かに、其儘店先迄罔兩の這ふ如く歩み行きし醫師の後に、風を踏むやうに力無き足を踏み締め踏み締め、戰慄く手に洋燈を把りつゝ、お蝶は踰縁と送り出しぬ。

物蔭に身を潜め片膝立て、浮き腰に座り、事々しげに目顔に招く先生の容子、扱こそと胸先づ動悸つき、死灰の如き頬はヒリ／＼と顫はせぬ。今迄は父の容赦心許無きながら尙只管醫療を待みに、假令全快は叶はぬ迄も、此宵に迫る玉の緒を引止めて、責て一年は命を延ぶる術も有らむと、遺に幾分の望の綱は切れざりしに、悲しや先生の此素振、其意を悟れば何言も耳には入れねど、お蝶は萬事を合點して早や腰の抜けるばかり今更の驚駭、座るよりは倒るゝ様、前灣りに兩手をつきて、きろりと醫師の顔を見上げぬ。

語るにさへ叫く程に小聲なる人の叫くなれば、何か云ひ出せし一言二言は、逆上せしお蝶の耳に聞えず、遠慮も忘れてひた／＼と寄り添ひ、尙反問ひて聳つる耳の朶を摘みて醫師は病人に心を兼ねつゝ、氣の毒なれど病人は、最早到底助かるまじ、此二三日覺束無しと云ひ切りつ、

口を嚙みてお蝶の頬を溢れ落る、霰の如き涙の滴を數ふる如く眺め入りぬ。

お蝶の眉間に一抹の愁雲颯と過ると見えけるが、忽ち眼中昏ならぬ光を放ちて闇にも輝めき、睨むが如く醫師を凝視めて、夫れでは如何でも、最う命はと思はず噛み締むる泣聲をわつと漏せば、遺沈着なる醫師も周章て、其口を睨と抑へ、あゝこれ聲を立ては宜く無い、病人が聞いては宜く無い、助かるものでも助からぬやうになる、決して當人に知らしてはなりません。

御親族へは直様御通知なさい、遠國ならば電報でも打つが宜しい。彼處に居られる方は御親族ですか、では無いですか。何分貴方獨りでは萬事私も心許無い。何、親族は無いとか、夫れは甚だ心細い事です。何、有つても遠國だ、疎遠だとか、義絶全様だと仰るか。怪しからぬ、それは甚だ宜しくない。では當地で頼る方は有りませんか、平素御親密な方も有るでせう。いや斯う云ふ場合には假令平常面白く無い間柄でも、義理にも捨ては置けぬものだ。兎も角も御通知あつて、十分身を謙遜つて萬事御依頼あるが宜しいでせう。何分此有様では第一私が心許ない、御引請申すにも心細い次第です、何とか御思案なさるが宜しいでせうと、醫師は悠然と立上て、直と藥劑を取りに來なさいと此聲は稍高かりき。

絶望の谷底に蹴落されては、根も無き仇草にも絶着くべき人の情、泣き顔れて他愛無きお蝶、



何の意とも無く飛附かんばかり袂を引止め、消入る泣音を幽めて、虫の聲より細く、どうでも最う助かりませぬか、眞實最う助かりませぬかと、問はでもの事を又更に、繰返して糾くも道瀬なき嘆きの餘りなるべし。見れば醫師は無言の儘に點頭く容子、おのれ憎し助かるべしとは何故云はぬと、無躰と知りつゝ、憎らしくも恨めしき心地の爲られて、胸の裏には、此藪醫者が何を知るべき、死なぬ死なぬ父様は決して死なぬと、我身で我身に答を作りて、理も無く獨りかみ返り、強て一時の安心の程を願へど、徒だなり徒なり兎ても己れを欺く能はず、心は夫れしきの慰めには安まらずで、情なや父上最早命數竭きたるか、どうでも助からぬ御命かと、思茲に及ぶ時は身の置場無き迄の悲しき、早や咽喉迄衝きかくる泣聲立てじと、無二無三に袂を口に振ぢ込み、息も塞がる迄に呻きて、身悶えして其處にひれ伏しが、遽に又首を擧げて聲を顔はせ、もうくく私はもうくく何うしませう何うしませう、便る親類は無し懇意な人は皆薄情者ばかり、何うしませう何うしませうと、聲は低きながら聞く人の胸も裂けぬべき悲鳴のいぢらしさ、糸より細き泣音を立て、溢れ落ちる涙を醫師の裾に漲ぎながら、足元に身を輾轉して啜泣する哀れさ、情あらむ人は一目に斷腸の思ひあるべし。

されども醫師は迷惑げに眉を擡め、それは甚だ困りますね、併し、此躰裁を見知てゐる以上は

大屋なり差配なり又近隣の人なり、流石に打捨ては置きますまい。親族が左様に不人情であるなら家主からでも嚴談に及ぶか宜いでせう、それでも肯かぬは其筋へ申立て、區役所の恤窮保護を仰ぐが宜からう。私も一臂の勞を惜むでは無いが、何分多忙の身、其意を得ません。併し最早夜も更けるから、兎も角も私は御免を蒙る。彼處に居らるゝ方は御昵近と見える、尙何かと御相談なさるが宜からう。遺憾ながら、兎も角も私は御免を蒙ると、少許は五月蠅しと云ふ皆險にて、常よりも足速く、踵を廻らして見返りもせず、咽返るお蝶を慰めんとせず、奇に濟したる咳拂ひして、其儘自用車に乗り移りぬ。

何故とは無けれど、お蝶は唯譯も無く此人を無理にも引止めたき心地して、突然門口に飛出し、泣聲立て、車臺に取着き、先生どうぞ、暫く待て下さいまし、どうぞ暫く、どうぞく泣叫ぶ容子唯事にあらじ、ハ、ア未だ用事が有りますかと醫師は幌の中より顔を覗かせ、昵とお蝶を見れば、答は無くて唯涙に呻くのみ。何故に止めしぞ其所以なし、心許なや亂氣したかと速の醫師も些しは哀れを催しけむ、車上ながら強くお蝶の手を握りつ、殿めしき聲作りして、貴方は今日、父様の大病に遭遇して最も重大な責任を帯びた躰で無いか、然うだらう。即ち辭を換へて云へば、私と貴方が第一に大切な役目を負ふて居るのだ。私は病人の生命を預つてゐ



る、其私が又看護婦たる貴方に病人を預けて置く、其貴方が泣いてばかり居ては何うしますか。今は大切な場合だ。貴方は病人の爲に、飽迄力を大事に持て、飽迄力を竭して看護を爲ねばならぬ、唯無闇に泣いてる時では有りません。餘り悲嘆に迫つて神経錯亂の兆候も見受ける。此上貴方が病氣したら、助かる父様の命を助からぬ道理だ。氣を沈めて、心を雄々しく持て、父の爲には如何なる悲痛、如何なる艱難も忍ばねばならぬ、それが子たる者の道でせう。泣いて居る時では有りません。氣を充分強く持て、まっかりして居なけりや本統の孝行は出来無いと、其言葉尙終らざるに、車夫は奇ちてお蝶を掻退け、一目散に駈出しぬ、跡は虫の音ならぬ咽泣きの聲、凄まじき迅雷の音に和して、飛び狂ふ黒雲、天を劈く疾風、怖しとも恐しき三更の闇に、見送れど影なし隣々たる車の響遙に。

(十一) 杖に離れし俄盲目の何とすべさぞ。

今は泣くべき時に非ずとの一言は、深くお蝶の胸に沁み入り、甚く此れに勵まされてつく／＼我身の意氣地無さを悟り、旦夕に迫りし一大事を前に控へて、怯々と無益の涙不覺なり愚かなり、泣かじ泣くまじ今は泣くべき時にあらじと、幾度か我を叱りて氣を取直さんと慄れども、

竭きぬ涙は嘸込むに尙湧き返り、枕に就きて甚と思ひの募るが儘に、心は愈よ消え行くばかりに、唯悲し唯悲し唯々悲し。神も怨み佛も怨み世も怨み人も怨み父様も亦も怨みなり、今死玉ふとはお怨みなり、残る我身を何と爲れどか覺召す、野邊送りも如何して營めと覺召す。先生が御情深く、藥料も二月ばかり滞りたるを何とも御意無く、兎ても返濟の見込無き我れを振捨て玉はで、一日も飲かず御藥も下さるゝ上に、今日も今日とて火急の御迎へ五月蠅しと思はれず早速の御見舞、此御恩何時の世にか忘るべき。必竟斯く御慈悲深き方なればこそ、若し左も無き人ならば何として此風に此雨に、夜中の御見舞譬へば土に頭を埋めて只管に願へばとて、藥禮せぬ病家は見返りもせぬ習例なるべし。是程の貧苦の中に我を捨去りに、若しや萬一の事ありて死出の旅路に上り玉は、何として跡の始末の就くべきや。何う思つても此儘に死王事如何にしてもお情なしお怨みなりと、次第に心も物狂はしくなりてお蝶は枕に喰ひ入て泣きぬ。

偶々親切に世話をを見て呉るゝ人は、順間の名を賣りて誰も順入と呼ぶに首肯く評判男、何の是が邪魔にこそなれ頼みにならうぞ、看病の助手に四五日は泊つて遣らうとの實意、何の何の仇には思はねど、雷鳴の様な軒、他の氣も知らず、少許は遠慮もせよと面憎くもあり、



志ばかりは誠ありても貸して呉れる程の智慧も無ければ結局は誠無き人と較べて、何程の取  
 得有りとも云へず。膝とも談合と云ふものを、膝にも劣りし頼八とて相談相手とも頼まれぬ、  
 働きの鈍い大男め。なけなしの智慧が總身に廻り兼ねて、誠はありながら無きに劣りし役に立  
 たずめ。少許は私の身にも爲りて行末の所置をも考へて呉れよかし。心無き高野に彼の氣樂さ  
 うなる寝顔はど、お蝶は我心の苦しき餘り、見る程の物癪に障りてむら／＼と劫を湧やし、其  
 枕を蹴飛ばして思遣りなき華宵の夢を破て呉れむかとも思ひしが、翻つて更に考ふれば天下廣  
 しと雖も我等が爲に自ら進で力を竭さんとするは、抑も此頼八一人あるのみ。與へたる恩義も  
 無きに便然き我等を假にも助け呉るゝ親切、思へば勿体なし是れを仇にして成るものぞ。八様  
 許して下され我悪かりし、怨んでは罰も當るべし。許して下され我悪かりし  
 と島渡寝顔に掌を合せて拜む真似して、智慧ある人は鬼の心、智慧無き人には此親切、噫儘に  
 ならぬもの、こゝが浮世か。

浮世の浪風飽迄呑込みて、さらでも大なる智慧袋の飽迄膨らみし人さへ、一人や二人の相談相  
 手は、無くて叶はぬ此世智辛き世の中に、我は頼む親類の數は有れども無きに劣りて、便る方  
 も無き不運の果、而も明日にも父と云ふ杖柱を失ひもせば、譬へば水無き枯川の魚か杖に離れ

し俄盲目の何とすべきぞ。實ては一人でも分別餘りある人ありて、迷ふ手を取り、迎る闇路を  
 導して、渡るべき淺瀬を教へて呉るゝ者の無き事か。

考ふれば考ふる程、まみ／＼身の上の心細くなりて、お蝶は又もや腹立しく口惜しく怨めしき  
 心地せしが、不圖内田の内儀を想起して夫れよ夫れよ、此人此人と思はず口走りて餘りの嬉し  
 さに、我を忘れて抱巻を蹴飛ばし、むく／＼と起き上つて暫しは其處に衝立ちぬ。此物音に驚  
 きてか、父は微かに呻きて苦しげなる咳の聲、南無三大病の人を扣へて有られも無き振舞ど、  
 周章て、枕頭に還へ寄り、竊と寝顔を覗けば嬉しやす／＼と眠る風情。お蝶安堵の胸撫下し、  
 覺えずホッと大息して我はまア何とした事ぞ、氣でも違ひはせぬかと自ら戒めて枕に就きつゝ、  
 も、尙胸は望に跳りて忘れて居たり忘れて居たり、内儀は我が母と定めたるものを。此人に萬事  
 を頼み、我が身を抛げ出して行末を任せて仕舞へば、親切餘りありて智慧も衆に秀でし人、况  
 してや我を子と云ふものを、出来る程の事は何にても有れ心の儘に出来るべし。

(十二) 私が一人で子にするぞ。

其翌る朝は風静まり雨止みて軒端の雀の囀る聲も、勇ましく晴れ渡りたる空なりき。一夜を泣



き明せしお蝶も、頼に胸の潤くる思ひあるは父の容体ようたいの打うちて變りて快こころよげなるを見る嬉うれしきなり。今日は何なんと無く氣分宜きぶんよししと自身みづかにも云いひ、朝餉あさごには粥汁かゆじゆ二椀にわん左も旨うまげに啜すする風情ふうせい、見るにお蝶は嬉うれしきにも涙なみだなり。

正午前せいごんぜん、代診だいしんの書生しよせい來りて診察しんさつせしが、思おもひの外ほか病狀びやうじやう宜よしし此勢このいきほひにて四五日よちごにちを切きり抜ぬけなば、最早もともと大丈夫だいじゆう生命せいめいは此方このあたの物ものと云いふ、是こゝれはお蝶おてつに叩たたきし言葉ことば、聽きくに頼母たのぼしく、雀躍せきやくして喜よろこび勇ゆうみ、遠とほく昨日きのうの禮れいを云いふやら、先生せんせいへ「忝かたじけなき由よしの傳言でんごんを頼たのむやら、お蝶おてつは早はやく泣なきて早はやく笑わらみぬ。

此代診このだいしんは藥局生やくきゆせいの主席しゆせきを占しめて、藥禮進物やくれいしんぶつ一切いっけいを取と扱あつかへば、お蝶おてつも昨夜おとよ終夜しゆうや懸念けんねんせし謝禮金しゃれいぎんの滞どまりれるを更あらためて今茲いまここに断ことわりを述のべ、少すこし心當こころあても有あれば今月末こんげつまつには必かならずづ悉皆しつがい濟すすべき旨めい、忍縮にんしゆくして申立まをしたるに、少すこし肩かたを擧あげ、それは是非しよひ何なんと加かして貰もらふべし、實じつは藥禮やくれいの濟すまざる事ことは私わたくし一ひと存ぞんに隠かくし置おきて先生せんせいへは皆受取濟みなうけとりすと申まをし置おけり。何時迄いつまで隠かくさるゝ事ことにもあらず、心當こころあてありとならば結構けいこうながら、左も無なきに於おては是非親族しよひしんぞくへでも相談さうだんして、至急しじゆに何なんと加か爲なさるれば、私わたくしが迷惑めいわくするなりと婉曲わんきよくなる催促せうそく、米屋新屋こめやまのべらんめをよりお蝶おてつの耳みみには恐おそしく聞き做なされて、胸むねに釘打くぎうちたれし思おもひなりき。神様かみさまの機なりなる先生せんせいは謝禮金しゃれいぎんの事ことなどは毫末ごうまつも知しり玉たまはず、宜よしき折をを

見て藥局生やくきゆせいより催促せうそくする事こと此先生このせんせいの慣用手段くわんようしゆだんと聞きえたり。

お蝶おてつは愈いよ恐縮おそしゆくして平伏へいふくし、心當こころあても有あれば是非しよひ々々んんんん今月末こんげつまつには返濟へんさいする由よしを堅かたく誓ちかひて代診だいしんを歸かへらせぬ。昨夜おとよは返濟へんさいの見込みこ無しとて嘆なげきしを、今日けふは何なんを頼たのみに心當こころあてありとは云いひ立てた

興きようには苦勞くろうを知らぬ頼入たのいりの高笑たかわらひ、何事なにことぞ此心配このしんぱいに病人びやうにんの前まへとも思おもはぬかと、愚おろかなる人の振舞ふるまい一ひと癩しかみに障さやるお蝶おてつの氣質きしつとて、いで箸はしめ呉くれれんと行いきて見みれば、父ちちは今いましも淋しみしき微笑みせうを片頬かたほに浮うべて何なんか可笑おかししき嘶こゝろを聞ききしと覺おぼえし。其氣分そのきぶんよげなる風情ふうせい、嬉うれしや扱あこそ病苦びやうくも怠たりしよ

頼入たのいりの駄洒落だせだり時ときありては重寶ちゆうぼうと我われを折をりて、うら珍めづらしき父ちちの笑顏わらなを昵昵と見詰みづめて、イみし儘まま良久ながしは、隠かくし兼ねる嬉うれし泣なきに泣なきたりき。

晝過ひるがる頃ころより父ちちのすや〜と睡いるを好よき際ときと、お蝶おてつは髪かみの亂みだれを搔かき繕つくろひ、湯ゆを遣つかひ小袖こそでも着替かえ、吳くれ々んんんも留守中くわしゅちゆうの看病かんびやうを頼入たのいりに頼たのみて、藥瓶片手やくびんかたてに出行いっけいきぬ。

藥費やくひひての歸途かへりみち、下宿屋内田げしゆくやうちだに立寄たりぬ。

僅わずかか四五日よちごにち訪まはざりしを一年いちねんも逢あはざりし人の様ように款待くわんたいたれ、別わかけて内儀うちぎの機嫌きげん今日けふは又また見覺みあしき迄までに宜よしく、蝶てつちゃん何故なんぞ其後そののちは御見捨ごみすた、おや〜大層たいそう血色けつしよくが悪わるい、顔かほが浮腫うづれて居ゐるや



うた、お醫師様からの歸途だね。情れた姿は又一層で、其藥瓶を提げた所は女でも顔ひ附く程  
 容子が佳いね。何だらう病氣は、戀病と古風に來たかね、新駒擦きの若旦那が何處に在つたら  
 う。少し色附くと直と是れだから、今の娘は油断も何もならないよ、此阿母様の眼を偷で、不  
 義を働くと其分では置きませんよと、笑顔に睨みて例の饒舌、今日は一層に甚だしく、お蝶が  
 口を挿むべき瞬時の隙も有らざりき。

洒落ばみたる其言葉、今日は何時もの様に可笑しからず。お蝶は不興顔して、私は其れどころ  
 では御坐りませぬと、重き口を僅に切て羞俯首き、尙云はんとするを内儀打消し、高笑して左  
 様だらう左様だらう、初戀と來ては其苦さ。受賃は要らぬから、ちツと惚氣もお聞かせと云ふ。  
 其顔を睨むやうに噴りてお蝶は憤悶れ込み、そんな氣樂ぢや有りませぬ。阿爺様が明日にも死  
 ぬか知れませぬのに、惚氣の初戀のと、もう厭やく、馬鹿な話は止して頂戴と、額に青筋を  
 はのめかせて、短刀直入に打込みぬ。

管ならぬ見暮に驚かされて、内儀は思はず膝を乗り出し、え、阿爺様が明日死ぬるツてと、お  
 蝶を凝視めて眼を丸くせしが、更に縁喜悪き言葉の端に心附きて唇を改め、イ、エサ明日にも  
 解らぬツて、まアそんなに悪いのかい。おやく、夫れは大變だ夫れは心配だ。そしてお前様は、

何とも無いの、おやさう、私は又お前様が不快いんだと思つてよ。だツて血色が大變に悪いも  
 の。夫れは併し大變だねえ、心配だらう、心細いだらう。

一肺肺病には眞個に困るよねえ、藥が無暗に澤山要つて、それで仲々癒るもんぢやあ無い。結  
 局財産潰したよ。無暗とお金錢を藥にして飲んで仕舞つた擧句の果が、お氣の毒とも云はない  
 で、サつと冥途へお通りだ。残つた者は大きに御苦勞様だ、やれ寺へ走れ、やれ葬具屋を呼べ、  
 それお経だ、それ花だ、大混雜を遣つて、漸と葬式が濟むと又七々日の勤行さ。親類縁者へ  
 酒の御飯のと引續きの御馳走して、恐しい程失費の有つた後で、そら藥禮といふ難物が有ら  
 ぬ。大抵の病氣と違つて肺病は長いからね、それに高價な藥が一日に三種も四種も要らうと云  
 ふのだから、藥價表が飛で來るとさア耐らない、青息太息で始末が終へぬい。

私も、恰三年以前、良人を肺病で無くしたが、其時は未だ此商賣も爲てゐないし、野郎大の酒  
 喰ひで、仕事嫌ひと來てるから眞に見る影も無いもんだつた、所へ寝込んだから私は實に立  
 瀬が無い。それでも二人で餓えても居られぬから、丁度お前様と全じた、一生懸命に稼いで兎  
 も角も藥は一日も缺かさないで見送つたが、時には此意氣地無し喰ひ潰しめ、嬢に養はれて  
 法々藥を飲むのが可笑しい、お庇で此方の手足が折れツちもう。好い時分には早く死んで呉れ



ねば私の命が縮みさうだと、まア斯う云つたやうな氣にも爲つて、口には云はねへが、神様を願ふのにも、助かるなら一日も早く本復するやう、助からぬなら一時も早くとも。チッホッホッホ、眞逆死ねとは祈らないが、偶には其様な事を云つて拜んだ事もあつたつけ。お前様も阿爺の長病には、つく／＼相想が盡きるだらう、まア孝行なお前様は、一日でも生して置きたいと思ふだらうが、他人の目からは死者は早く死なぬと、お前様の躰が何時迄も片附かぬからそれが、可哀相だよ。早い話が、現在目前にぶら下つた出世の種があつても、要らざる重荷があると、それを取る事が出来無い道理だ。思つても見な身一つであると、何でも氣儘な事が出来るけれど、今のお前様ぢやあ、阿爺が承知の上で無くちやあ、塵程の事も獨断はならないだらう。それが大きに邪魔になるさ。私でも良人が生て居たら、斯うした氣樂な躰には成て居ない。獨身に限らよ、出世をするには。だからお前様、阿爺が死にさうだつて、左様心配するには當らぬぢやあ無いか。お前様一人に成りやあ。私が引取て娘にするさ。子無しだから到底繼承者を貰はねばならぬのよ。寧ろ是程氣心も知りあうて、可愛くて堪らぬお前様を貰て仕舞ふさ。なわに阿爺が不承知だつて構ふものか、其中に死ぬる人だ、親類も無いとか云つたね、有つても義絶だつてね。すりやあ五月蠅

い相談も要らぬ、私が一人で子にするさ、誰が何と云つたつて、お前様さへ承知なら可いのさ、どうだえ眞逆不承知も有るまいね。其言葉は淡々しけれど、其眼に熱心の色見えて、呢とお蝶を打贖りつゝ返事に猶豫ふを面白からず思へる氣色、お蝶は又斯る人間一生の大事を、左も／＼事も無げに云ひ放つ其心を解し兼ねて、同じく内儀を打贖りつゝ、且は呆れ且は疑ひ、兎角の答を危ぶみて、少しは怯ぢたる風情なり。

(十二) 内田の娘は御座舟さ。

纏て内儀は獨り首肯き、何をか呑込顔に朱羅宇の長烟管をボンとはたいて、其處に在る乾布巾で頼りに火鉢の縁を拭きながら、愈よ優しき笑顔になり、斯うぞんざいに打出すと、柔和しいお前様なんかは呆れて物も云へぬだらうが、何も不思議は無い筈だよ。是が私の癖さ、私の氣性さ。私は何事によらず、くしやく考へる事が嫌ひだから、どんな大切な事でも思ひ附いた儘に速座に極めて仕舞つて、一度考へた事は二度と考へないで理が非でも立通す。一度行らうと思つ



た事は何が何でも二度と變へないで何處迄も行つて仕舞ふ。結局男らしいと云つて誓めて可い  
 か悪いが、そんな事は知らないが、先づ左様いふ氣性だから、大分世間並とは變つてゐるさ。  
 其のつもりで聽て呉れば、何も不思議は無い筈だよ。  
 此時も蝶は喉を挿みて、それは願つても無い嬉しい事ですけれど、私は兎ても他家へ行く事は  
 と、云ひ懸るを内儀打消し、了解つてゐる了解つてゐる、お前は一人娘だから、家を潰す事は  
 出来ないよと云ふのだらう。尤もだ、そりや左うなくつて如何するものか、兎に角に戸倉は絶や  
 す譯には行かないさ。だから私も家を潰して呉れとは云はぬ。お前様は何處迄も、士族戸倉  
 蝶で通して行つて其實私の養女に成て呉れば可いのさ。何の、些少も造作の無い事よ。  
 兎に角に世間へは私の子として置いて、役場では戸倉家を名乗つてゐるさ。さうすれば家も潰  
 さずに私の子に成れるぢや無いか。私の家はお前様のと違つて潰したつて立てたつて、其様な  
 事には構はないんだが、と鳥渡煙草を吸ひ附けて、實はね、内田と云ふのは死んだ良人の姓で、  
 私の家は弟が立派に立てゝ居るのさ。良人も昇龍の刺繍ぐらゐが價値の有る處で、索性  
 を洗へば信州の芋掘り。私は女房の事だから、斯うして跡を嗣いで居るが、お前様に迄土百  
 姓の氏を立てると云はないさ。併し私が死んだ後で、折角苦勞して蓄めた金を、其儘弟に折

鬘斗附けてとは厭やな事だ、一鉢弟とは氣が合はないので、後家に成ても實家へは一度も行  
 かないのよ。だからお前様を養女にして、斯う氣意の合ふた仲だもの、死んだ跡を宜敷く依頼  
 申さうと云ふのさ。結局弟に頭を下げないで死んだ跡迄お世話になるまいと云ふ料見さ。私は  
 意地が強いからね。  
 毎度云うので又かとお前様も五月蠅いか知らぬが、如何したのか私には無闇にお前様が可愛  
 いのよ。これで私が若し男だつたら、今頃は青い面して、鬘で蠅を逐うてゐやう。おや何が可  
 笑しいの、私は些少も可笑しくない。眞實に惚れたんだよ、さうだよ惚れたんだよ、命も要ら  
 ぬ程惚れたんだよ。若しお前に嫌はれたら、尙可笑しからうね。こんな老爺が目尻を下げて、  
 お蝶如何にかしてくんな、寧ろ殺せ、なかと云ふやうな口説き文句になつて、突然搦み着きで  
 もせうものなら、まア如何だらう、エ、蝶ちゃん、眞個に身震ひして泣出すだらうね、可笑し  
 からうね、チッホ、ハ、ハ。  
 内儀は笑ひ涙を鳥渡拭きて、遠に又眞面目になり、申儀は指いて如何だえ蝶ちゃん、不承知か  
 え。私も斯うして氣樂に暮らして居るから、お前様を子にした上で、藝妓や娼妓に叩き賣らう  
 と云ふやうな、賤陋しい量見は塵程も持たないから、其點は御安心さ。唯もうお前様に思切た



出世をさせて、私も榮華が爲て見たいばかり、どうして藝娼なんか稼がして、お安く切賣さすものか、立派なお嬢様に仕立て、着の轉んだも直さすのぢやあ無い、大事にかけて遊ばせて置くさ。

憚りながら恐れながら、内田の娘は御座舟さ、華族様か但しは夫程の財産の有る殿様で無くば、雄猫一疋膝へも乗せる事ぢやあ無いと、一番威張つて見たいのよ。先般も呉々云つたやうに、今は別嬪の世の中だ、どんな出世も腕次第だ、容色を操る腕次第だ、そりや妾もするさ、妾もするが一月妾や何かのやうな、穢い真似をするのぢや無い、名は同じでも、玉の輿に乗らうと云ふのだ、其同乗がしたいと云ふ私の望みさ。

私もね、今十五六も年齢が若いと、此面でも構ふものか、一つ腕を叩いても見るが、女も四十を越しぢやあ、花も實も無い落葉だよ。お前様は其容色で、其年齢で、意氣地無く泣いてゐて如何するものか。如何だえ出世は厭やかえ、私の養女に成て腕を磨く心は無しかえ、如何だえ、厭やかえ、不承知かえ。

(十四) もうく涙が溢れます。

言葉竭きて内儀はお蝶の答無きを左もく憤問たげに、平素は座をも厭ふ大切なる榮華へ、自暴に長烟管を叩きつけ叩きつけ、如何だえ厭やかえ不承知かえ、構はぬから胸中を云つてお仕舞ひ。どんな事を云つたつて、些少も怒りは爲ないからと、口には隠せど顔に出づる立腹の色。お蝶の目にはありくと讀まれて、笑止や是程思ふて下さるを、厭やとは云へじ又我は厭やでも無し。但し阿爺様に聞かせたらば、恐らくは不の字否乾度不の字。さらば到底成るまじき相談か、断て仕舞はねばならぬ事か。いやく茲で首を振らば、内儀は直ちに我を見捨つべし。今日も今日とて藥禮の才覚、萬一の時の葬式の營み、それも此れも内儀の手に絶りて兎角の補助を求めむ心で相談にも來りしものを、今此人に捨られて、それや此身は何となるべき。否とは云へじ、厭やとは云へじ、父に隠して應と云はうか。それも不孝、道ならぬ振舞。あゝ如何したもので何と云ふべき。我は厭やでは無けれど、身一つの氣儘になるまじき事、あゝ如何したもので何と云ふべき、寧ろ我は承知なれど、勿論父は不承知なるべしと、有りの儘に云ふべきか、左すれば内儀は満足せん、唯此事を父に隠して、亡くなり玉ひての上我が氣の儘に振舞はん事、如何にも罪なり、隠すは罪なり。

お蝶は尚様々に思ひ迷ひて、思案を一つに定め兼ね、俯首いて膝ばかり打跳めつ、更に考ふる



に今此人に捨てられれば、藥禮も拂ふ事叶はず、隨て醫師を頼む事もならず、見殺しに父を死なせもせば、不孝此上の有るべきや。左なり左なり、大事の前の小事、少許の不孝は大不孝に換ゆべからず、思ひ切たり此れ程の罪、聽ての孝行の徳に消えよと、お蝶は遂に快刀兩斷、亂麻の思ひを一呵に捨てぬ。

屹と面を正して涼しき笑みを片頬に浮べ、最う思案を極めました、覺召何で仇には思ひませう、斯様な馬鹿では御座りますれど、と半云はせず内儀座を飛んで膝を叩き、悦喜満面に溢れて出来た出来た、やれ嬉しや。お染、お染、お三や、お染や、え、何處に昏倒つて居やあがるんだ、お染、お染、え、返事が後で足が先でなくつちや。それが逆様だからお前にも困るよ、さア前祝ひだ、一本早くだ、今日から此お蝶が私の娘だ、左う思つてくんな、お嬢様と云ふのだよ、ぞんざいな言葉でも云つて見ろ、私が黙つてゐないから。

内儀は躍らんばかりに立上りて、兩手を時計の搖錘のやうに振動かし、どたばたと臺所へ行きぬ皿の音の喧しき。お蝶は呆氣に取られて茫然と其後姿を賸りつゝ、如何なれば愆く迄此人に可愛がるゝ事ぞと、不思議にも又嬉しく、嬉しきにも又訝かしく、縁は異なるもの味なものとは、是れかどばか

り、何とは無しに打笑まれぬ。

それより二人對坐の酒を汲みて、内儀は息をも繼がず引掛け引掛け、高笑大笑に元氣よく、お蝶も飲めぬ口の無理に強ひられて、朝より青ざめし顔も火の粉の散る程赤くなりぬ。酔ふて見れば下戸も苦勞を忘られて、世の中を我が爲に潤くなるかの心地、昨宵からの心配嘘のやうに消て、親の大病も夫程は氣に惱まず、眼鏡になりし盃を眺めし時、不圖石田が伊豫節の巧者にして、酔へば鼻聲で毎も呻り出す可笑しさを思ひ出し、心の中に今一度夫れ聞きたしと願ふなど、埒も無き性根になりぬ。

今こそ好き機と、重き口も酒の力に軽くなりて、お蝶は内儀に一生の願ありと打出しぬ。其願を申立てん爲、看病の手を止めて、態々參上りし次第と枕辭を置きて、借金に首も廻らぬ苦しき辛さ、此後の切廻し方に困る切無さ、最早我一人の分別に及び兼ねる今日、萬事貴方の智恵が借りたし、是一生の願と掌を合すを、内儀は片頬に笑みて片手に制め、大抵は聞かずとも解つてはあれど、兎も角も詳しい話をするが可い、茲が親子だ遠慮は要らぬと頼母しき言葉、嬉し嬉し左襟云つて下さるだけでも、もう涙が溢れます。



(十五) もう一生の願は帳消したよ。

恚て打明けたる内幕話し、第一には葬禮の三月の滞り、是非今月に拂はねば濟まぬばかりか、  
 惣ては御診察を願ふにも願はれまじうなるべき事、第二には萬一の時の葬式、どうして營むべ  
 きか入費の鑽も無い事、何時も云ふ事ながら親類縁者誰一人頼む方も無い事、日頃親しくした  
 人も、多くは金銭の上から氣不和くなりて、今では仇敵同様の事、それやこれやの心配で夜の  
 目も合はぬ事、寧ろ死なうかとも思ふ事、途方に暮れた擧句が内儀へ此相談の事、先般より内  
 儀が御勘めありし妾奉公とやら云ふを、何も親の爲なれば寧ろ勤めて見やうかと思へる事、そ  
 れも病人ある家は旦那の足も入れられず、又我身も外出の構はねば、父を見送りての上迄奉公  
 を延べて、それ迄の所、金子拜借を願はん爲め、斯く藥取りての歸途に寄途して訪ねし事など、  
 尙有る程の胸の中を盡く述べ立て、情願と又もや掌を合すと、今迄笑しげに聴きわたる内儀  
 遂に其手を掻き分けて、事も無げなる高笑に笑殺し、それが一生の願とは私の娘にしては、慾  
 が無さ過ぎる、親子に成た上は、云はなくても夫程の事は世話するよ。今日からは私が親だか  
 ら最う心配も何も要らぬ。妾奉公も親の爲と思つて、爲て見る氣になつたのが願母しい。併し

それもまだ私がさせぬ、急ぐと安賣をせねばならぬ、一度安賣をすると、夫れが相場になるか  
 ら困るよ。

斯く云ひつゝ、内儀は立て箆笥の小抽斗を開け、お蝶鳥渡と呼び近づけて、藥禮は大抵如何程と  
 問ふ、お蝶は少し首を傾けて考へつゝ、見るとも無しに抽斗の中を見れば、これは内儀の弗箱  
 代りと覺えて、大分の金子入り居れり。

お蝶の呷くに首肯きて何程かの紙幣を掴み出し、これをお蝶に渡しながら、先づ藥禮は此れで  
 濟む、ところで萬一の要意に、葬式佛事の費用として此位別に除けて置けば可いだらう。と鳥  
 渡お蝶を尻目に見て、有りあふ白紙に其紙幣を包み、抽斗の片隈に丁寧に置きて、これはお前  
 様の財物として斯うして儘に預つて置くよ。さアこれで最うお前様の一生の願は濟みましたよ、  
 へ、最う一生の願は帳消したよ、ちと安賣いね。

お蝶は無言に笑みしのみ。

夫れより更にまた火鉢を挿みて、いと睦まじき二三獻、内儀も笑顔も盃に映せばお蝶も笑顔  
 の露を翻して銚子を取る、彼方は水々しき年増、此方は海棠の花羞かしき美しいの娘、嬉しげに  
 見遣るを嬉しげに見返し、親しげに打噴るを親しげに眺め入り、情の餘りは言葉なくて、目と



目が叩く誠と誠、盃と盃に飲み交す心と心、茲に天使の舞ふにあらざば浮世に神は無きものなるべし。

お蝶生れて十六歳、今日程嬉しき日は嘗て無かりき。十年の辛苦一朝に消えて三年の涙の痕も一時に洗ひ落せし心地、行末の樂しきは目に浮び懸ての出世も手に取るやうに思はれて、見る人無くば踊ても見たきばかり氣も浮々と、魂も身を離れてふわ／＼と宇宙に舞ふかの如く、漸と重荷を卸せし瘦馬の思はぬ水を一口飲み、うつら／＼と睡るが如く、渾身も溶け行くかど危ぶむ迄に、得も云はぬ快き現なき心、酔ひたるのみには非るべし。あゝ今日は十五日ですね、私の身には何といふ大々大々吉日でせう、生涯忘れられぬ吉日ですよ。物心覺えてから二日も嬉しと思つた日は無かつた私も、今日といふ今日、是迄の苦勞も夢のやうで、いゝそ今日の嬉しさが夢のやうで、若しや狐にでも欺されて居ないかと案じる位で、頓と最う昨日迄が夢か今日が夢か、何が何だか些少も解らぬやうな心持で、唯もう／＼もう／＼嬉しく／＼嬉しく／＼して。と身を悶えて喜び狂ひ、嗜まぬ酒も心勇めば旨きものか、内儀が酔むを引受け引受け、調子に乗りて無闇にあほりぬ。

果敢なきは秋の日、知らぬ間に夕暮の空、早や星影のちらめくに打驚き、思はぬ長居とお蝶飛

上りて亂れかゝりし裾を正し、帯締直して思はず踏眼き、あや／＼大變、これはまア如何しませうねへ、こんなに酔つてと、流石に病人の思はくを畏れて今更當惑顔も愛らしや。内儀はホク／＼笑ひにこれを見上げて、此意氣地無しめ、今人力車を聘んであげるから鳥渡お待ちと立ちかゝるを、否々それには及びませぬ、大層御馳走になりました、左様ならばと閑雅なる一禮、遺に酔ひても亂さぬ作法を、床しと内儀は見るべくや。

抱くやうにお蝶の肩に手をかけて、それでは如何でも歸るかえ、近いうちに又顔を見せてお呉れ、而して阿爺様に萬一の事が有つたら、直と私に報らすのだよ。我が萬事を引受けてお前には手も出させる事ぢや無い。葬式も佛事も私が濟ませてあげるからね。看病も看病だが、身體を大切に持たねば可けないよ、それぢやあ近いうちにと門口迄送り出し、それ／＼危い、其處に大なる石があるよ。倒けて藥瓶を壊しちやあ大變だ、あや／＼我慢な子だ、酔つちやあ居ないツて、力むのが可笑しいや。あれ／＼、走つたら轉ぶよ、振向いて笑つてゐる。あゝ可愛い子だ。

(十六) 現今の娘は金子に成る。



お蝶は遠に留守中の心許なく病人の氣遣はしくなりて片時も早く歸宅せばやと心周章て、我知らず逸足出して露地に駈行く中に何に躓きか阿那やと一聲叫ぶより早く躓飛ぶばかりに頭顛倒に仆れたり。南無三寶と飛起や否や渾身の失傷より何より大事の藥瓶を如何にと見れば如何なる拍子か難有し忝なし、先づは無難の冥加なきにホッと溜息して安堵の胸を撫下し、天の助けか機みか何か、兎に角に父の命の藥、やれ〜お庇で拾ふた同然、明日一日の分は有りけり。

險香々々大事の物持ては走らぬ事よ、此瓶破りでも爲やうものなら大變なりしに、結構至極の倒け様なりき。左も無くてさへ此藥とお蝶の生命とは摺換へなるに、假りにも粗略になるべき事かと、此度は倒けても仔細無きやう内懐中に入れて褌袢越しの腹の邊へ深く潜ませ、お冷たやと身顛ひしながら躓跌いた石はあのれ何の石、親から貰うて十六年他人の指一本觸けさせぬお蝶が身の足の小指を酷くも破らせたはあのれ何の石、憎らしい奴め此れか此れかと醉眼に覺束なくて認めたりしを、口惜しげに下駄も踏鳴しつ蹴折きつ蹂躪りつ、腹立しげに舌打のみしてありしが、不圖心附いてハレヤレ失錯、一張羅の疊附壞れては成るまじ、金輪不動の大磐石憎らしけれと勝てぬ勝てぬと笑うて諦めし狂氣の沙汰も、生醉本性を違へざりき。

これに歩調を緩めてふらり〜、鼠色にどんよりとして而も氷のやうに何と無く冴えたる冬の空を、仰ぎながらの千鳥足は雲を踏んだる思ひせられ、魂魄烟のやうに飛んで宇宙に彷徨ふ醉心、夢見る氣持の茫として悠然として而も浮々して飄々して、日頃のくさ〜したる物案じはからりと忘れ、生れ變りし程鷹揚なる胸の中の小氣味よさ實に最う堪つたものにあらず。成程酒は百藥の長、飲めば甘露と人の云ふ其味は未だ了解らねど、兎にも角にも酔たる上の心地よさ、人間一疋斯迄性根の順に變りてお正月より大氣に成て清々してわつさりして、腹に云はれぬ元氣が出来て胸には烈火の燃ゆるやうなる元氣が出来て、なアに女の小腕でも嬌氣た野郎は打擲すと云ふやうな氣性にも成り、愚圖々々と要らぬ心配しやうより働いて採れの浮世の金錢、氣を使ふより體を使へる世話も有る、随分と骨折て儲くるに儲けられぬ弱い身ぢや無し、今の若さに泣暮らさうより一番必死と稼がうと云ふやうな、凛々しい根性にも成る處を見ると、成程酒は百藥の長、女なりとて男同様に親を養ふ稼人の此お蝶偶には酒でも飲んで氣を變へぬは、苦勞ばかりでは生命も續かず身體も衰へる。明日から少しづつ、寢酒位は始むべきかと、あはれ露に泣きし秋のお蝶は何處に行きし、不敵な胸を拳に拵いて吹けば河風と聞覚えたるを鼻唄に謡ひつゝ、折柄往來の人絶えし淋しき巷を踰ると、男の子のやうなる醉歩蹣跚、え〜酔つ



た酔つたと隠りつゝ行きぬ。

二町ばかり歩み来りし四辻にて摺れ違ひし男、置手拭の肩掛かせしを左さまに捻り、寒さうに懐の拳固を高くして、突懸草履に凍てたる道をハタ／＼いはせながら、満腔の酔を吐く熱柿臭き息虹の如く、少しは胴顔ひの氣味にて鼻の端で轉がして行く都々逸と云ふを聞けば、「佐用姫が石に成たは昔の事よ、現今の娘は金錢に成る」と鑄びたる咽喉の小意氣な節取り、お蝶我知らず耳傾けて何の氣無しに振り返りしが、心附けば何うやら身に逼さるゝ文句に、若しや我への聞けがしか。左様ならば扱えほらしい心意氣、成程現今の娘は金錢に成る。

昔聞く佐用姫といふ浮氣な姫君、どら程情郎が好かりしか知らねど、人間様が何事ぞ、物を言はれぬ夫れのみか乞食の土足にて階次第の石に成るとは飛でも無い悪い量見、現今時分の女が何の馬鹿な、百萬兩呉れると云つても誰が石に成るものぞ。如何にも死ねば骨か灰かに成るべき身なれど、生きながら石にとは眞平御免さ。勿體なけれど、譬へばが、桐壺の更衣と時めきて三千美人の焼餅で身を焼殺されむばかりの愛目に逢ひて、それ故離縁に成ればとて、何の何の石にか成らぬ。「現今の娘は金錢に成る」成程それに違ひ無い、我も纏ては金錢に成る、其中出世をする覺悟、如何にも佳く言ふた文句と思はずも打笑み、小聲の口眞似に謠うて見れば、

あや彼の人の癖が奪れた。

あゝ面白し面白し、今日は浮世が面白し。思へば僅一と月前迄、斯く云ふ我も世を果敢なみ、父様さへ居なければ責めて死ぬるが幸福だと、唯一隨に思ひ逼りても居たものを、頃日の浮世の面白さ、最早夢にも嘘にも假りにも、死なうななどと云ふやうな意氣地の無い馬鹿げた思案のかつぷつ世ぬやう成りしと云ふも、全く内儀様に附けられた智恵、此御恩忘れて成らうか。また夫れのみか藥禮の金子、おツと落しは爲ざりしか、否々有る有る大丈夫、此れさへ貸さうと云ふでも無く、親子の間で呉れて遣るとは何たる大氣、難有いとも忝ないとも云ふやきやうなき勿躰なき、否また夫れより其上に、葬式料としての大枚の金子、彼れまで我の財物にせよとは眞加さ餘つて眞に涙の溢れたりし、此大恩若し忘れたら犬畜生、御恩返しは運と智恵とで玉の輿に首尾よくフワリと乗ての上。あゝ早く出世が爲たい、若し玉の輿に乗れなければ、うんと云ふ程金錢が持たたい、そして早く御恩返しが爲て見たい。早く出世は爲たけれど、眞個に内儀様の云はるゝ通り、父様が居る間は假令目の前へ玉の輿が迎へに来ても、あゝそれと乗ては行かれぬ。但し内儀様の死なれた亭主を思ふたやうに、早く死ねとは露程も思はねど、氣の毒ながら父様は眞個に薄命な御性分、出来べき出世も父様故に



出来ないし、肝腎娘の出世した時は草葉の蔭から喜ぶだけ。それを思へば最早行末長からぬ事にもあり、よく／＼果報の拙い御身の上にもあり、一層孝行にして呈げねば眞個に立瀬も無い仕儀ぞと、思はず太き溜息して噫と仰ぎ見る空高く一痕の弦月恨みを帯びたる光凄く我を睨むかと怪しまれ、一陣の木枯しの風雲より落ちて亂醉を叱るかの如く腦天吹飛さんばかりに胸を蹴て、去て忽ち愛宕の森に吠え狂ひぬ。

お蝶は躓き倒れむとして危くも踏留り、骨を劈くばかりの寒さにぶる／＼と顔へ上ると共に、遠に茲に本氣に復りふ、忽ち又一散に駈出して程無く家に歸りける。

(十七) 渡世は大賭博で浮世は賭場と。

嘆きながらも暮せば暮さる、月日なり、况してや末の樂しみに今の辛さを忘れたるお蝶、朝な朝なの寢覺に玉の輿の幻を惜み、夕な夕なの枕邊の黄金の音を夢に聞き、嗚語にまでも出世を叫び、晝も立身の道を考へ、心は其れ等に奪はれて他事を思ふ暇も無ければ、浮世は元の浮世にして愛身は以前の愛身に非ず、愛身は變らぬ愛身にして涙は袖に忘れぬ。

泣けばとて瘦世帯、笑へばとて炊烟は絶たず。涙に渾身の細りこそすれ、笑厩に膩の洒れし事

なし、籠に啣く蟋蟀は昔ながらの音を絶たねど、今とて米櫃に巢を懸くる蟬蛸も無かりけり。是を思ふに涙の玉は拾はれず、笑うて金錢を取り損るは偽盲目の乞食ばかり、泣いて送るも五十年、氣樂に根消しするが徳なり。

お蝶は此迄悟らねど、今を忘れて未來の夢を趁ひゆく程に、一と月は呆る／＼ばかり疾く過ぎて、其年も早や暮近く、其處此處の煤拂の塵の烟に風下迷惑の頃ともなりぬ。

彼の藥禮の拂ひを濟ませてより遠に重荷を下した駒の我から口綱喰切て、一寸先は關雲の心も宙に有頂天馬と飛び出だし、唯無鐵砲に狂ひしお蝶も、今日の前に南無三寶の大晦日、此坂何とこしを抜かして、又も昔に引戻さるゝ轡の金故身動きならず、早や火の車の胸のみ跳りぬ。

店の駄菓子に順入が仕送りとて、資金後なる前借賣りの損知らず、少々ながら利得も有れば此れと貸裁縫の針の手に、縷の炊烟を兎にも角にも繋ぎ來りし今日迄は、古い借金を皆此の年末にと一寸逃れの尋の命。最早夫れさへ残り少く、短き冬の日敷を僅か、遠の心配に肚胸を衝かれて、昨日迄面白かりし浮世も、辛しとも辛き今日と成りぬ。

されどお蝶は泣かじと氣張りぬ。なアに浮世は面白い、瀬戸を越えねば鯛も味出ずと聞く。人間様も其通り、四苦八苦を斬脱けて、初て智恵も伎倆も出る。茲がお蝶の伎倆を練るべき大事



の瀬戸なり此晦日。なアに浮世は面白い、運次第伎倆次第如何なる出世も出来べき浮世、其伎倆試しに泣くものか、伎倆と智慧とで斬脱けるに何の債鬼めに負くるものか、泣かぬ〜とあはれは氣張りぬ。

辛いを面白いと強て氣張り、出ぬ智慧無理に出さんと懲れど、勿論甲斐なき我慢なり。なアに浮世は面白いと叫ぶも辛き後の溜息、無闇に絞れば智慧袋破れて何處迄も出ぬ思案の末は、不知々々溢るゝ不覺の涙の口惜しや。え、此れでは成らぬと熱立ちて、むしやくしやと疝癪を起した擧句は、何時も自暴酒の二三杯に萬事を忘れて、酔うて寝る夜の日敷を積れば、小娘に似げなき高軒に老の夢を破られて熟柿臭き寢息に父の泣く夜も重なりぬ。

斯在れば病人もあはれ容子の頃日甚く變りたるを心ならず覺えて寢覺々々の安からず、病の外にも胸を痛めて折々娘を枕邊に喚び、兎ても越さるまじき年の暮を抑も如何にして越す心ぞ、賣るべき家具も大方は洗盡したれど、尙銅釜迄も賣らば貸らるべし、寧ろ其方は何處かのお邸へでも奉公する覺悟にて兎に角に此阪を越せ、我身は眞實に死んで見せう、今でも見事に死んで見せう。お上の御厄介になる事は斯く成果ても厭やな根性、死すべき時に命は惜まぬ、其方の覺悟を聞かして呉れよと、思入ては中々に涙一滴溢しもせず恒の様に咳きも入らず、眼の

色變へて云ふも幾度、聞く毎にお蝶は大笑して、父様馬鹿をお云ひで無い、お前を死なせる決心なら、別段世間も可笑しく無い。お蝶も何時迄も嬰兒で居やうぞ、お前は黙つて藥を飲んで、其處で寝ながら見て居てお呉れ。私も來年は十七さ、些少は性根も有る揃り、唯一人の父様を餓死さすやうな馬鹿でも無い。安心して養生をよし、思はしい話は止してお呉れと、胸を掛いて何も此處々々、要らぬ心配は病氣の毒さ、と何時も云ひ流して立上り、偶には私の腕前御覽と云はぬばかりに、藥料の請取を見せて笑ひぬ。

口には立派に斯く云へども、お蝶も屈托に屈托を重ねて、到頭己が伎倆と智慧との云甲斐無きに愛想を盡かし、あゝ未だ馬鹿かと嘆息しながら、詮方竭きての神頼みの、神より貴く思へる内儀に委細を告げて阿母様も願ひ、一生の願が一つ殖えたよ。聽いてお呉れと故と嬌をて、一日手軽く無心を吹きぬ。

されど此日は遠の内儀も蝶のやうには笑うて呉れず、心配らしげに眉を顰めて無言に俯向きたる儘半時間ばかりは溜息ばかり吐いて在りしが漸う烟草を喫ひ初めても尙良久し返事もせず。お蝶は案に相違の胸の碎くるばかりに氣を挫きて、遠に顔色も青くなり何時か手先も顫はるゝ時、内儀は一層顔を盛めて、困つたねえと鬱悒き切たる聲音の低く、眞に蝶ちゃん今度は實に



困らせると、枕辭を置いて打出したる始終を摘めば。  
 長者も頭の痛い師走に、私とて梅が枝の手水鉢や金の生る木は有つては無し、云ふに云はれぬ  
 苦しい遣り繰りは、隠さぬ所が火の車、女の腕で斬て廻す辛い算段の内證咄しを詳しく爲るな  
 ら爲ぬでも無けれど、扱爲てからが未だ未だお前にも解らぬ事、夫れ故今日は何も云はぬ、唯  
 親の身が我が子のお前に許して呉れと拜むばかり。併し夫れではお前も困らうし私も棄て、は  
 置かれぬ場合、是非共何とかせねばならぬ八方塞りの苦しい思案が實は私の胸には有れど、覺  
 束ないはお前の納得、随分可厭な話でも有れば先づ譬喩から引いて見るに、章魚は餓えると我  
 が足を喰ひ、狐は我が尾を噛切て尻を脱れるといふ事よ。恰とお前が立派な裁縫の技を有ちな  
 がら仕事が無ければ不満ぬ洗濯でも厭はぬ道埋で、假令千人に立勝つたる技倆が有つても、運  
 が無ければ其技倆を揮つて見る事も出来ず、飢れば大事の其腕を啖つてなりとも生きて居らぬ  
 ばならぬ仕合、其處が浮世で誠に悲しいやうでもあるが、運さへ向けば一の裏は六と、昔から  
 相場は極めてある。結局渡世は大賭博で、先づ浮世は賭場さ。其處を諦めて茲で口惜しくても  
 悲しくても一番我が肉を喰てなりとも我が腹を養つて、行末伎倆を見せて呉れう、後來一旗舉  
 げて呉れうと、お前さへ男らしう覺悟を極めれば、何の造作も無い事と云ふ。

(十八) 太閤様は子守もしたよ。

お蝶も最早絶命絶命、今更覺悟をする迄も無し、如何なる變日も父子二人の生命には替へられ  
 ず。眞逆違へば私が死んでも父様だけは助けたしと云ふに、内儀兩手を擧げて遠は遠は、其の  
 覺悟の強い處に私の惚れたが無理か無理か。其處迄腹が据つて居れば、先づ安心と身を乗り出  
 して、耳に口寄せ食久し何事かを叫く程に、お蝶の顔色見る／＼青くなり赤くなりて、聞く間  
 も吐息を忍び得ざりき。

内儀は臆て元の坐に膝を退き、無言に惜れたるお蝶をぢろ／＼と眺めつゝ、そりや何うせ口惜  
 しくもあらうし悲しくも有らうけれど、此處が餓えて足を喰ひ、尾を噛切て尻を逃げる切場の  
 苦しみで、外に道が無いから仕方が無いのさ。殊に一日に苦しみと云へば云はるゝ様なものゝ、  
 それも心の持ち様一つで、保養の爲の道樂と思へば思つて済む事なり、其氣で居れば居られる  
 事だ、よしんば左様は思はれぬにしろ、此處は一番胸に手を置いて、よく／＼考へねばならぬ  
 處さ。まア物を描つても見な、斯う推詰つてから、誰だつて一錢でも不用な金子を持つ筈は無  
 いよ、假りにも懐に遊んだ金子の有ると云へば、先づ不宿住居の獨身者に限つたやうなものさ。



お前様達は未だ世間を覗かないから、斯う云やア不思議に思ひませうが、立派な紳士面して居ながら其實懐は何時でも同じ秋の夕暮と云ふのも有るし、風采はからきし書生さんで、内證は暖々して居る人も有る。だから石田様だつて、貧乏官吏と頭から輕蔑しちやア物が間違ふ。どらやら厭やと云ひたひ顔だが、先一應は私の云ふ事を聞た上で、胸に手を置いて考へて御覽、眞固に餘り警いやうだが、私は眞實にお前を子と思つて居るから、決して爲めに成らぬ事は云はないよ。今日は幸ひ彼の方が留守だから、身上の詳しい咄を爲て聞かさうが、お前も知ての通り、石田様の月給は二十兩さ。またが御家郷が大變な豪家ださうで、一鉢彼の方が總領なんだが、放蕩をして勘當に成たので當地へ來て改心の上の御勤めさ。だから今では勘氣も緩びて彼の方へ田地の分地が爲て有るさうで、年貢が正金で年々二三度宛爲替で來るよ、弟様が世繼に決つて、石田様は當地で勝手に家を持つ筈とさ。其年貢の金が中々少々な物で無いから、何時も幾許かの金子は有り餘つて居るけれど、改心者と云ふ奴はケチなもので、意氣な遊興も爲得ないで、其癖失張相應に死金は棄て、居るよ。だから絞れる丈絞つても結句奇麗な金の使ひ様を教へて遣る道理で、些少も罪には成らぬのだ。殊更お前には目も鼻も無くして仕舞つて、是非思を遂げぬば癡病になるなど、毎日私にやい／＼云ふんだもの、後生に成ても罪に成らう

筈が無い。總じて此様な工合に、先方が火に成て來ないぢやア相場外れの儲が出来ぬ。今云つた位の價額なら、烏森あたりのお茶引きで無いのが大抵ならばチ、ライだよ、素人には柄に無い事だ。何うなの蝶ぢやん氣無しかえ、餘り憎くは無い人だよ、小使取りには旨過ぎる話だし、何も此れが行末の疵に成ると云ふでは無し、徐々始めるのも可いでは無いかと、無上に勸められてお蝶もふいと其氣にも成り、且や行末の疵に成らぬと云ふが力に成りて、餘り好ましようは無いです、夫れより外に道が無ければ百年目、死んだと思へば生命だけでも儲かり物です。斯うなれば愚痴も云はれぬ斷末魔と思つて、え、口惜しいが諦めました。仕方が無い、お言葉通りに成りませう、と速に涙を目に湛ちながら、云切る語氣に力も有りき、さる代り一と月限りですよ。

それは固よりの事、何時迄彼様な人等の慰みものに成て居られるものか。併し今度は負賭博の胴頭ひで、男ならば犢鼻褌一つの裸躰百貫、女だから湯巻の競賣、法外の高價札で諦められたものでは有るが、意氣地の無いのは勿論さ。口惜しいはお前獨りで無い、私だつて餘り面白くは思はない。またがまアお鬱悒で無いよ、古い事を云ふやうだが、太閤様は子守も爲たよ、出世の上では夫れも咄の種に成るわさ。お前だつて女の太閤様と云はれぬとも限らぬよ。何も運



次第、又一つは伎倆次第の骰子の目だ、眞個に泣くには當らない、賭博に負けて一々首釣る野郎も無いさ。殊更價格に不足の不の字も云へないし、實の處が無鐵砲な掛直で義理も無しに欺して絞上げるのだ、其處は私の覺えの腕だ、まアくそれを取得にして、必ず力を落して無いよと、尙様々なる言葉を喝して慰められ、お蝶も漸う俯向けたりし面を擧る苦しき笑顔、いえ最う素張諦めましたよ。併し私は今日迄も、此様な事を爲ねばならぬとは夢にも思染めずによ。先般もお云ひの通りに、最初から御坐舟と云つたやうな大きな心で居たものをと、何うやら愚痴らしい言葉に内儀周章で、制し止め、それは私も同前だが、儘にならぬが浮世だよ。斯う至急な咄でないよ、外に幾許も仕様が有れど、と云掛けて逃に氣を變へ、なアに御坐舟の船御に卒度便泊する迄だ、初物と云ふ所で勿論うんと絞るのだが、未だ二三度は随分手入らずで通せるから可い、併し無差々と勿躰ない、畜生彼奴は果報な奴と、膝を拉かれ顔を見られて、お蝶は青くなりて身を萎縮めぬ。

あや其様なに厭やなの、滿更でも無い事だに。兎に角明日は好い時分に使をあげるから、何時外出しても可いやうに留守の準備を爲て置くが可いと、話は此に果て、氣がくさくして不可い一杯遣らうと後は酒になりぬ。

お蝶も胸の有耶無耶を忘れむとて今日も又無茶苦茶に仰飲り、化粧料に若何を貰ひ、え、自暴だと立掛けに又二三杯を續けさまの鵜嚙、まア何時の間にも内儀を呆れさせ、曇りのやうなる星月夜、泥のやうに酔うて歸宅りぬ。斯くても返に自ら慰むる由はあるにや、颯きながら俯向きて行くく、小音に謠ふも哀れ、現今の娘は金錢になる」

(十九) 娘、渡世をおぼえたか。

翌朝お蝶は髮結の許に行きて一昨日結びしばかりの緒熊を島田に結替へさせ、其足で湯に入り、歸れば直に鏡臺の前にて化粧を凝し、濟めば昨日貰ひし金子を取出して質屋へ走り、帯小袖の一揃へを受けるなど、忙しき準備なりき。

萬事を済ましてハツと一息、火鉢の前に坐を占めて一碗の茶に氣を静め、纏て次第に俯向く首を片手の頬杖に覺束なく凭たせて片手に把りし火箸に火を揺動かし灰搔均し、良久しは物案じ顔の眉目の曇り漸うに深くなり勝りて、次第に渾身も萎縮み勝に見えたりしが、何時と無くほろりく溢る、露の一雨二雨、火に落ちて沸ゆる音に驚きて我に復り、え、も眞個に馬鹿けた話だ、諦められぬと獨語ちつ、頭を擧げて、端なくも見し時計の針に又驚き、とつかわ立て



決水槽場に行きぬ。

程なく奥の病人の呻くやうなる聲するに、心も心ならず周章して、飛んで遠りしお蝶、片手の土鍋を火鉢の上に移しながら、覗くに父は熟睡の体、眞に娘が可憐な口惜しい思をして切無しの活計を立て、居るとも御存知なく、眞に知らぬが佛とか、佛様のやうな顔をして軒もせずにあゝ最うちやつと御熟睡さうな。口には云はねど父様夢にでも聞てお呉れ、私は出世故なら何んな事でも厭ひはせねど、まの情ない僅此晦日を越したいばかりで、玉の輿にも乗れば乗らるる大事の身を、不満ぬ書生づれに任せねばならぬ今日の仕儀、これもお前故と知てか。よもや知ては居られまいが。お前さへ居ねば私は今頃内田の娘、氣樂らしう春衣の詮議でも爲て居やう、其處を思つて少しは父様、不便とも健氣とも云つてお呉れと、心で翻す愚痴の繰言、云はぬは云ふより悲しさを愈増して、土鍋に移す罐子の水に仇し涙の車を添へぬ。

折柄店先よりお蝶様と聲を掛けて遠慮も無くづか／＼と入來たりし内田のお染、何が嬉しきか頰れるやうに笑ひながら耳に口寄せ二言三言打叩くにお蝶は幾度か點頭きて小指の白魚に雲鬢の生際を掻き上げつゝ、それでは直に御飯を濟まして行かうから、左様云つてお呉れ。あの夫れからお前様に御願が有るのよ、お化粧なんか爲て斯様な様で私が行けば兎や角叔母さんが云

ふからぬ、歸途に卒度頼八様の宅へ寄て呉んな、清ちやんに例の通り留守を頼んで來て貰ひたいのよ。あらお前様、ちやつと清ちやんと懇意く成てる癖に、其様な事を云はずによ、後生だ私に行けないから。だつて叔母様が何とか云ふと五月蠅いやね、お前様なら何の造作も無いのだよ。門から清ちやんを呼出して、つい卒度耳打して呉れ、ば氣輕者だし遊んでも居るし、何と云つても頼八様から命令であるから、代理のお前様でも不承知は云はないよ。後生だ是非共左様してお呉れと、頼まるゝ程尙厭やな顔を迷惑らしく打盛めて咄仕方が無いと舌打鳴らし、私の爲には御主とも云へるお嬢様様のお前様だ、もぎどうに厭やとは云はれぬ義理が、義理と積鼻揮熱られ面白く無い奴さ。あゝ使者は承知の助、姫君様にはお樂みか、お役目御苦勞とも云はねえで、覺えてお出で背中をビシヤリ。アレサお止しよ馬鹿々々しい、お前様ぢやあ有るまいし、私は口惜しくつて泣いてるのよ。ハイ／＼お察し申します、無や無や嬉し涙が溢れる事でも、飽迄黽て立上るを、アレまだ彼様など怨めし相に睨むを後にハイ左様なら。

跡にお蝶は齟齬して、お染程馬鹿も無いものだ、へん些少はお前等とは違ふのよ、假りにお蝶が斯様な事を、假りに嬉しがると思ふのから。今に見る出世の上は、お前の眼玉が翻娘



ると知らないかと、口の中にて呟き呟き、茶碗取出して香の物を菜に茶漬の二三碗を埒も無く掻込みて食事を済し、折柄沸立つ土鍋を降して肉汁を温め、鼠入らずより取出したる鶏卵と鮭の刺身の小皿とを膳に乗せて蜜柑を切て添へたるは肉汁の口直しといふにもや、齧き處に手の届く注意の程の細やかなるは、男に真似のならぬ事、此を思ふには優しきものは女の愛なり。今は晝餉も調ひたれど、朝よりすやく眠り眠りて病苦の程をも折角に忘れ玉へる華宵の夢を、遠に驚かさむも心ならず少しは躊躇ふ氣味なりしが、外出を急ぐ身の止むことを得て靜に膳部を輿に運び小聲に父を喚起せば、二言目に寢覺して、あゝもう晝かど力なげなる生欠、妻れ果たる身を重たげにえんやらやと寝返り打て懶げに箸を取上げ、あゝ御馳走だと嬉しき言葉、打微笑みて見上げるにも早や涙なる老の目に、見交すも蝶の目も涙、何のまア此れが御馳走ぞ、來春にもなれば何とか工面して滋味い食物も呈げられませう、併し御好物の鮭は昨宵一尾買ひましたから、好ければ幾許でもお取りよと、云ひつゝも父の思惑恥かしき化粧の顔を兩袖に掩ひ懸して、あゝ寒い風が來ると障子の破れを故とに見るも哀れなり。

父は無言に一碗の粥を啜りて茶碗を渡しながら、娘、渡世を覺えたか、と消行くやうに幽かなる聲して、悲しげに熱々凝視る後は溜息、此れにお蝶は何となく胸騒ぎて思はずも顔を赤め、

兎角の言葉も出で兼ねて唯悄悄と俯向きぬ。

(二十) 小さな名刺。

父は幾度か嗟嘆して、あゝ否お蝶、己れは決して叱りはせぬ、無闇に頑固を立通した昔の己れならいざ知らず、己れも今では己れの氣性に愛想もこそ盡き果てた。だから叱らぬ反て褒めぬ。馬鹿正直と馬鹿律義とで渡世の道を陥外し、昔氣質を出せば出す程、今の時勢に陥潰され、永の貧苦と病氣とに骨も腸も無くなつた此様なみぢめな意氣地なしは子を折檻の舌も無い、蟹は横行を子に教へ、蜂は網に似よと云ふさうなが、己れは己れに似るなど云ふばかりだ。だから前前は随分と當世風な氣性を持って、時勢に倣つて身を立てる。今の時勢、は賣色も格別恥で無い、何爵夫人と云はる、方々にも、藝妓上りが多いげな、此れで何ぞ侯爵伯爵、講釋師猫杓子の異名でも有るかと、不知云て見たいのが矢張馬鹿だ時勢後れた。東照宮様の御末流が武職に離れ玉ふた昔を思へば、王は十善神は九善とやら、勝てぬは天下の御時勢だ。あゝ昔氣質は糞にも劣つた御時勢だ。何も云はぬ、己れ等の警告吐く世間で無い、黙て死んで主従は三世だ、未來で飛驒守様の御目に懸かり、今一度鎗を掘いて見たい。あゝ死後れた死後れた、お蝶







知る時雨のそぼふる夜など、殊更袖の濡れまさりぬ。

されども斯る憂目の甲斐は、愈又大晦日の日に現はれて前金にて受取りし月極めの金子と、其外の手當とに何の苦も無く年を越し、明ればお蝶十七歳の新玉の春、病人も朽葉の如き笑顔を屠蘇の酒盃に浮べて、去年のよりも大きな鏡餅に、娘の腕前を天晴と稱へ、要らぬ生命も遺に年一つ拾ふ嬉しさに、愁眉を開きし甲斐も無く、門松は寔に冥途の旅の一里塚、また七五三細を焚かぬ先より、茶毘一片の烟と成て、無常の風に滅え失せぬ。

約束通り萬端の費用は内田の内儀の仕拂ひにて、葬式も近隣の人目に案外なる程派手にして、七々日の佛事も滞りなく済みければ、お蝶は公然養女として内田に引取らるべき筈なりしに、人の心も飛鳥川、淵瀬と變る浮世なりけり。お蝶が恩義を忘れしか、内儀が愛を捨てたるか、義理と情とに繋ぎ來りし母子の縁もゆくりなく断れて、残るは互の怨みと怨み、途に逢へば詮なく言葉を交せども、睨み合ふ目を外さぬ迄の中となりぬ。

確執の原因は縁談なりき。他の依頼に手易く片袒脱ぐ内儀の癖とて、金錢づくには双袒を脱ぎはだけ、拜むと合せたる内田の手を搔拂ひ、吉左右は臆て、萬事は呑込の媒人口、八分迄は許す習の嘘も、内證を知れるお蝶には無益と、何よりも親の威光を笠に被て、理も非も無しの壓

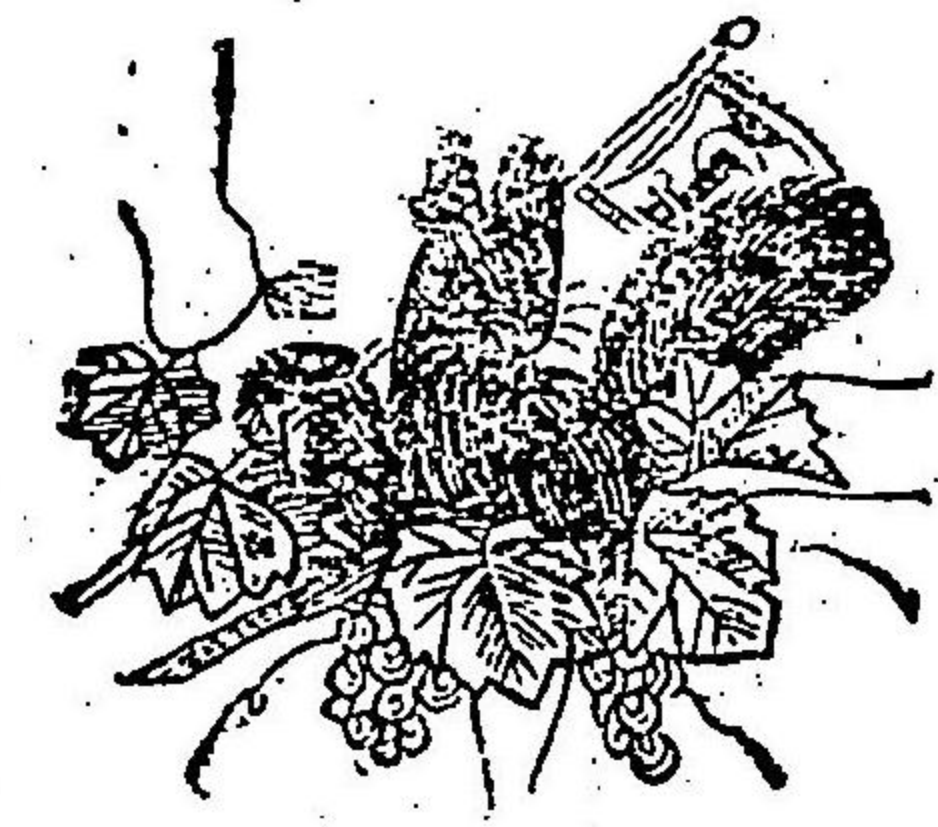
制に、厭がるを叱りつ賺しつ、義理で抑へて情で縛り、恩を械に言語で責付け、退引させず説立てしに、お蝶は石田を貧乏官吏と卑しめるのみか、頭から足迄虫が好かず、これと百年の契夢にも思ひ寄らぬ事と何處迄も不承知を云立て、互に我意を張りし末は、互に縁断れの果となりて、貸したる金を返せ返さうの別れになりぬ。

金の才覺に飽迄苦しませて、無理往生に納得させんと畫みたる内儀の恩恵は見事に外れぬ。其後お蝶は藝妓齣を見せびらかし、出の衣装をひけらかして、人力車を待たせて送寄りですよと内田を訪ひぬ。

目を丸くして呆れ惑へる、昔の母なる内田の内儀を、お蝶は冷笑の鼻息に吹き飛ばして、此商賣が出世の近道かと存じます、どうか玉の輿にでも乗れましたら、いづれ御恩返しを致します、今日は先づと四十何圓返済して、利子などは他人行儀、お土産の代りにと幾許かを別封にして、故とにや新橋何屋小蝶と記したる小さな名刺と共に、膝の上に乗せ置きて、石田様に宜しくと捨置詞して還りける。

# 露の蝶終







實價五十錢

### 梨園之落葉

郵税十錢

春の舎主人坪内逍遙氏が梨園の子弟に望む處の大意見を収む或は劇論或は評釋之を論し之を訓へて誘導開發深く斯道の發達を期するもの也

### たんたら染

柳浪著  
年方畫

これ嵯峨舎主人の數年の著作を集めたるもの小説雜錄韻文紀行等紙數殆んど三百頁に上

### 文之庫

る口畫は鈴木華邨子の艶筆になれり實價三十五錢郵税は六錢其廉なる蓋し稀なり

### 俳諧名家選

紅葉編  
實價卅錢

### 笠の露

篁邨翁が近時の傑作筆々輕妙にして情緒味ふて悉きざるもの其文圓滑にして楚々人を動かすの趣きあり菊版極彩色の美本實價卅錢郵税六錢口畫は富岡永洗子なり



亭々たる孤松天際を凌ぐの處朔風屢ば枝を鳴らせども節操尙凜たり以て士の行に比すべし本書は遅塚麗水氏が其

**照日之松**

龍を搏ち虎を捉ふる底健筆を縦横して紙上に紫蛇を躍らし金龍を走らしむるもの勇壯なり活近古稀なる好著なり

三島燕窩水著  
郵税六錢  
實價三十錢

森鷗外著

古博覽記にして東林西識に於て新著を採り集め小尺等々を練り筆話の得色を玉に愛惜すべし

草げか

金句を標はす書の色なり

實價未定  
郵税未定

**鷲の羽風**

猛鷲一搏蒼穹を劈いて下るの處彈丸機を發して洞然其胸を洞す猛鷲果して何者を獵者果して何者を讀過一番蓋し思ひ半に過ぐるものあらん

村井並齋著  
水野年方畫  
實價三十錢  
郵税六錢

**網代木**

窮措大奮然志を立て、互ひに向後の方針を定むるの後二生東西に相隔つと雖も後年の會合果して如何の感かある本書は實に理想の織襪なるものを練つて經營慘憺始めて梓に上すに至れる大冊子なり其始め輕々讀過するの人も終に身の其境に蒞むが如きの思あるに至らん

川上眉山著  
武内桂舟畫  
實價廿五錢  
郵税四錢



鎌ねわ坊

怒浪天を衝き暴風海を覆へすの處健兒斧を揮  
つて氣更に鋭なり文身の丹青はこれ浮世の鎌  
わぬ坊一氣嚙を介して舟遂に全き大快話

江宮實郵 見岡 價税 水永 廿六 著書錢錢

北條早雲

千兵蕭々夜河を渉る函山の麓隠るれば林中一旒の旗幟  
なく現はるれば八州の草木悉く兵となる神出鬼没端睨  
すべからざるものはこれ新九郎が用兵の法又蓼州翁の  
筆鋒に似たり

原内 價税 豊桂 州舟 四八 著書錢錢

本特書殊長所

一、採集 語數全 **五萬** 其必要に因り用例を添ふ〇二、採集の語に於ては **新語** 上古の通語俗語方言  
三、附録と **無限七曜表** 第二 **漢字假名遣** 第三 **難字地名彙** 第四 **疑似**  
しては第一 **漢字表** (千千弋戈己巳) **年號類集** 第五 **日本海陸交通全圖** 等其細  
比類無

山美編 田齋纂

新節用辭典

中總 七百四十 本 美 七 頁 價 八 錢 餘 錢 八 稅 郵

本書は從來の節用集の外全く **一機軸** を出したるものにて著者が日本大辭書編纂の間經驗に基き専ら普通用として廣く **農工商** 其の何れにも適するものなり此辭典韻を備ふれば常用に際し此上もなき便利なるべく殊に其價格の **低廉** なる所もあり古語と假名遣等を嚴密に正したれば操

伴侶たるべしと云爾

發行所

東京日本橋區通四丁目

春

陽

堂







臨外氏の言を立つるたいに一時のためにするのみならず、こゝをもつて他の  
 人の放論恣議は當時に在りては甚高く甚妙なるが如くして而も時去りて之を  
 視れば鉛の光を失ひ霜葉の長く鮮やかならざるが如きに似ず、時を経てこれ  
 を視れば其言いよ／＼重んずべく、明珠の長く麗き松柏の常に緑なるが如き  
 其論いよ／＼重んずべく、明珠の長く麗き松柏の常に緑なるが如き

鷗外漁史著

ついで

近刊

謙遜の語のみ。此篇收むる。識や邃其文や雄、薄文字  
 誰かうつろひやすく、消ゆるに早き花の色なりとこれを云ふべき。江  
 諸君一本を購ひて讀み玉は、此廣告のいつはらざるを知り玉はん。

明治三十年九月廿一日印刷

同 年九月廿六日發行

實價金拾五錢

東京市日本橋區通四丁目五番地

編輯兼 和 田 篤 太 郎

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地

印刷者 佐 久 間 衡 治

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所 春 陽 堂

(本局電話五十一番)

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎 第一工場

(電話本局十九番)

